

小津久足『柳桜日記』

菱 岡 憲 司

解題

『柳桜日記』は、文政十一年（一八二八）、小津久足（一八〇四～一八五八）が二十五歳の折、二月二十四日に松坂を出立し、京都に滞在して諸所を遊覧し、大坂・河内・和泉を巡ってふたたび京都にもどり、葵祭を見物したのち、四月二十一日に松坂に帰着するまでの紀行文である。久足は生涯に四十六点の紀行文を残しており、本作は四作目にあたる。また、四十六点のうち二十一点で京都に赴いているが、京都滞在をはじめ記した『石走日記』（文政七年。拙稿「翻刻 小津久足『石走日記』」山口県立大学学術情報 一八、二〇二五）に次ぐ本作は、三巻三冊という初の複数冊の紀行文であり、『石走日記』とくらべると記述の詳細さが際立つ。

冒頭、「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」（素性法師、『古今和歌集』春上・五六）という人口に膾炙した歌を引き、柳や桜で彩られた都の春を見ようと旅に出たことを記す。『柳桜日記』と題する所以であり、書名の「柳桜」は「やなぎさくら」と読むのがよいだろう。

この文政十一年、十一月七日に師の本居春庭が没し、また十二月四日には、はじめて馬琴と面会するなど、久足にとつて人生の転機ともいえる年であった。そして『柳桜日記』には、後年の「古学離れ（国学離れ）」につながる、宣長説への疑義が萌している（拙著『大才子 小津久足』第二章〈中公選書、二〇二三〉）。当時、久足は『延喜式』神名帳の注釈を志しており（「おのれはやく倭魂みがきしをりは、『式』の神名帳に注をせまほしくおもひしことありて、それにつきてはおほくいとまをつひやしたり」『班鳩日記』天保七年三月三日）、本作でも積極的に神社を訪れ、古墳をめくっている。

また、三月六日に祇園神社の能・狂言、三月十日に今宮神社の安良比祭、三

月十七日に壬生寺の壬生狂言、三月十九日に伏見稲荷大社の御出、三月二十三日に光格院の修学院離宮行幸、三月二十四日に壬生寺の壬生狂言、三月二十五日に千本閻魔堂（引接寺）の狂言、三月三十日に大坂道頓堀の芝居、四月十日に伏見稲荷大社御旅所の稲荷祭、四月十三日に御蔭祭、四月十六日に下鴨神社の葵祭と、雅俗両様の催しを見物し、それぞれの様子を詳細に記録するなど、資料性も高い。

行程

『柳桜日記』中の地名・神社仏閣等を抄出して行程を記す。移動中は地名が、京都滞在中は神社仏閣等が中心となるが、あえて整理せずに同列に拾いあげた。以下、誤りと思われるものは傍記で正し、また誤りでなくとも、現在と呼称・表記が異なるものは、括弧にて現在の名を記した。

2月24日 松坂、三渡、小津、曾原、中道、肥留縄手、雲出川、小森、高茶屋、上野、垂水、藤方、片樋の宮の跡（加良比乃神社）、千年山、津、部田、中野、平野、森、一身田、高田山専修寺、久保田（窪田）、野崎、豊久野、銭懸松、高野、長野の松原、椋本、中繩、林、楠原、古駅（古厩）、関川、関、地藏堂（宝蔵寺地藏院）、一瀬（市瀬）、筆捨、筆捨山、檜木、杏掛、坂下【日野屋泊】

2月25日 坂下、石村、鈴鹿川、鈴鹿神社、すゝか山（鈴鹿山）、峠（鈴鹿峠）、沢、桜松、榎木、山中、大平、女夫坂、猪鼻、蟹が坂、田村川、田村神社、土山、松尾川（野洲川）、頓宮、前野、市場、石室、大野、今宿（今在）、小里、新庄（新城）、栗林、月上、水口、城山、林道、北脇、泉

- 横田川(野洲川)、田川、吉永、夏見、針、平松、柑子袋、石部、金山、伊勢落、林、梅木、野村、手孕^⑧、釣里、目川、本袋^⑧、草津、立木大明神(立木神社)、矢倉、野路、玉川の跡、月輪、大江、神領、瀬田
- 【伊勢屋泊】
- 2月26日
瀬田、龍神社、田原藤太秀郷社、長橋(瀬田の唐橋)、粟津の松原、今井兼平の塚、膳所、石場、大津、四宮(天孫神社)、鞠神社(平野神社)、上宮、下宮、関清水大明神(関蟬丸神社下社)、蟬丸宮(関蟬丸神社上社)、あふさか山(逢坂山)、大谷、蟬丸の宮(蟬丸神社)、追分、山科、陵(御陵)、天智天皇陵(山科陵)、日野岡山、白川橋、三条の大橋、祇園社(八坂神社)、長楽寺、東大谷、智恩院、三条大橋【目貫屋泊】
- 2月27日
京都滞在 清水の観音(清水寺)、地主権現の御社(地主神社)、高台寺
- 2月28日
京都滞在 大仏(方広寺大仏殿)、蓮華王院の三十三間堂、池田、今熊野御社、一の橋、滝尾社(滝尾神社)、三聖寺、万寿寺、東福寺、通天橋、稲荷社(伏見稲荷大社)、石峰寺、宝塔寺、三十番神の社、深草、瑞光寺、元政庵、極楽寺村、嘉祥寺、安楽行院(深草北陵)、谷口、桓武天皇陵(柏原陵)、大亀谷、即成就院、元御香宮、仏国寺、伏見の桃山、宇治見台、龍雲寺、天神御社、指月山月橋寺(月橋院)、豊後橋、御香宮、深草寺、墨染寺、竹田、安楽寿院、西行寺、北向不動院、美福門院の御墓、白河院陵、城南神の社(城南宮)、真幡寸辻、秋の山、油小路、不動堂(不動堂明王院)、道祖神(道祖神社)
- 2月29日
京都滞在 錦天神、誓願時、蛤薬師、【知人訪問】
- 3月1日
京都滞在 北野御社(北野天満宮)、平野御社(平野神社)、安産天神といふ御社(敷地神社、わら天神宮)、鏡石、鷹峰(鷹峯)、紫野、今宮(今宮神社)、大徳寺、上御霊社(上御霊神社)、鞍馬口、下加茂(下鴨神社、賀茂御祖神社)、川合社(河合神社)、加茂川
- 3月2日
京都滞在 新玉津島御社(新玉津島神社)、俊成卿の社(俊成社)、因幡薬師(平等寺)、新善光寺、塩竈大明神、市姫大明神(市比賣神社)、御影堂、五条の橋、籬島の跡、川原院の跡(河原院址)、西大谷(大谷本廟)、要法寺、清水(清水寺)、歌中山、清閑寺、高倉院陵、小督局塔、若宮八幡(若宮八幡宮)、長楽寺
- 3月3日
京都滞在 祇園(八坂神社)、安井(安井金比羅宮)、崇徳院御廟、智恩院、大内(御所)、千本、木島御社(木嶋坐天照御魂神社、蚕ノ社)、大秦、広隆寺(蜂岡寺)、大辟神社(大酒神社)、桂宮院といふ堂(桂宮院本堂)、車折神社、嵯峨、渡月橋、大井川、嵐山、とな瀬の滝(戸無瀬の滝)、天龍寺のうちなる雲居庵【雲居庵泊】
- 3月4日
京都滞在 天龍寺、大井川、嵐山、渡月橋、大悲閣(千光寺)、法輪寺、渡月橋、亀山院陵、天龍寺、任有亭、大秦、三条大橋西詰目貫屋
- 3月5日
京都滞在 祇園(八坂神社)、智恩院、長楽寺、東大谷、双林寺、高台寺、清水(清水寺)
- 3月6日
京都滞在 聖護院、桜塚、熊野宮、崇徳天皇社、左府社、黒谷(金戒光明寺)、真如堂、芝薬師、東北院、和泉式部塔、軒端梅、吉田(吉田神社)、大元宮、春日社、霹靂神社、百万遍(百萬遍知恩寺)、干菜寺(光福寺)、福塚(後二条院陵)、北白河、銀閣寺(慈照寺)、岡崎、本光寺、法勝寺の塔の跡、青蓮院、庚申堂、智恩院、明智光秀首塚、祇園(八坂神社)【能・狂言見物】、円山安養寺、蓮阿弥
- 3月7日
京都滞在 神泉苑、大秦、嵯峨、臨川寺、鹿王院、嵐山、大井川、野宮、常寂光寺、定家卿の時雨亭、定家卿社、二尊院、時雨亭、厭離庵、為家卿の御墓、定家卿の御墓、帷子辻、甲塚(甲塚古墳)
- 3月8日
京都滞在 東漸寺、東大谷、双林寺、祇園女御墓、長楽寺
- 3月9日
京都滞在 南禅寺、永観堂(禅林寺)、若王子社(熊野若王子神社)、光雲寺、鹿谷、住蓮山安楽寺、鈴虫、松虫といふ女の墓、万無寺(法然院)、智恩院、長楽寺
- 3月10日
京都滞在 上鴨の御社(上賀茂神社、賀茂別雷神社)、今宮【安良比祭見物】、雲林院、船岡山、円融院をかくし奉れる所、陵ふたところ(近衛天皇火葬塚、後冷泉天皇火葬塚)、蓮台寺(上品蓮台寺)、千本閻魔堂(引接寺)、千本釈迦堂(大報恩寺)、北野(北野天満宮)、紙屋川、平野社(平野神社)、等持院、龍安寺、仁和寺、並岡(双ヶ岡)、妙心寺
- 3月11日
京都滞在 智恩院、長楽寺、双林寺、目疾地藏(仲源寺)
- 3月12日
京都滞在 蛭子宮(恵美須神社)、建仁寺、松原通の橋(松原橋)、南

3月13日
岩倉(不動寺)、六角堂、瑞泉寺、秀次公の墓
京都滞在 一の橋(一之橋)、崇道天皇塚本社(塚本社跡)、田中社(田中神社)、稻荷社(伏見稻荷大社)、上の塚¹⁾上の社、中の社、下の社、中茶屋、勤修寺、勤修寺の宮、三条右大臣の御墓(藤原定方墓)、八幡社(吉利俱八幡宮)、宮路氏弥益といふ人をまつれる両社大明神(宮道神社)、小野、随心院、醍醐(醍醐寺)、醍醐天皇陵(後山科陵)、朱雀天皇陵(醍醐陵)、大宅、岩屋明神(岩屋神社)、馬背坂、坂上田村麿の君の墓、栗栖野、稻荷社(折上稻荷神社)、花山、花山稻荷社(花山稻荷社)、南花山、上花山、福應寺、小松内大臣重盛公の御墓、遍昭僧正の墓、北花山、元慶寺、東山寺(華山寺)、渋谷、梅本寺、渋谷越、小松谷、正林寺(小松谷正林寺)、継信・忠信の墓、三島明神

3月14日
京都滞在 綾小路、大原社(大原神社)、西本願寺、興聖寺、本国寺
3月15日
京都滞在 御所八幡(御所八幡宮)、本能寺、大雲院、天満宮(火除天満宮)、信長公の御墓、信忠公の御墓、加茂の川原(鴨川)
3月16日
京都滞在 北白川、將軍地蔵、一乗寺、さがり松(下り松)、八大龍王の御社(八大神社)、詩仙堂、赤山神社(赤山禪院)、修学院の行宮(修学院離宮)、山崎、加茂川(鴨川)

3月17日
京都滞在 御磐昌社(繁昌神社)、五条天神の御社(五条天神宮、天使の宮)、菅大臣御社(菅大臣神社)、七条、粟島社(粟嶋堂、宗徳寺)、芹根水、東寺、八幡御社(鎮守八幡宮)、八島大明神(八島社)、遍照心院(大通寺)、六孫王経基公の御墓(六孫王神社)、朱雀、権現堂といふ寺、六条判官為義の墓、島原、出口柳、壬生寺【壬生狂言見物】、隼神社²⁾くさ神、空也堂(極楽院)

3月18日
京都滞在 霊山(正法寺)、八坂の塔(法観寺五重塔、清水(清水寺)、土公神の社、愛宕寺、六波羅蜜寺、珍堂寺(六道珍皇寺)
3月19日
京都滞在 七条河原、松明殿、稻荷の御社(伏見稻荷大社)【御出見物】、泉涌寺、夢の浮橋、今熊野観音(今熊野観音寺)、善能寺、劍宮(劍神社)、幻観音、今熊野御社(新熊野神社)、蓮花王院、耳塚

3月20日
京都滞在 藤森の御社(藤森神社)、大亀谷、六地藏、木幡、柳大明神³⁾許波多神社、大和田、黄檗山萬福寺、三室戸寺、蜻蛉石(線刻

阿弥陀三尊仏)、宇治橋、彼方町、宇治彼方神社(彼方神社)、橋寺(放生院)、離宮八幡(宇治神社、宇治上神社)、恵心院、興聖寺、宇治川、東禅院、橋姫の御社(橋姫神社)、平等院、扇の芝、鳳凰堂、【船路】、伏見、豊後橋

3月21日
京都滞在 【知人訪問】
3月22日
京都滞在 安井(安井金毘羅宮)、清水(清水寺)、祇園の御社(八坂神社)
3月23日
京都滞在 加茂川(鴨川)、柳茶屋【光格院修学院御幸見物】、下鴨の御社(下鴨神社)

3月24日
京都滞在 壬生寺【壬生狂言見物】、護真寺
3月25日
京都滞在 北野御社(北野天満宮)、大將軍社(大將軍八神社)、椿寺⁴⁾地藏院、成願寺、妙心寺、並岡(双ヶ岡)、長泉寺、北野御旅所(北野神社御旅所)、郭公天神(一ノ保天満宮)、伝法輪寺(法輪寺)、清和院、蜘蛛塚、千本のきりしま寺、閻魔堂(引接寺)【狂言見物】、相国寺、中御霊、下御霊(下御霊神社)、浄華院(清浄華院)、廬山寺、革堂(行願寺)

3月26日
京都滞在 【知人訪問】、四条の橋、【祇園登楼】
3月27日
京都滞在 雀森、昔の勸學院の跡(勸學院址)、なぎの宮(元祇園榎神社)、蛭子宮、千本通、西院、春日の御社(西院春日神社)、高院の森⁵⁾西院の春日の御旅所(西院野々宮神社)、梅宮(梅宮大社)、檀林皇后の御墓、天皇塚、大墓、梅津、長福寺、梅津左衛門といふ人の墓、大井川、上野橋、徳大寺、下山田⁶⁾御陵、田邑陵、御輿塚、真如寺、葉室常住寺、衣笠山地蔵院(竹寺)、細川頼之墓、葉室西芳寺(苔寺)、花巖寺(鈴虫寺)、西光寺、月詭神社、松尾社(松尾大社)、渡月橋、嵐山、天龍寺、七老亭、妓王寺、往生院、生六道といふ堂、福田院(福田寺)、後亀山院陵(嵯峨小倉陵)、念仏寺、清涼寺、大沢の池、広沢の池

3月28日
京都滞在 南禅寺
3月29日
【挨拶回り】、稻荷の御社(伏見稻荷大社)、伏見の京橋、【船中泊】
3月30日
大坂滞在 道頓堀、【芝居見物】、【藤屋泊】
4月1日
大坂滞在 生玉神社(生國魂神社)、北向八幡、高津なる仁徳天皇御

4月2日

社(高津宮)、餌指町、円珠庵(鎌八幡)、阿蘭梨の墓(契沖墓)

新清水といふ寺(新清水寺)、勝曼院の毘沙門天(大江神社) 乾社、

勝曼堂(愛染堂)、家隆卿の墓、天王寺(四天王寺)、熊野権現社、南

大門、庚申堂、荒陵山 茶臼山、阿倍野街道、本多出雲守忠友とい

ふ人の墓、一本松、あめ寺千軒の跡、安倍野村、松虫塚、清明の社

(安倍晴明神社)、大名塚 北畠顕家卿の御墓、経塚、小町塚、播磨

塚、帝塚山、津守氏の遠祖の墓、大宅社、奥天神、大海神社、神宮

寺、住吉御社(住吉大社)、安立、浅沢小野、叡松原不動、阿弥陀寺、

遠里小野、念仏寺、大和川、堺、天神御社、三村神社 開口神社、

住吉御旅所(住吉大社宿院頓宮)、大山陵 百舌耳原中陵(大仙陵古

墳、仁徳天皇陵)、百舌耳原南陵(上石津ミサンザイ古墳、履中天皇

陵)、蓼が池陵 桶井陵 百舌耳原北陵(田出井山古墳、反正天皇陵)、

万代八幡(百舌鳥八幡宮)、長曾根、金田、中村、野遠、松原、大塚

陵とおぼしきもの(河内大塚山古墳)、野村、伊勢橋、野上村、野中

寺 中太子、亀池弁財天(法泉寺)、ほけ山(野中ボケ山古墳、仁賢

天皇陵)、埴生坂、恵我長野西陵(岡ミサンザイ古墳、仲哀天皇陵)、

藤井寺、三社の宮 長野神社、鳥泉、丹比高鷲原陵 高鷲原(雄略

天皇陵)、野中、野中神、誉田、誉田八幡の御社(誉田八幡宮)、誉

田八幡の陵 恵我藻伏山岡陵(誉田御廟山古墳、応神天皇陵)、当宗

神社、竹内宿祢の墓、道明寺【松や泊】

道明寺、天神の御社(道明寺天満宮)、天穂日命神社、三社神祠、白

大夫祠、八島塚 土師八島連といふ人の墓(八島塚古墳、三ツ塚古

墳)、沢田、沢田山(仲津山古墳、仲津姫命陵)、石川、玉手山、安

福寺、天王台(玉手山)、牛頭天王の御社(伯太彦神社)、寿世堂、国

見岡、駒谷(駒ヶ谷)、杜本神社、金剛輪寺、楠公の墓、藤永手墓、

西行法師のすめりし庵、飛鳥川、若宮の社、壺井八幡の御社(壺井

八幡宮)、壺井権現の御社(壺井権現社)、壺井、通法寺、伊予守頼

義公ををさめたる所、八幡太郎義家公の御墓、河内守源頼信公のみ

はか、上太子 磯長山叡福寺、梅鉢陵、河内磯長原陵(春日向山古墳、

用明天皇陵)、大坂磯長陵(叡福寺北古墳、聖徳太子磯長墓)、河内

国磯長中尾陵(太子西山古墳、敏達天皇陵)、磯長山田陵(山田高塚

古墳、推古天皇陵、竹田皇子墓)、飛鳥 近飛鳥、大坂山の道 八

なむし越(穴虫峠)、飛鳥戸神社 天王、駒谷(駒ヶ谷)、田辺、春日

神社、国分、飛鳥天王社、阿弥陀寺、高井田、木ぶかき社、青谷、

木ぶかき社、雁多尾畑、南畑、信貴山【成徳院泊】

信貴山、猪上天明神(猪上神社)、本堂、奥院、毘沙門堂、米尾山、

久安寺、久安寺越、山たけ(山畑)、水越、玉祖大明神(玉祖神社)、

神立、十三峠越、楽音寺、横小路、六万寺、四条、四条縄手、五条、

出雲井、平岡神社、豊浦、暗峠越、箱堂、額田、高野街道、石切劔

箭神社、神並、芝、日下、大龍寺、善根寺、中垣内、野崎、慈眼寺野

崎観音)、北条、川崎、苜屋、楠正行主墓・同正時主墓、角部、西

宮新田、【船路】、道頓堀【藤屋泊】

天満天神の御社(大阪天満宮)、坐摩神社、仁徳天皇御社、道頓堀【船

中泊】

山崎、広瀬、水無瀬、水無瀬川、桜井、ちひさき八幡の社(矢納神

社)、子別の松、待宵侍徒墓、金龍寺、あま(安満)、別府、古曾部、

能因法師の墓、花の井、伊勢寺、伊勢の墓、丹波谷、安満、梶原、

神南、神並の森、桜井、広瀬、東大寺、関戸、山崎、離宮八幡の御

社(離宮八幡宮)、宝寺(宝積寺)、観音寺、円明寺、小倉神社、長岡、

長岡天神(長岡天満宮)、長法寺、粟生、光明寺、井内、向日、島坂、

向神社(向日神社)、寺堂、下久世、久世、木ぶかき神社、桂川、石

原、吉祥院、唐橋、四塚、羅城門の跡、東寺、稲荷の御旅(伏見稲

荷大社御旅所)、三条の宿【目貫屋泊】

京都滞在【休息】

加茂川(鴨川)、田中、一乗寺、雲母坂、林丘寺宮 音羽

御所、雲母寺不動、修学院の行宮(修学院離宮)、音羽滝、水呑峠(水

飲峠)、四明が嶽(比叡山)、講堂、戒壇堂、中堂(根本中堂)、山門、

坂本、山王の御社 日吉神社(日吉大社)、坂本、下坂本、唐崎、唐

崎明神、志賀、八幡の社(志賀八幡神社)、山中、山中越、三条

京都滞在【知人訪問】

東寺、旅所(伏見稲荷大社御旅所)【稲荷祭見物】、松原

4月3日

道明寺、天神の御社(道明寺天満宮)、天穂日命神社、三社神祠、白大夫祠、八島塚 土師八島連といふ人の墓(八島塚古墳、三ツ塚古墳)、沢田、沢田山(仲津山古墳、仲津姫命陵)、石川、玉手山、安福寺、天王台(玉手山)、牛頭天王の御社(伯太彦神社)、寿世堂、国見岡、駒谷(駒ヶ谷)、杜本神社、金剛輪寺、楠公の墓、藤永手墓、西行法師のすめりし庵、飛鳥川、若宮の社、壺井八幡の御社(壺井八幡宮)、壺井権現の御社(壺井権現社)、壺井、通法寺、伊予守頼義公ををさめたる所、八幡太郎義家公の御墓、河内守源頼信公のみはか、上太子 磯長山叡福寺、梅鉢陵、河内磯長原陵(春日向山古墳、用明天皇陵)、大坂磯長陵(叡福寺北古墳、聖徳太子磯長墓)、河内国磯長中尾陵(太子西山古墳、敏達天皇陵)、磯長山田陵(山田高塚

4月5日

天満天神の御社(大阪天満宮)、坐摩神社、仁徳天皇御社、道頓堀【船

中泊】

山崎、広瀬、水無瀬、水無瀬川、桜井、ちひさき八幡の社(矢納神

社)、子別の松、待宵侍徒墓、金龍寺、あま(安満)、別府、古曾部、

能因法師の墓、花の井、伊勢寺、伊勢の墓、丹波谷、安満、梶原、

神南、神並の森、桜井、広瀬、東大寺、関戸、山崎、離宮八幡の御

社(離宮八幡宮)、宝寺(宝積寺)、観音寺、円明寺、小倉神社、長岡、

長岡天神(長岡天満宮)、長法寺、粟生、光明寺、井内、向日、島坂、

向神社(向日神社)、寺堂、下久世、久世、木ぶかき神社、桂川、石

原、吉祥院、唐橋、四塚、羅城門の跡、東寺、稲荷の御旅(伏見稲

荷大社御旅所)、三条の宿【目貫屋泊】

京都滞在【休息】

加茂川(鴨川)、田中、一乗寺、雲母坂、林丘寺宮 音羽

御所、雲母寺不動、修学院の行宮(修学院離宮)、音羽滝、水呑峠(水

飲峠)、四明が嶽(比叡山)、講堂、戒壇堂、中堂(根本中堂)、山門、

坂本、山王の御社 日吉神社(日吉大社)、坂本、下坂本、唐崎、唐

崎明神、志賀、八幡の社(志賀八幡神社)、山中、山中越、三条

京都滞在【知人訪問】

東寺、旅所(伏見稲荷大社御旅所)【稲荷祭見物】、松原

通

4月11日 京都滞在 鴨川、蓮華王院【かきつばた見物】

4月12日 京都滞在 四条の橋、加茂の川(鴨川)【池洲訪問】

4月13日 京都滞在 下加茂の社(下鴨神社)、御蔭橋、山崎、高野、御蔭山、御蔭社【御蔭祭見物】、下加茂(下鴨神社)

4月14日 京都滞在 【知人訪問】、清水寺

4月15日 京都滞在 祇園の社(八坂神社)、三条の大橋

4月16日 京都滞在 御社(下鴨神社)【葵祭見物】

4月17日 京都滞在 【挨拶回り】

4月18日 京都滞在 智恩院、祇園御社(八坂神社)、長楽寺、高台寺、清水(清水寺)

4月19日 三条、白川橋、粟田山、山科、あふさか山(逢坂山)、大津、【船路】、矢橋、鞭崎八幡宮、川の下、大塚、矢倉、草津、石部、水口【川内や泊】

4月20日 水口、土山、鈴鹿山、坂の下(坂下)、筆捨山、関、楠原、椋本【天黒や泊】

4月21日 椋本、豊久野、長野、窪田、津、高茶屋、雲出、三渡、松坂

書誌

『柳桜日記』は、天理大学附属天理図書館・日本大学図書館・三重県立図書館が所蔵する。天理本は草稿本、日本本は浄書本、三重本は転写本である。三重本は武藤文庫に「小津久足自筆稿本」として所蔵される(武藤文庫については、拙著『小津久足の文事』(ペリカン社、二〇一六)三部三章「花鳥日記」参照)。

ただし、「小津久足自筆稿本」と銘打っているが、三重本は久足の筆跡ではない。しかし転写本ながら、久足筆の付箋が付されるなど、久足の管理下にあったことが確認できる。すなわち、『陸奥日記』など他のいくつかの紀行文でも見られるように、久足は浄書本を転写させて副本を作り、机辺に備えていたのであり、この三重本も西荘文庫旧蔵本と判断される。今回、三重本を翻刻の底本とした。

三重県立図書館所蔵。武藤文庫(L980/オ/7/9 資料番号140049354、

140049362、140049370)。三卷三冊。二三・二×一六・六襷。袋綴。表紙は薄藍色の無地の布目地。外題「柳桜日記 上(中・下)」と左肩に単枠題簽。内題「柳桜日記上の巻(中の巻・下の巻)」。一〇行書。上巻六六丁(墨付六五丁)、中巻五九丁(墨付五八丁)、下巻六一丁(墨付六〇丁)。印記「武藤蔵書之印」(朱陽)。胡粉・朱墨訂正あり。付箋あり。奥書「文政十一年といふ年のうづき廿一日/小津久足」。

翻刻

凡例

一、三重県立図書館所蔵『柳桜日記』(武藤文庫「小津久足自筆稿本」L980/オ/7/9 資料番号140049354、140049362、140049370)を翻刻した。

一、読解の便宜を考慮して、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・段落冒頭の字下げを施した。

一、小字双行の割注は「」で示した。

一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。しかし、固有名詞は旧字体を残したものもある。また、「玉」を「給」、「哥」を「歌」、「比」を「頃」、「斗」を「計」、「宦」を「官」とした。

一、日付が替わることにより一行を空け、小見出しとして、ゴチック体で原文にはない日付を加えた。

(外題)「柳桜日記 上」

【付箋】千本普賢糸桜ハ普賢堂トアリ『山城名跡志』

(内題)「柳桜日記上の巻」

文政十一年(一八二八)二月二十四日

「見たせば柳さくらをこきませて」とよめりし都の錦をみまほしくおもひたちぬるは、はやくのことながら、何くれとさはりがちにて、春ごとの花のわりには、いとゆかしくおもひわたりつゝ、くちをしかりしに、ことし文政十一年といふとし、なにのさほりもなければ、この春をよそにすぐしなば、又いつかは

と、あながちにおもひおこして、いでた、むとす。

おもひたつ袂にかへて旅衣みやこのにしききてやかへらむ

ころは、きさらぎの廿日あまり四日、よふかくわがすむさとをたちいづるに、有明の月のいとくすかに霞のまよりのこりたるさま、常に見なれたる影ながら、をりにふれては、いとものあはれなり。

わかれちのこ、ろや空にかよふらむなみだかすめる有明の月

おほかたにかすむひかりもけさは又あはれよふかきありあけの月

よをこめてたちいづる身をおのれさへおくりがほなるありあけの月

一里ゆきて三渡の橋をわたるとて、

見わたりの川瀬の波もこのたびはまづうちつけに花かとぞ見る

小津・曾原・中道などいふさとをすぎて、肥留繩手といふをゆくほど、うちはれたる道にて、よもの山々のそこはかとなくかすみわたれるけしき、おもしろし。日ごろ家の業にのみか、づらひて、いぶせくのみこもり居つ、かくたま／＼に旅衣たちいでたる身には、めづらしくなん。

雲出川をわたりて、そのさとをいではなれたるところの畑の中にて、雉子の鳴ければ、

故郷をたちわかれては旅衣つまどふきじもよそにやはきく

小森といふ里をすぎて、高茶屋といふさとにいたる。すべてこのあたり桜はまだしきほどにて、桃の花さかりなり。かくては都の花もまだしからむと、見ぬあらましごとをあひかたらふ友とはなく、具したる供のをのこばかりなれば、心のうちにかくやあらむとおもひつゝくるばかりなり。

上野・垂水などいふ里をすぎて、藤方にいたる。こ、はふるくものに見えたところにて、すなはち片樋の宮の跡とて、ちひさき杜もあり。このさとをいではなれたる所より二町ばかり西のかたの山を千年山といふ。この山にちかきころ桜をおほくうゑて、よき所となれるが、なべての桜けしきばみたるばかりにて、花はまだしきほどなり。

あくがれて千年もふべくおもはまし山のさくらのさかりなりせば

津の宿をすぎて、部田といふ里にいたる。この里より中野といふにいたるが都にゆく道也。その中野・平野・森などといふ里をすぐ。この森といふは、一身田といふ所の入口にて、高田山専修寺とて、高田宗といふ宗の水もとの寺にほどちかし。堂などはいと大きなれば、このあたりよりもよく見ゆ。

津の宿より一里といふに、久保田の宿也。入口に大きな石の灯笼あり。こは大神宮に灯をたてまつるために、近江の国人のちかきころたてたるなり。このしを山よりほりいだすをり、いとくしきしるしのありけるよし、里人いへり。

この宿をはなれて野崎といふさとにいたるほど、雨ふりいづ。

花のためうれしき雨と旅衣しをる、袖のうさもおもはず

豊久野といふところに、銭懸松とて、名だかき木のかれたるあり。この松は昔、豊斟淳尊の御社のありし跡なるがゆゑ、その神にたてまつるぬさ代をかしによりて、かくいふといふ説のあるは、豊久野といふよりのおしあてなるか、又はふるき伝にてそれゆゑに豊久野といふものなるか、いかゞあらむ。この野はいとながき野なり。

梓弓ひきとよく野におしてふる春さめかこつけふにもあるかな

あすさへふらばいかゞはせんと、こ、ろにか、れり。

高野といふ里をすぎて、長野の松原といふをすぐ。この松原もいとながし。昔、「十日とほるとよく野、七日とほる長野」と人をあざむきしもまことの偽にはあらじとおもはる、ばかりなり。

春の日のなが野ならずは道いそぐ旅にはとほきほどやかこたむ

久保田より二里といふに椋本の宿なり。中繩・林などいふ里をすぎて、楠原の宿にいたる。椋本より一里なり。古駅といふ里をすぐ。このさとの名は、何とかやよしありげにおほゆ。かくて関川の土橋をわたるほど、風いとさむし。

吹わたる風にたともうちしをれ春雨さむき関川のはし

関の宿まで楠原より一里あり。この宿のなかばばかりに地藏堂あり。こはいと名だかき御仏なり。一瀬といふ里をすぎて筆捨といふさとにいたる。このさとの右のかたに筆捨山とて、木立・岩のた、ずまひなどおもしろき山あり。しばし立どまりて、

筆捨の山とはいへどあかずのみ心を猶もうつしてぞ見る

檜木・沓掛などいふさとをすぎて日もくれか、るころほひ、坂下の宿にいたりつきぬ。関より一里半あり。こ、に日野屋なにかしといふもの、家にやどりぬ。日くるればのぼるをかたみ鈴鹿山こよひやどかる坂のしたみち

二月二十五日

廿五日。よふかくおきいづれば西風いとほげしくて、きのふの雨なごりなく

うちはれぬるは、いとうれし。

宿りをいで、八町ばかりゆけば、石村といふあり。左のかたなる鈴鹿川にそひてや、ゆけば、鈴鹿神社おはします。よふかくのこりたるともし火の光も、かうくしくたふとし。この山はあらき道なれば、たむけもせまほしくおぼれど、

とりあへぬ旅にしなければゆるさん鈴鹿の神にぬさおかぬ身も

ねもごろにをがみ奉る。これよりすゞか山の坂路にて、のぼりはてたる峠に家居なみたり。こゝに伊勢と近江との国境あり。わがすむ国をはなれゆくことはさすがに心ほそくおぼえければ、

おこたりとなるをおもはずゞか山ふりかへり見る故郷の空

坂をくだりて沢といふ山里をすぎてしばしゆけば、桜松とて、大きな松にさくらの木のやどりたるがあるは、いとめづらし。花はまだしきほどなるこそ、くちをしけれ。

つれもなき松のこゝろを山ざくらいかにこのみてやどりそめけむ

と心つきなし。山にてさむきけにやあらむ、すべてこの山の桜はいまだ冬木のまゝなり。

すゞか山道さまたげにならじとてふりすてがたくさかぬさくらかとおもへば、なか／＼花の情のふかきこゝちぞする。

榎木・山中などいふ山里をすぐるほど、所々にて鶯の鳴ければ、

さくら花まだしき山もうぐひすの声のほひはさかりなりけり

大平といふ山里をすぎて、女夫坂といふ坂をこえて、猪鼻といふ山ざとにいたる。又、蟹が坂といふをこえて、田村川の橋をわたる。橋のむかひに田村神社おはします。こは坂上田村丸の君をまつりたる社也。俗にこの君、この鈴鹿山の鬼神をたひらげ給ひしゆゑよしにて、いはひまつりたりといへり。すべてこのあたりまでは、鈴鹿山のうちなり。しばしゆきて土山宿にいたる。坂下より一里半あり。

この宿をいでなるゝところの右のかたに、多何大社にゆく道あり。そも／＼この多何神社は我身ゆゑありてふかくたふとみ奉る神也。さるを、道いそぐわたくしの旅にえまうでずして、よそに見すぐし奉るは、いとまめしくかしこきことなり。こゝよりはるかにをがみ奉るとして、

へだてなき神のめぐみをたのむかな雲井のよそに見てはすぐれど

大宮をよそののみ見てすぎながらこゝろはゆきて猶ぞをろかむ

松尾川、土橋をわたれば、頓宮といふ里有。こゝは斎宮群行の時の頓宮の跡にて、おのづからにその名ののこりたるものなるべし。前野・市場・石室などいふさとをすぎて、大野といふ里にいたる。この里は家毎にくさぐさの鳥どもを軒にかけてうる所也。

里の名の大野の原にかりとりて家の軒端にかけたすらむ

今宿・今在（註）・小里・新庄・栗林・月上などいふ里どもをすぎて、水口の里にいたる。土山より二里半あり。この宿の入口に城山といふ山ありて、昔の城跡のこれり。宿の半に「鴨長明発心所」といふ石ぶみをたてたる寺もあれど、うけがたければ立よらず。林道（註）・北脇・泉などいふさとをすぎて、横田川をわたれば、三上山・比良嶽見えそめたり。比良がたけには雪いとしろし。

名にたかき色とは空にいちじろく比良のたかねの雪ぞめにたつ

田川といふさとをいではなれたる所に、「万里小路藤房卿古蹟道」といふ石ぶみあれど、これもえたちよらず。吉永・夏見・針・平松・柑子袋などいふさとをすぎて、石部宿にいたる。水口より三里半也。この宿に『延喜式』神名帳に見えたる「石部鹿塩上神社」もおはすらんとおもふものから、えたづねてまうです。

金山・伊勢落・林・梅木・野村・手孕（註）・釣里（註）・目川（註）・本袋などいふさとをも

をすぎて、石部より三里といふに、草津の宿也。

ひきむすぶ草津の里は名のみして旅ねす、むる家ぞおほかる

されど道いそがるれば、ゆかる、ほどはゆかむとて、やどらず。この宿に立木大明神といふ御社おはします。矢倉といふあたりに姥餅とて名だかきもちひをうる家あり。この家のあたりより矢橋にゆく道あり。その矢橋より船にのれば、こよなく道ちかけれど、けふは比良明神祭にて、その船をわたさぬ日なりときけば、せんかたなし。

弓のごと道はまがらでものゝふの矢橋の舟にのらましものを

とつばやきながらしばしゆきて、野路の里にいたる。こゝに玉川の跡とて、いさ、かの芝生あり。しばしゆけば、あふみの海まぢかく見えそめて、いとめづらしく、けしきよし。

膳所城なども手にとるばかりに見ゆ。日吉山はものよりはなれていとよく見えたり。あすは都にとくもつきて、「この山のあなたおもてを見むものを」な

どおもはれて、ちかづきぬる都の空こそうれしけれ。

月輪・大江・神領などいふ里をすぎて、瀬田のさとにいたる。このさとに『式』に見えたる建部神社おはしますよしきけれど、けふはことの外、足つかれたれば、えまうでず。

又このさとに田上不動にゆく道とてあり。田上もふるき名所なれば、ゆかまほしけれど心にまかせず、こゝにて日の入ごろになりぬれば、

宿からむ瀬田の長はしながき日にゆくさきとほみくれか、りつ、このさとの伊勢やながしといふもの、家にやどりぬ。

二月二十六日

廿六日。

けふはおもふ都につかむ日なれば、足もいとかるきこゝちのせられて、朝とく宿りをいづ。長橋をわたらむとする左のかたに、龍神社・田原藤太秀郷社といふ二社あり。

さて、橋のなかばより見たしたる朝あけのけしき、いひしらずおもしろし。朝霞かゝるけしきもあかずしてながめもこゝをせたのながし

栗津の松原の左のかたに今井兼平の塚とて、松の木のたてる塚あり。この人は主のために忠心なりし人なれば、あはれにおほゆ。

この野べの露とぞきえしあづさ弓いま井の子らがたけき心も

此あたり右のかたは湖にて、けしきよし。湖の中にちひさき家あれば、何ならんと人にとふに、「魚をとる為に簀といふものをかけおきて、そをまもる小屋也といへり。古きよの網代守おぼえて、おかしきもの也。

膳所をすぎて石場にいたる。こゝは大津の宿の入口なり。この宿に四宮といふ大きな宮あり。鞆神社といふもあり。又しばしゆけば、上宮・下宮・関清水大明神・蟬丸宮などいふもあり。

あふさか山にて、

旅びとも道あるみよにあふさかはふみなづむべき岩かどもなし
この山にて鶯をき、て、

しる人にあふさか山のこゝちしてきくもうれしき鶯の声

さくらの一木咲たるを見て、

のどかなるみよの春とて花にのみゆくひととまるあふさかの関

あふさかやゆき、とむるは関守のむかしうゑけるさくらなるらむ

大谷といふにも蟬丸の宮有。追分といふをすぐ。こゝは京と伏見とにゆく道のちまた也。それより山科の村々をすぎて、陵村といふをすぐるほど、天智天皇陵、右のかたに見ゆ。『延喜諸陵式』に「山科陵〔近江大津宮。御宇天智天皇。在山城国宇智郡〕」と見えたる陵也。さて、この陵の兆域、東西南北ともに十四町と見えれば、むかしはこのあたりまでも陵の兆域のうちにて、かく陵村といふ名ものこりたるものと見えたり。

日野岡山をこえて、大津より三里といふに、午の刻ばかり、京につきぬるうれしき、たとへむかたなし。白川橋をわたりて、三条の大橋をわたる。わたりもはず、橋のなかばより、まづ東山にむかひたるは、しる人にあへらんやうになつかしくて、いとうれし。人ならましかば、「ひさしくたいめも給はらぬを、つ、がなくておはするや」などうちつけにいはまほしくおほゆ。この大橋のつめなる目貫屋何がしといふもの、家にやどりて、こゝをしばしの旅居とさだめたるになむ。この家の楼は東山のけしきまぢかくたゞむかひに見えて、いとけしきよき家なり。

さて、しばしのほどこひて、まづ祇園社にまうでてをがみ奉る。それより長樂寺にまうづ。この寺の山桜もまだしきほどにて、彼岸桜といふがさかりなり。まづは都の花を見そめたるうれしき、色にもいづるばかりになむ。

さくら花ながくたのしく見よとてやほかよりはやくさきはじむらん
東大谷に山桜の一木咲たるはめづらし。

東は春のはじめの色見えてまづこそにほへ山ざくらばな

〔毎〕智恩院にまうでたるに、こゝも山桜はまだしくて、堂のまへなる糸桜さかりなり。

大寺のほとけも御手の糸ざくらこゝろにかけて猶や見らむ

このあたりはすべてはやくもものしたる所ながら、はじめてきたらんやうにおぼえて、めづらしくなむ。

二月二十七日

廿七日。午の刻ばかりより雨ふる。

けふは清水の観音にまうづ。

御仏のもれぬめぐみもかゝらむ清水寺の春雨の露

本堂のうしろに地主権現の御社といふがおはしますにまうづ。いと大きな御社にて、地主といふをおもへば、この寺よりふるき御社と聞ゆ。『三代実録』に「清水神」と見えたるは、この神の御ことにはあらずか。奥院といふにもまうづ、見るに、この寺の花もまだしきほどにて、西門のさくらといふ一木ばかりがさかり也。この花はこの寺のうちのさくらのあるがなかにもはやさかぎりなりとぞ。

秋ならで西こそ春のはじめとはさかぬためしの桜成けり

高台寺にもまうづ、宿にかへりぬ。

さて、こよひ雨猶ふる。あすは伏見の桃山を見にもせんとおもへば、とく雨のはれなむことをねんじつ、ふしたるに、夜なごころ、ふとめざめたるほど、西風はげしく吹いでたる音聞ゆ。かくては明日の天気よからんなりとて、うれしくなん。

二月二十八日

廿八日。

朝とくおきいづれば、かねておもひしものごとく、よべの雨なごりなくはれたり。これによりて、ふしみの桃山にもせんとて、先、大仏より蓮華王院の三十三間堂にまうづ。この堂の東のかたに、後白河院の御像のおはします堂有。この堂の下はおなじ帝をおさめ奉れる所也。

これより池田町といふにいづ。こはおなじ帝のおはしまし、法住寺殿の御館の池のありし跡といへり。今も畑の中に堤のなごりとおほしきものなどあり。この町のむかひに木ぶかき森の見ゆるは、則、今熊野御社にて、これもおなじ時にいはひ給へる也。しばしゆけば一の橋といふあり。こゝに滝尾社といふおはします。ふるくは太卿社とかきたりといへば、太氏の人をまつれる御社ならんか。かくかきあらためたるは、さかしら人のしわざなるべし。このたぐひ世におほきこと也。

東福寺はいと大きな寺にて、寺の入口に三聖寺といふ寺有。こは東福寺よりもふるき寺なりとぞ。この寺の門に金剛力士ありて、甚ふるく見ゆる像也。またこの門に紫の色したる石あり。こはふるき高麗犬のかけたるにて、今にそのかたしたり。いづこの神社のこまいぬならん。万寿寺といふもこの寺のうちにあり。これも昔は大きな寺といへど、ふたつの寺ともに今はちひさくな

れり。則、万寿寺は五山といふ五つの大寺のうちのひとつ也。通天橋といふも此寺の内にありて、今の世の紅葉の名所也。数おほきその木ども、あかく芽のいでたるも、若緑なるもありて、とり／＼なる色あひ、時ならぬ春ながら、いとおもしろし。

秋の色にたちまさらねどもみぢ葉の春のにしきもうすくやは見る

そめはてぬ秋のみぢにまがへどもあをきをおきて人ぞなげかぬ

臥雲橋といふもあり。異国の木どもにてたてたる厨もあり。仏殿・法堂・選仏場・東司などいひて、大きな堂をたてならべたり。山門といふもいとたかし。また此寺の鐘楼にかゝれる鐘は、むかしの西寺の鐘なりといへり。げにふるく見ゆ。

これより稲荷社にゆきて、下の社・上の社といふにまうづ。下の社といふが今の本社也。そのうしろなるが中の社といふにて、上の社といふは峰におはしますとぞ。

さて、石峰寺・宝塔寺などにまうづ。この宝塔寺より瑞光寺の元政庵にもする道の右のかたはらに、昭宣公の御墓ありて、うへに三十番神の社といふをたてたり。よりてこのみはかなりといふことしる人のいとすくなきは、なげかはしきことなり。『古今』に「うつせみはからを見つ、もなぐさめつふかくさの山煙だにたて」とあるは、「堀川の大政大臣身まかりにける時、ふかくさ山にをさめて後に」とあれば、この御墓のことなり。

この深草には『式』に見えたる御墓これかれあれど、外のみはかどもはしれがたし。瑞光寺は元政上人のすみし寺にて、則、元政庵といふもあり。この元政といひし人は、歌もよくよみたる人にて、なみ／＼のものしり人ならず。この上人の墓も、この寺のやぶのうちにおいて、石などをたてず、みやびたるつくりざまにて、いさ、か小だかき土のうへに竹三本をたてたるが塚じるしなり。くれたけのそのよしのへと言の葉をたむけ見るべき一ふしもなし

この瑞光寺のある所を極楽寺村といへり。此極楽寺は、ふるくものに見えたる寺なるが、むかしこのあたりにありしものなるべし。

かくて、嘉祥寺・安樂行院にまうづ。この安樂行院の庭にちひさき堂のあるは、後深草院・伏見院・後伏見院ををさめ奉れる所なりといへり。このふたつの寺もふるくものに見えたる大寺ながら、いまはひとつ寺となりて、ちひさくなれり。

これより谷口といふさとにいづ。こゝは大津より伏見にかよふ大道也。このたに口に桓武天皇陵ありて、いと大きなり。御前にちかき頃たてたる灯籠あり。又ちかきころ、この陵の木をきりてたゞりのありけることもありとぞ。

さて、この陵は『式』に「柏原陵〔平安宮。御宇桓武天皇。在山城国紀伊郡〕」と見えたる陵也。この陵を仁明天皇陵といふ説のあるは誤也。この陵のある所、山のもとなるに、『式』にも兆域を山のもとのごとくしるされて、「丑寅二峯」などいふ文のあるにもよくかなへる所のさまなり。その仁明天皇陵は『式』にも「深草陵」と見えれば、このとほからぬあたりにありけんを、今はいづことも例のしれがたし。

大亀谷といふ所に即成就院といふ寺あり。こゝに奈須与市宗高塔といふありて、ふるくは見ゆれど、うけがたし。又その宗高がこの寺の本尊をねんじたるによりて、八島の戦に扇の的をゆゑなく射おとして名を得たれば、その願のかなへるによりて、即成就院と名づけたるなりといふも、又うけがたし。

はなつ矢もくるしき海にあふぎぬとかくるほとけや波のぬれ衣

さて、元御香宮といふにまうづ。こゝは御香宮のもとと社地なりともいひ、又、豊臣氏の桃山の城を築給ふとき、こゝに御香宮をうつし奉られたれば、たゞりのありしゆゑに、もとの社地にかへし給へるその跡也ともいへり。いづれがまことならん。この山に田楽岩とて、桃山の城のありけるころのあそびに、でんがくといふものをやきたる跡のある岩有。こゝは城山にちかし。

さて、この山のみわたいとよくて、山科のかたちかく見ゆ。又、巨椋の入江もよく見ゆ。この入江はいとひろき入江にて、中に一すぢながく見ゆる堤は、豊臣氏につくられたるにて、巨椋堤といふ堤なり。こゝは都より奈良にかよふ道也。この堤つくりたまはぬむかしは、都よりならにゆくには、宇治のかたにまはりてゆきたりし也。

仏国寺にまうづ。いとよき寺にて、

音にきくほとけの国のおもかげもたかきいらかにたてる大寺
それより伏見の桃山にいたる。をりよくも花さかりにて、千本、八千本さきならびたるさま、言の葉にもおよびがたし。吉野の花によく似たり。時うつるまでながめたるに、猶あかぬこゝちのせらるれば、

宿かりてふしみまほしくおもふかな錦をしけるも、の花ぞの
数おほくさけるふしみのも、山はも、よ見るともいかであくべき

この山をすぎて城山のほとりにいたる。この城山といふは、豊臣氏の桃山御殿といふがありし跡にて、今もみだりに人のいることをゆるさねば、よそながらのぞみ見るに、あたりの堀もかつ／＼のこりて、むかしのしのぼる、まゝに、あづさ弓、ひきとよ国の、豊臣の、神の命、天の下、くぬちこと／＼、安国と、をさめ給ひて、よろづ代に、いますところと、とことには、すます所と、いめ人の、伏見の里の、も、山に、つかしたまひし、大御城は、こゝときけども、大殿は、こゝといへども、山辺には、木立しげらひ、堀の内は、みくさしげりて、かゞやける、いらかも見え、いかめしき、御門も見えず、大御城の、あれたる見れば、かなしくもあるか

その山にさくらの一本咲たるを見て、
鈴かけしむかしのさかえふりはて、さくらしづけき桃山の跡

あたりの畑の葉の花のさかりなるを見て、
ありしよの金の瓦跡ふりていろのみのこる畑の葉の花

さて、宇治見台といふにのぼるに、龍雲寺といふ寺も有。名もしるく、うちのかたまで見えて、すべてのけしきもよし。こゝより桃山の花も見ゆれど、かたへの山にさへられて、いさゝかばかり見ゆるはくちをしくて、「なびけ此山」ともいはまほし。この山のもとに天神御社あり。それより指月山月橋寺といふにまうづ。こゝは伏見の豊後橋といふはしの傍にありて、けしきよき寺也。むかひのつゝ、みを、まき堤といへり。

かくて、御香宮にまうづ。大きな御社なり。こゝは神功皇后をまつれる御社也とぞ。このあひだに常磐井といふ、いと大きな古井有。むかし平治の乱に義朝の妻なる常磐が、このあたりにかくれすみしによりて、かくいふといへるは、いかゞにおほゆ。

さて、御香宮のかたはらより、又、桃山にいで、桃の咲たる中をとほりて、深草の里にいでんとす。ゆけど／＼はてなき桃の花盛、いとおもしろし。

言の葉もおよばぬ色をはづかしみかほも下てるも、の道下

深草寺といふにまうづるに、この寺にふるき跡といふもの、くさ／＼あれど、いづれもつくりたるものと見えて、うけがたし。墨染寺といふものさとにあり。この寺の庭に墨染桜といふがあり。これもいかゞなり。「ことしばかりは墨ぞめにさけ」とはあれど、墨染桜といふがありとは、ものにも見えず。又、墨染井といふも有。

これより竹田里にいたる。こゝより桃山をとほく見るけしき、又おもしろし。このさとの安楽寿院にまうづ。いとふるくたふとき寺也。この寺の本御堂といふ下には、鳥羽院を、さめ奉れり。新御塔といふもあり。むかしは塔なりけむを、その塔はたえて、今は堂をたてたり。碁盤梅といふ木、さかりにて、いとよき花なり。それより西行寺といふにまうづ、又、北向不動院にまうづ。この寺の前に美福門院の御墓とて、畑の中にいさゝかの芝生あり。近衛院もこの御墓に合葬奉れるよし、ものに見えたり。むかしはこのあたりまで、すべて安楽寿院の地のうちにて、この上に塔のありしあととなりとぞ。又ある説に、美福門院・近衛院陵は新御塔にて、この芝生は白河院陵也ともいへり。この陵の御事は、『百練抄』天承三年の所に「香隆寺より遷鳥羽三里」と見えたれば、この説もすてがたし。又、新御塔の下には八条女院を、さめ奉れりといふ説もあり。又、本御塔が白河院陵にて、新御塔、鳥羽院陵なりともいへり。いづれならん、よく考べし。

さて、城南神の社にまうづ。いと大きな御社也。このちかきあたりに真幡寸辻といふがあるによりて『式』に見えたる「真幡寸神社」はこの城南神の御ことなりといふは、よくあへり。秋の山といふ竹村もあり。又、御所内といふ名も田にのこれり。すべてこれらはむかしの城南離宮の名ごりなるべし。猶たづね見まほしき所もこれかれあれど、くれちかくなりぬれば、けふはかへらんとす。

竹田村をいで、都の油小路といふにいづ。こゝに不動堂・道祖神などいふがあるにまうづ、くれふかく宿にかへりぬ。

二月二十九日

廿九日。

錦天神にまうづ、誓願時・蛸薬師などにまうづ。誓願時に和泉式部の軒端の梅といふがありて、さかりなるを見て、うけがたきものながら、

ありしよにかはらずさきてこれも又花ぞむかしのかたみなりける

さて、けふはあひしれる都の人々なにがしくれがしをとぶらひぬ。又、年をへだて、まうのぼりたれば、ふるきものがたりなどしいでたる故郷人にあへらんやうにおぼえて、なつかしくなむ。

三月一日

三月朔日。

北野御社にまうづ。この大神は常にふかくねんじ奉れば、心いれてをがみ奉るも、いとかしこし。

一夜まづひとよのうちにも、千々のめぐみもこもる神のみやしる

うかりつるそのぬれぎぬもあめの下つひにはおほふめぐみとぞなる

この門前の左近馬場は、むかしのなごりなれば、さしたる所にもあらねど、めとまるこ、ちす。

さて、このあたりなる立本寺といふ寺のさくらさかりなりとき、て、見に立よりて、

さくらさくもとにたててふ寺なればこゝろのまゝに花をこそ見れ

平野御社にもまうでたるに、桜はまだしきほどなり。それより鏡石といふ石のかたにものせんとす。こは紙屋川の川上にて、こゝよりは五町ばかりあり。

この道に安産天神といふ御社あればまうづ、鏡石にいたる。この石のあたり、むかし岩陰といひし所にて、一条院を火葬奉れる所也。

さて、この石はよくもの、かげのうつる石にて、よにめづらしき石なり。

うごきなき石のこゝろもますかゞみうつるためしのあるかとぞ見る

それより鷹峰といふ里にいで、紫野の今宮にまうづ。この宮は一条天皇の御代、長保三年といふ年、天下に疾疫をわづらふ人おほかりしかば、疫神をこの所にまつり給へるとき、都人のおほくあつまりしによりて今宮といひたるよし、『日本紀略』に見えたり。又『後拾遺』藤原長能ぬしの「しろたへの豊みてぐらを取もちていはひぞ、むる紫の野に」とよまれたるも、その時のことなるべし。

この所にちかきころ、さくらをおほくうゑたるが、かつく咲そめたるを見て、

しろたへの豊みてぐらとさく花にいはひそめけむかしをぞおもふ

このあたり紫野といふ名はのこりたれど、野は見えず。あるは里の家居をたてならべ、あるは畑などになりたるものなるべし。

里の垣ねにすみれの咲たるをみて、

おのれのみむかしのまゝのむらさきにさけるすみれの色もなつかし

大徳寺はいと大きな寺にて、たてさまもよし。七野社といふにまうづ、それより上御霊社にまうづ。

いまだ日ぐれがたにはほどあれば、鞍馬口といふにいで、川原をわたりて下加茂にまうづ。たふとさいはんかたなし。

馬場の桜さかりにて、いとおもしろきを見て、

大君の御祖の神とこゝろなき木すらたむくる花のしらゆふ

川合社にもまうで、加茂川のつゝみにいでたるに、はやくれちかくなりぬ。かくてこの堤をゆたかにくだりつゝ、見わたしゆくに、よものけしきそこはかとなくかすみわたりて、いひしらぬけしき也。

一すぢの道をたよりとくれかゝるかすみわけゆくかも川すぢ

霞たつみどりをわけてゆく袖に柳のいともかゝる川づら

三月二日

二日。

新玉津島御社にまうで、

光なきわが身にすれば玉津島神にたむけむ言の葉もなし

みがくわがこゝろをしりて言の葉のひかりもそへよ玉津島姫

このちかきあたりの紙商人の家の庭に、俊成卿の社ありといへば、たづねたるに、「けふはさはりあり」といへば、えまうです。

因幡葉師にまうで、それより新善光寺といふ寺の糸桜を見にものす。いと

よき木にて、をりよくさかりなれば、

糸ざくらくりかへしつゝ、見る花にほどふる寺の庭のこのもと

塩竈大明神・市姫大明神などにまうで、御影堂といふにもまうづ。これより

五条の橋にいづ。この橋のちかきあたりに籬島の跡とて、木立いさゝかのこれ

り。このあたりはすべてむかしの川原院の跡なり。かの『古今』「君まさで煙たえにし」といふ歌などおもひいでられて、さびしからぬ町の中ながらも、心のうちものあはれ也。

今はまた民のかまどのにぎはひにうらさびしくは見えもわたらず

しほがまをつくりし年はへだて、もまがきのしまの跡ぞのこれる

この橋をむかひにわたりて西大谷にまうづ。こは西本願寺の廟所にて、親鸞聖人のはかあり。この寺のちかきあたりに、要法寺といふ寺あり。この要法寺の入口に、後京極摂政良経公の御墓あり。ちかきころまではあれにあれたるよき、しに、今は築地をゆゑゆゑしくかまへて、みだりに人のまうづること

をゆるさず、よそながら門の外よりをがみ奉る。かくゆゑしくなりたるも、またく言の葉の道のひらくることよと、たふとし。この君の御歌は、ことにわが心にしみて常々おぼえ奉れば、なつかしきこゝちのせられて、しらぬむかしの君ながらも、あひしれる人の墓のやうに、ねもころにをがみ奉るこそ、なか／＼になめしきことなりけれ。

鳥部野やみはかたづねてたくひなき言葉の露のひかりとぞおもふ

これより清水のかたにゆく道は墓ばかり也。この所すなはちむかしの鳥部野なれども、ちかきよの墓ばかりにて、『式』に見えたる「拜志墓」などは見えず、人もしらすなむ。この所に六波良のさかえし時、屋敷をたてたるをり、むかしのはかはそのこらずとりたりといふ説あり。されば、良経公の御墓のほかに、ふるき墓どもは見えぬなるべし。妙見堂・日親寺などいふ寺あり。

かくて清水にまうづるに、舞台の下なるさくら咲そめて、いとおもしろし。

これより歌中山・清閑寺にまうづ。この寺に高倉院陵あり。小督局塔などいふもあたりにあり。六条院陵もこの寺にあるよしものに見えたれど、今はしれず。ある説に、この寺の本堂、すなはちその陵なりともいひ、又この庭に要石といふがあるを、その陵なりともいへり。

かくて若宮八幡といふにまうで、そのかへるさ長楽寺の花を見てかへりぬ。

三月三日

三日。

朝とく祇園・安井そのわたりの崇徳院御廟といふにまうで、かへるさ智恵院の花を見るに、桜馬場といふところの花、大かた盛なり。この所、この寺のうちにも花のおほさかきりにて、いとけしきよし。

かくてはあらし山の花もさかりならんとて、けふその山にゆかんと心がまへしながら、午の時ばかりより大内にまゐる。さるは、けふ鬮鶏といふがあるを見奉らんとて也けり。こは、参内殿といふに出御ありて、その殿の庭にてこの鬮鶏のあるを見そなはするなり。この殿のほとりちかく入て見奉れば、御庭の桜、をりからさかりにて、おくふかき御簾などのけはひ、とり／＼にみやびやかなり。時にもなれば、水干着たる童のふたりしてあはするさま、優に雲の上めきたるさま、詞にはのべがたし。

けふといへばあはするとのた、かひもをさまれる代のすさびなるらむ

すゑとほく君をいはひてとりも猶ちよをかけるの声あはずなり
けふは承明門のあたりまで人のいることをゆるさるれば、その門より紫震殿
を見奉るもかしこし。南殿の桜さかりにて、まことにうるはしく、よにことな
る花なり。

されど、

にほふにもまさるさかえにくらぶれば花はおとれる九重のうち

も、しきや雲のうへなる花さかりかくべきことのは、かられつ、

内侍所をもよそながらをがみ奉る。また神嘉殿といふをも見奉りて、かしこ
きこといふもさらなり。

かくて、日の御門にいでたるは未の刻ばかりなり。かねての心がまへあれば、
これよりすぐに嵐山にもせんす。千本といふあたりにいづれば桃園のあ
りて、伏見の桃山にはおとりたれど、いとおほく咲ならびたるさま、よの常
ならず。

名にしおふちもとのも、の花さかりなかゆく袖にもほふばかりに

さきならばも、のさかりは色にいで、千本の名をぞしらせがほなる

さくらゆゑいそぐゆくへもわすられてふりすてがたき桃の花園

木鳥御社にまうでたるに、花の咲たるを、

おのづからさく木鳥の名によせてたちこそまがへ花のしら波

太秦広隆寺も桜おほければたちよりたるに、おほかたさかりにて、おもしろ
し。花見にとてきたる人もおほくありて、にぎは、し。

立よりて都の花に旅衣やつれし袖をはちをかの寺

あつまりし蜂はむかしのふる寺に人こそつどへさくらさくころ

さがにゆくたよりにとふはあさしとて花のこ、ろやうづまさの寺

この寺を蜂岡寺といふことは、『書紀』に見えたり。又この寺のおくに『式』
に見えたる「大辟神社」おはします。この御前にも花あり。又そのほとりなる
桂宮院といふ堂の前にも花おほくさかり也。

てる月の桂の宮にさくらとやひかりのはなにまがふなるらむ

さがの入口なる車折神社といふにも花おほし。嵐山もほどちかくなりて、か
つゝ花も見えそめたれば、足もことさらにすゝむこ、ちす。この嵯峨の里を
川づらにいでたるところより、渡月橋もまちかく見えて、めさむるばかりのけ
しき、まづ心もおどろかれぬ。

これより川にそひて並木の松の中をとほりて、渡月橋のほとりにいでたるけ
しきは、又ことさらなり。猶、川をのぼりつゝ心とめて見もてゆくに、桜も
おほかたはけふをさかりにて、かねておもひしよりもはるかにまさりざまなる
けしき、たとへむものなし。しひていは、たくみに絵がきたる屏風をたてた
る中をかよふこ、ちぞする。されど、それはつくりたるもの、これはおのづか
らなるけしきなれば、いひしらずなむ。さるを言の葉にとにかくいは、中々
におとるべし。そは花のためにもうたてきことなれば、口づくみで見ること本
意ならめと、心にはおもひながら、猶えあらでうたひいでたるを、花もうるさ
くおもふらんかし。

大井川けふ見る花はこひわびしひとにあふせのこ、ちこそすれ

大井川おもひわたりしあらましにたちまさりたる花のしら波

たちならぶ松もことなる色見えてたぐひあらしの山さくらばな

又たぐひあらしの山とめづるをもなほかひなくや花のおもはむ

むかしたれ嵐の山にかくうゑて松をさくらのためとなしけむ

大井川せのるせきも人とむるためかと思ゆる花さかりかな

あらし山はなのにしきやおるためとか、るとな瀬の滝のしら糸

うつろふは人のさがとてたれもみな見ることこそふ花の一時

みやこ人こ、ろの花もさかりにてつどふあらしの春の山ぶみ

たぐひなき山もあらしの名にたつを花のうきよのさがとこそ見れ

ひとよねてしきても見ばやあらし山さくらのにしきた、まくもをし

旅なるもかつはうれしき花さかりあらしのやまのうきをしらねば

亀の尾のむかひにたてるあらし山ちらずはちよの花も咲けり

亀の尾のながさかたにはさきもせでつらきあらしの山さくら花

おもふことながむるけふも山の名はこ、ろにか、る花の白雲

たぐひなき色をあらしの山の名はかねてもをしき花さかりかな

大井川花の早瀬をせきとむるゑせきばかりはなどなかるらむ

さくも猶あらしの山の名にしおひてはなの名たかくよもにちるらむ

山にいり小舟をうけて皆人もこ、ろご、ろの花をこそ見れ

松の名の月てふかたはかけかへて花にぞわたる春のもろ人

この山の花は亀山院の芳野の花をうつし給へるよしいひつたへたるは、まこ
となり。そは『続古今』亀山院の御歌に、「亀山の仙洞によしの山のさくら

をあまたうつしうゑ侍しが、花のさけるをみて 春ごとにおもひやられしみよしの、花はけふこそ宿にさきけれ」とあるがうへに、又「『新千載』後宇多院御歌に「あらし山これもよし野やうつすらむさくらにかゝる滝のしら糸」ともありて、この帝は龜山院の次の帝なれば、これらぞたしかなるあかしなる。されば、花のけはひの世にことなるもうべなりけり。

さて、そのよしの、花はわれもさきつとし見しことありき。まことにそのおほきこと、げにたぐひなく、うへなき花なりと、今までもひ居たるに、又あらし山の花もさるかたにて、花の外なるけしきもよにすぐれたる所なれば、よし野の花にもいかでおとるべき。げに花の都のうちにも、ことに人のいひもてはやす花の名所は、きはことなるものかなと、かへすもめをおどろかしぬ。

うつしこしよしの、さくら又さらにいるそふはなの都なりけり

今ぞしるよしの、花をよしとのみおもひてすぎし心せばさも

さきつとしの秋、この嵐山のもみちを見しをりも、春の花の時ならぬをいとくちをしくおもひて、花のさまいかならむとゆかしかりしに、ちぎりありてこたびこの花ざかりにあふこと、心のよろこび大かたならず。

花ならぬもみちのをりも又たぐひあらしのやまとおもひしものを

そのをりにははるかにまさりて、いひしらぬけしきを、家人にも見せたらましかば、いかにおかしとめではやすらん。されど、故郷のつとにいざともいひがたき花のことなれば、これのみ心のこりにて、ことかきたるこ、ちす。

わぎもこと袖ひきつれてともに見ばいかにあらしの山さくら花

かくて、川辺の茶屋といふにしりうちかけて、めもはなはず見たるほど、日もくれかゝりぬるに、夕ばえのけしき、いとあかずなむ。

名のみかはおつるゆふ日のはやきをもかこつあらしの山さくら花

花見にとてむれあたる人々ものこりなくかへりつくしたる夕ぐれのままを、心しづかにひとりみ居たるは、たのしきこといはむかたなし。

人ばかりうれしくちりてあらし山しづかにめづる花のゆふぐれ

色まさるゆふばえのみかしづけさもあかぬあらしの山さくら花

やゝくれはて、三日月のほのかにあらはれいでたるは、今ひとつのながめにて、ものあはれなり。

大井川花見むためとさしいでて月のみふねも猶こがるらむ

さく花を見せぬとならば今しばし木末にのこれゆふ月の影

橋の名になごととめて大井川おつるはや瀬の夕月のかげ

かくて、こよひはこのあたりの天龍寺のうちなる雲居庵といふにやどりぬ。

あらし山あたりの寺にぬるよは、ゆめのうちにも花や見えまし

三月四日

四日。

けふはあけぼの、花見むとて、暁ふかくおきいでて川辺にいたる。げにあけぼの、花は又ひとしほにて、この一時は外にくらぶるもの、あるべくもおもはず、いとおもしろきがうへ、きのふの夕ぐれに咲まさりて、けさはまことに花ざかり也。

きのふだにたぐひあらしの山さくらまたさきまさる花のあけぼの

けふは日ねもすこゝにてあそびむものをと、あるはほり、あるはくだりて、うかれありくこそ、たとへむかたなく、すゑろにこゝろゆくあそびなれ。きのふも花のために、いかゞなるえせ歌よみたるを、猶こりざまによめる長歌。

かけまくも あやにかしこし いはまくも ゆゑしきかも 花ぐはしき

くら花さく みよし野の よし野の山に 外宮を たかしりまして 山川

の 神とつかへし 天皇の その大御代ゆ も、たらず 代つぎましける 亀山の おほすめらみことと みよし野の その桜をし はるくゝにと

りもたせきて 行宮の 山のむかひに しげ山と しみさびたてる あし

ひきの あらしの山に こゝだくも うつしうゑむと 神ながら おもほ

しめして かしこくも うつし給へば たふとくも うゑたまへれば あ

らし山 その山つみも みいつにし つかへまつると おもしろく 花を

さかしめ 大井川 河瀬の神も みこゝろに つかへまつると その花に

けしきをそへて いにしへに ありけるごとく 山川の 神もつかへし

大御代の 花はこの花 そのときゆ としのへぬれど その山の いやた

かゝくに その川の たゆることなく 山もせに おひたちさかえ 花ぐ

はし さきのさかりは もゝしきの 大宮人も しづたまき いやしき民

も その花の さかりを見ると 山辺には 袖ひきつらね 川瀬には 小

舟うけなべ おのがじ、 きよりつどへれ われも又 見むとおもひて

雲あなす とほき国べゆ まゐのぼり 見えくよろしみ この山に 花う

ゑまし、 天皇の 大みこゝろの みやびをし あふぎたふとみ しぬぶ

けふかも

いかだしのくだしくるさまもめづらしくて、花のながめをそふるこ、ちす。

さく花のけしきをそへて外よりはこ、ろありげに見ゆるいかだし

いかだしにわが身をなさば大井川花のあたりはよそにすぎじを

いかだしのうきたるわざも大井川花ゆゑはるはうらやまれつ、

又、山辺にもゆきて、ほどちかく花を見まほしければ、渡月橋をわたりて、山辺をわくるも、またおもしろし。大悲閣といふにものほりぬ。この所、花はなけれど、見わたしのけしきいとよし。法輪寺にもまうでて、又はしをわたりて、さて亀山にわけ入て、亀山院陵にまうづ。この御はかじるしにうゑられたるさくらのさきたるを見て、むかしをしのびて、

よるづ代も花見むためと常宮を亀の尾山にさだめましけむ

とぞおもひ奉らる。この陵のかたはらにも墓じるしの木をたて、墓とおほしきもの、あるは、いかなる人の御墓にや。天龍寺の庭のうちに、任有亭といふちひさき亭あり。この亭よりあらし山を見るけしきよしとき、て、その亭に入て見るに、げにひとつのながめ也。その亭の名のごとく、あるにまかせたる亭にはあらず、嵐山のために、ことさらにまうけつくりたらんやうに見ゆ。

天かける龍の名おへる寺とてやむかひにたてる花のしら雲

いまだ日たかければ、又も川辺にいで、時うつるまで見居たるほどに、よ

みたる長歌。

のどかなる 春のさが野の あさがすみ たちいで見れば 又たくひ あ

らしの山の 花ざかり 松のこのまに 色はえて ひとしほあかぬ けし

きには ちよもへぬべく あくがれて むかふたがねの 岩間より おつ

るとなせの 滝の糸の ながきはる日も あかすのみ はやくれかゝる

夕ばえに 猶今しばし たちかねて いとゞなごりも おほる川 川瀬

の波の うたかたと ちりうくまでは いざこゝを たちもはなれず 見

つ、あそばむ

とはおもへど、東山の花ざかりも又見まほしければ、日もくれかゝるころほひ

より、宿りにかへらんとするに、なごりたゞならずおぼえて、

山の名にさそわかれのそれならで見つる花をしむゆふぐれ

太秦をすぐるほどより雨ふりいでたるは、いとわびし。山辺ならましかば、ぬるとも花の陰にかくれむものを、このあたりにてふりいでたるは、いと心つ

きなき雨かなとつばやきながら、からうじて宿にかへりぬ。

三月五日

五日。よべの雨なごりなくはれて、天気よし。

けふ東山の花見せんとて、祇園・智恩院・長楽寺・東大谷・双林寺・高台寺・清水などにもものす。いさゝかおそきはやくきはあれど、なべていづこも花ざかりにて、こゝも又めをおどろかすばかり也。東山の花もいみじう人のいひもてはやすなるはさることにて、げに花の都の春のけはひ、いひしらずなむ。その花を見むとてゆきかよふ人のさまも、おほどかにて、その中にあそびなどのいと花やかにとりよそひたる袖のしきも、田舎人のめには今ひとつのながめにて、いとたくみにとりよそひたる佐保姫のしわざかとあやまたる、ばかりなり。そのおほくの花のなかにも、智恩院の桜馬場の花ぞ、ことにひとときはすぐれたる。花のなかよりいらかたかき山門の見ゆるけしき、又山門にのほりて石のはしより見おろしたるけしきなど、たくひなくめでたし。

いひしらぬさかりを見せて山の名もとよりよそひたる花のいたゞき

さほ姫のみたましれてふ寺の名とおもひなざる、花盛哉

祇園の社にもちかきころさくらをおほくうゑられたるが、さかりなるを見て、

かみのそのむかしおぼえてこゝもまた八重垣つくる花のしら雲

双林寺の花を見て、

見わたせばならぶはやしも桜にて寺の名かほる花ざかりかな

この寺には西行法師・頓阿法師の墓あり。二人の法師の古き像もあり。又、西行桜といふ木も有。二人ともにこの寺にすみたる人にて、すなはち頓阿法師の歌に『草庵集』「西行法師のすみし跡に庵をむすびて あとしめて見ぬよの春をしのぶかなそのきさらぎの花の下陰」とよまれたることをおもひいで、

咲く花に見ぬよの春といひしをもまたやむかしくけふはしのぼむ

高台寺には姥桜といふ名だかき木もありて、さくらいとおほし。

ところからたかきうてなの名もしるくたちつゞきたる花のしら雲

清水の花も又すぐれたり。舞台より見おろしたるけしきいとよし。又、奥院

といふより見わたしたるけしきもおもしろし。

花見にとたれもきよりて清水の寺の庭こそにぎはひにけれ

ことなれやかれたる木にも花さくときし御法の庭の桜は

この寺の本尊は十一面観音なりとなべてはいへど、ある説に楊柳観音なりともいへば、

御仏もみてのやなぎをこきまぜて錦と花を猶や見るらむ

さて、此ころは日毎に花にうかれてすゝろにおもしろくおほえければ、

桜のみ見るにうつりて故郷をこひぬも猶やはなご、ろなる

人のにぎはひを見て、

こきまぜし柳さくらのそれならでたもとも花の都なりけり

とかへすゝもめをおどろかしぬ。

いひしらぬ都の花にみな人のこと葉のいろをかくるやさしさ

三月六日

六日。

けふはともなふ人ありて、ちかきあたりにものす。まづ聖護院にまうづ。この森のほとりに桜塚とて、ちひさき塚のあるは、左府塚をあやまれるにて、左府頼長公の御墓なりといへど、こ、はこの君をまつりたる社の跡なるべし。御墓は大和国にあるよし、『盛衰記』に見えれば也。『式』に見えたる「白河陵」といふも「在粟田郷」とあれば、このとほからぬあたりにありけんを、今はなごりもなし。又、崇徳院の陵も粟田にうつすよしものに見えれば、これもこのあたりにあるべきを、例のしる人なし。かの安井のほとりなる御廟といふは、所へだ、りたれば、あらざるべきか。又むかしはかのあたりまで粟田郷にて、かの御廟といふがその陵なるか、いかゞあらん。聖護院の熊野宮のほとりに崇徳天皇社・左府社とて、二座おはしますも、何とかやより所ありげなり。さて、黒谷にまうづ。この寺に吉備公の像あるは、いかなるよしにか。又この寺のうしろのかたに糸桜のよき木ありて、さかりなり。

黒谷の名にはよらでや糸ざくら糸うるはしくそめてかへらん

真如堂にまうづるに、この寺の前におほきなる稲荷社あり。

さて、芝薬師・東北院などいふにまうづ。この東北院に關白道長公の御像あり。又、和泉式部塔・軒端梅といふもあり。

それより吉田にまうづ。大元宮とかいふあやしきかたをしたる宮を本社といふとかや。春日社・霹靂神社などにもまうづ。後三条院陵はこの山の南の方にあるよし、ものにも見えて、則、南のかたにありしを、今はこの吉田家の墓所

となして、陵は吉田家よりこぼちたりとぞ。常の人のかゝることをするためなどいかになることなるを、まして神につかふる氏人の、かゝることしいでたるは、あさましきこと也。そのみならず、すべてこの吉田の家にてなすこといふこと、いかになることゝもおほし。今はこの吉田家、くにぐの神社のことにつきては、官のごとくなりたれば、神のまことの道をとけば、その道のくにぐにひろくなりぬべきを、あやしきことのみいひだせば、そのあやしき道をまなぶ神主たち、よにおほくなりもてゆきて、神の道のたゞしきかたは世にしられず、神の道も仏の道もおなじもの、やうにおもへるよ人おほかり。又あやしき説などは、いさゝか心ある人などはいかにきゝて、まことの神の道をもあやしきもの也(マツ)もおもふもあり。そのみなもとにごれるによりて、流の末まできよからずなりたるは、またく此よし田の家のあしきなり。まことになげくにもあまれることなりかし。

百万遍・干葉寺などにまうづ。

さて、銀閣寺のかたにゆかんとする道に福塚といふがあるは、後二条院陵にて、いと大きなり。又このちかきあたりに石仏の大きなありて、いとふるきものと見ゆ。

かくて、北白河の里をすぎて、銀閣寺にまうづ。この寺の庭よし。足利義政の茶湯といふわざをはじめられしはこの寺にて、東求堂といふがそのなごり也。この茶湯といふわざ、今の世にはおほかた人のもてあそぶわざにて、いとひろくなれり。昔のさまはいざしらず、今のよにてはこのわざは、ものしらぬおこ人のものしりがほする為のものにて、ことにつひえおほく、ようなきわざなり。さるをはじめられたることをおもへば、あしと名におふ足利の、あしくよしなきことかなと、しらぬ昔のことながらも、つぶやかれぬ。

猶このあたりこれかれ見むとおもふほどに、空うちくもりて雨ふりいづ。これによりて、ゆかまほしき所もけふはまづさしおきて宿にかへらむものと、岡崎のかたにいづ。こゝに本光寺といふ寺のあるにまうづ。この寺のちかきあたり、畑の中に法勝寺の塔の跡といふ芝生あり。このあたりにて雨やみたれば、青蓮院の中をとほりて庚申堂といふにまうづ、智恩院(智)にゆかんとす。このあたりに明智光秀首塚といふもあり。

かくて、けふも又、智恩院の花を見るに、猶おもしろし。

春雨のなごりの露の玉かづらかけてよそほふ花のいたゞき

祇園にもまうでたるに、けふはこゝに能といふもの有。こは中昔にはじまりたる猿楽といふものにて、見所あり。これにつきたる狂言といふものもあれど、こはおもしろからぬものにて、いとく俗なり。

それより円山安養寺にもす。この山のうへには阿弥陀堂もありて、寺ながら、鱧の広物、はたのさものをてうじて、人にくはする坊、五六軒ありて、ためしすくなき寺也。その中なる蓮阿弥といふ坊に立よりのものなどくふ。この楼よりよもの山々いとよく見え、都の家ゐはのこりなく見わたされたるけしきいとよく、おもしろき楼のさま也。

身をやすくやしなふ寺の名もしく見おろすよもの空もゆたけし

この所に山猫といふものありときけば、「いかなる獣にか」と、ともなへる人にとひたれば、その人ほゝゑみてこたえず。なほあやしとおもふまゝに、かさねてたづねたれば、「獣にはあらで、酒の席にいで、舞などをもかなづる遊女のことを、かくいふなり」とこたふるをきゝて、かたくなに獣のこと、のみおもひ居たるを、われながら田舎人の心なりとをかくしおほえし。

三月七日

七日。

けふも又、人にいざなはれて嵐山の花見にもす。よきつひでなれば、いさ、か道をまはりて神泉苑にもす。こゝに桜の一木二木盛にさきたれば、『日本後紀』弘仁三年の春、はじめてこの所にて花宴のありしことなどおもひいでられて、いとあはれなり。

この池にさけるさくらやなべてよに花もてはやす水の水上

この池のきしのさくらにこと、はむふりしみゆきのこともしるやと

きて見れば童のかしらの大御舟おもかげたてる花のしら雲
太秦の花をけふも見て、嵯峨なる臨川寺・鹿王院などいふ寺にもまうにづ。
いとよき寺ども也。

さて、嵐山にいたりて見るに、四日に見しをりよりいさ、かさかりはすぎにたれど、又、咲いでたる花もありて、猶えならず。そのさまけふはじめて見たらんやうにめづらしくもあかずもおぼゆるは、げにあやしくたぐひなき山の桜なりかし。

二度もみたびもいはじあらし山千とせ見るともあくさくらかは

けふは舟にのりて見むとて、ともなへる人とかたらひて船をあつらへぬ。その舟人は「はや」ともいはねど、いそぎのりつ、川瀬をのぼりくだりして、船のうちより見やる花のけしきも又ひとしほなり。

あしびきの あらしの山の 山陰を のとながる、 大井川 きよき川
瀬に 花見むと 川舟うかべ 川のぼり わかのほれば 山辺には 木末
しみに、 さくら花 はな咲を、り おのがじ、 さかりあらそひ 川辺
には その花見ると 美婦人の いむれつどひて おのが身の さかりあ
らそひ 山川も 花にされる けふのこの けしきを見れば 花ぐはし
花の都と 人皆の いふもうべなと 天ざかる ひなにすむ身は むらぎ
もの こゝろおどろき まそかみ 見のめづらしく 日ねもすに いゆ
きかへらむ 川舟の もそもそろに ゆかくしよしも

山陰に舟をよせてさ、ごひらきなどするも、いと興あり。

大井川山陰ちかく舟よせてこゝろゆく瀬にさくらをぞ見る

この所の鮎をもとめててうじたるも、むかし物語に「西川の鮎」と見えたるおもひいでられて、みやびやかにおほゆ。かくかずならぬことまでも心にしみておもしろし。

さて、あまたの花のなかにはちるもありて、風のまに／＼舟のうちに二ひら三ひら吹いたるもおかし。

山の名もけふはうれしきこゝちして袖にさくらのちりか、りつ、

あこがる、心やしりて舟のうちに花ふきいる、岸の春風

名にしおふ山のあらしのさそひきてふるかとぞおもふ花の白雪

かくて、申の刻ばかり船よりいで、かへらむとするに、けふはことさら名ごりをしくおほえければ、

わかるとてあひもおもはぬ花なるをこゝろよわくも見すてかねつ、

これより野宮にまうづ。こゝは昔の神宮の跡にて、今も黒木の鳥居をたてたり。常寂光寺といふにもまうづるに、定家卿の時雨亭といふ、この寺にあり。また定家卿社といふもあり。こはこの卿の御墓のありけるを、むかしこぼちたる時、たゝりのありしかば、そこにこの社をたてたるなりとぞ。

二尊院はよき寺にて、こゝにも時雨亭といふあり。すなはちこの寺は小倉山の麓なり。それより厭離庵といふにもまうづ。この寺の門の外に為家卿の御墓あり。又、寺の中に定家卿の御墓もあれど、こは為家卿の御墓にはやうかはり

て、つくりたるさましるく、うけがたし。この厭離庵は、かの定家卿の小倉山莊の跡なりといへり。この山莊には、為家卿もつきてすみ給ひしよし、ものに見えたるうへ、その卿の御墓もありて、小倉山のほとりなるをおもへば、その跡なるべし。

さかの山さくらわけみしかへるさにこと葉の花の跡をとふかな

さて、定家卿の御はかといふ、外にもあれど、いづれもうけがたし。かの常寂光寺にありしが、たゞりなどのありしをおもへば、まことの御墓にはあらじか、いかゞあらん。

このあたりいまだしらがれば、けふかくまうでたる也。猶たづね見まほしき所、このあたりにこれかれあれど、花に心のひかれしまゝに、日もくれかゝりぬれば、宿にかへらむとす。ふるき跡をたづぬることを、わがさがとしてこのめるものから、さすがに花にはかへがたくなむ。

かくて、帷子辻といふにいづるに、小山ありて陵のさましたるは、いかなる人の御墓ならん。またこのあたりに甲塚といふもありて、これもふるきよの陵と見ゆ。よく考てしらまほしきこと、おほゆ。

かくて、くれふかく宿にかへりぬ。

三月八日

八日。

朝おきいで、東山の花を見やりて、

さしいづるひむがし山のさくら花ひかりことなるさかりをぞ見る

東山はなにむかふも故郷の空を見やると人やおもはむ

このころ東漸寺の花盛とき、て、見にもぬす。こは東大谷のうへなる寺也。この東漸寺の花は太山府君といふ一木の名だかきさくらにて、まことにうるはしき花也。桜町中納言成範卿の花の盛のみじかきことをなげき、大山府君にいのりて矢根をうけ給ひし古ごとによりて名づけたるばかりにて、かならずその木にはあらねど、ふとおもひいづるまゝに、

なが、れといのりて神にうけし矢の根にかへるをもしらぬ桜か

それより東大谷・双林寺などの花を見て、祇園女御墓といふにまうづ。この墓は祇園女御墓にはあらずともいへり。

さて、長楽寺にてしばしあそびてかへりぬ。

三月九日

九日。

南禅寺にまうづ。いと大きなよき寺也。この寺の東のかたの門をいづれば、やがて永観堂の門の前にいたる。この永観堂は、庭に池などもありて、桜おほくよき所なり。本尊は名だかき御仏なれば、御とばかりか、げさせてをがむに、名もしるく、見かへり給へる御像也。何とかやこの見かへり給ふゆゑよしをも法師にき、たれど、うちわすれぬ。

かくて、花のふもとにしばしいこひて見居たるほど、あかずおもしろし。そこをたゝんとすとて、

みほとけにあらぬわが身も立かねてあかず見かへる古寺の花

若王子社といふは、滝などおちてもものさびたり。それより光雲寺といふにまうづ。この寺にも花あり。

寺の名も空にいられて咲たてる光ことなる花の白雲

鹿谷といふに住蓮山安楽寺といふがあるにまうづ。この寺の庭の糸桜、いさゝかさかりはすぎにたれど、大きな木立おもしろく咲みだれたり。又この寺のおくに鈴虫・松虫といふ女の墓ありて、ならびたてり。このゆゑよしをき、てたはむれに、

たづねきてあはれとぞきく鈴虫のよをふりすてしむかしがたりを

つれもなくうき世をすて、此寺の苔の下なる松虫の声

万無寺といふはきよらかなる寺にて、本堂のかざりさま、いとうるはしく、つくり花などをちらせるさま、よにことなり。

このかへるさ、けふも又、智恩院・長楽寺の夕ばえの花を見てかへりぬ。

三月十日

十日。

上鴨の御社にまうづ。たふとさいはんかたなし。前なる馬場の桜、いとおもしろし。この花などは見にくる人もなければ、心しづかに花のもとにいこひてながめ居たるほど、たのしさふかくおほゆ。

神山やわきいかづちの宮ちかくさくはのどけき花のしら雲

これより今宮にまうづ。けふはこゝに安良比祭といふ祭あれば、そを見むと

て也。こはちかきあたりの里人の行にて、しばし待居たるほど、未の刻ばかりにその祭出来たり。そのさま、赤き衣を身によそひて、しやくまとかいふ鬼の頭のごときものを頭にかぶりて、鐘・太鼓をもちたるひと四人、また烏帽子に似たるやうなるものをかぶりて鞆靴をもちたる見二人、素袍・烏帽子にて太刀を肩にかつぎたる人十人ばかり、花笠をさしたる人一人、扇をもちたる人あまたにて、かの鐘・太鼓・鞆靴をもちたる人は、そをうちながら、その外の人々もなべておなじ声に「やすらひ花よ、やすらひ花よ」とくりかへしつゝ、うたひながら、鳥居をいりきたりて拜殿を三度めぐりて、かの赤衣をきたる四人は、御社の御前にいたるごとに三度をとる、そのさまいとふるめかしくて、神の御心にもかなひぬべし。今のよのさまにはいとことなれば、古このむともがらめにはとまる祭なりけり。

すむ民をやすらひ花のやすかれとうたひてはらふけふの神わざ

くる人もやすらひ花のやすらひてつゝ、みうち見る神祭かな

をこなりと人はいへども神祭あなおもしろとわれは見はやす

そもこの祭は、昔の鎮花祭のかたちのこりたるなりといへり。この鎮花祭といふ祭は、『式』『令』にも見えて、大神狹井の祭也。そは春花のちるころには疫神のわかれちりて、わざはひをなすをしづむるために、かならずこの祭のあるによりて、花しづめの祭といふよし見えて、年毎の三月におこなはれたる祭なるに、この祭もその祭とおなじく三月にて、「やすらひ花」といふも、鎮花といふによしのなきにしもあらず。もとよりこの御社は、さきにもいへるごとく、一条天皇の御代に疫病をおほく人のわづらひける時、そをしづめんとて、この所にもいはひ給へるにて、この大神はすなはち疫神なるに、けふの祭は疫病をはらふ祭なりといへば、かの鎮花祭のなごりなること、うたがひなし。

さて、やすらひといふ名のごとは、『百練抄』久寿元年四月の所に、都の児女のみやびやかにかざりて、鞆をしらべ笛をふきて、紫野の社にまゐりたるを、世に夜須礼といひたるを、勅ありてとゞめられたるよし見えたれば、その時の名の今にのこれるものなるべし。やすらひとは、何ゆゑに名づけたるにか、今にてはわかりがたし。その時すでにとゞめられたりしを、いつの世よりか、年ごとにかくまつることの又はじまりて、今の代までもたえずまつるものならん、その時もわかりがたし。このやすらひ花の歌といふを、寂蓮法師のつくられたりといふは、いかゞあらん。又『夫木』西行法師の歌に「高雄山あはれなり

けるつとめかなやすらひ花とつゝ、みうつなり」とあるは、昔この祭の高雄にもありしか、又は外のことをいへるか、これもいぶかし。

このちかきあたり雲林院村といふに雲林院あればまうでたるに、庭の桜花さかりなり。この寺は雲のはやしと名だかくきこえて、昔は大寺なりしを、今はつかなる小寺となりて、花見などにくる人も見えぬ。こゝにて『古今』そうく法師の「いざ桜われもちりなんひとさかりありなば人にうきめ見えなん」とよまれたることなどおもひいでられて、

一さかりありてうきめと花さけど来る人もなき古寺の庭

あまたにはあらぬさくらに今は又雲のはやしも名のみたちけり

平野の花も此ころさかりなるべければ、そを見むとて船岡山のふもとの道をゆくに、陵ありてしるしの札をたてられたり。こは円融院をかくし奉れる所なるべし。この帝をこゝにかくしまつりける時『後拾集』、左大臣朝光ぬしの「紫の雲のかけてもおもひきや春の霞になして見むとは」とよまれたること、をりからおもひいでられて、あはれにおぼえ奉りければ、

へだてこしむかしをかけて草の原あはれたちそふ春がすみかな

この船岡山をめぐりたる西のふもとにも陵ふたところありて、これも札をたてられたり。すべて都ちかきあたりの陵は、ちかきころ陵の地、何間何尺とこまかにしるしたる札をたて、竹垣めぐらされたり。こはいとかしこくかたじけなきこと也。これにてはつかなる芝生ながらも、末とほくよにくちせぬことよろこばしくなむ。すべて陵といふものは、神社などにはやうかはりて、人のまうづること、願をかくることなどのなきものなれば、おのづからにその跡のしれがたくなりよるべきものなるを、かくいさゝかの芝生ながらも、よくのこれる也。人々のまうで、願などをかくる神の社すら、ふるくものに見えたる神社のうちには、しられずなれるもおほかるを、ましてひろく人々のしらぬ陵の所々にのこれること、たふとくなむ。されど、中昔より十陵九墓とかいひて、その陵墓ばかりをまつりたまへるにて、外のみさゝぎどものことのすたりゆきて、中にはしれがたくなりたるもこれかれあるは、なげかはしきこと也。こはかならずこゝにいふべきことならねど、ふとおもひいづるまゝにかきつく。

さて、この陵一つは近衛院、一つは後冷泉院を火葬奉れる所成べし。近衛院の御骨は美福門院の陵に合奏し奉れることは上にいへるがごとし。ある説には、この一つの陵、近衛院を火葬し奉れる所とも、後冷泉院をかくし奉れる所とも

しれがたく、一つは後朱雀・堀川・三条、三帝を火葬し奉れる所なりといへり。これより蓮台寺といふにまうで、千本閻魔堂といふにまうづ。この寺の庭に普賢象桜とて名だかき木ありて、さかりなるが、いとうるはしき花也。

さて、この寺に春毎に大念仏といふがありて、狂言といふものをなすことあり。こは普賢象桜の花のさくを時とはじむる也。先この花を一枝をりて、奉行といふ官に奉れば、その官より米三石五斗を給はる。その米をかの大念仏をおこなふ料として、その狂言といふをも七日の間おこなふ也とぞ。

さて、その桜の枝は、その官よりやがて獄屋に給ひて、獄屋にありとある罪人を、一日の間ゆるされ、酒・酒菜サカナをもたまひて、その花を見せたまふがふるきためしなりとかや。まことに花の都は都にて、罪人にいたるまで、花見をなすこと、いとみやびやかなる事ども也。かゝるためしの外にあるべしやは。

大君のもれぬめぐみに罪人も花見て御代の春やたのしむ

すなはちこの花をけさしもかの官にさ、げたりといへり。大念仏は十九日よりはじむるなりとぞ。このはじむる日をも、かの官よりさだめ給ふ也。

さて、この閻魔堂は、むかしの獄屋の跡にたてたるにて、そのゆかりにこの花を罪人に見せ給ふためしなりとかや。

又この閻魔王につきてをかしきことをきけり。そは、さきつとし、いかなるをこ人にかありけむ、この閻魔王の像の舌の白銀につくれるをぬきとりてぬすみさりたる也。このゑんま王の居ますといふ地獄とかいふ所におちたる罪人こそ、舌をもぬかるべけれ、その所の王なるゑんま王の舌を人のぬきたること、いまだきかぬためしなれば、興ありてをかしくおほゆ。そのをりまではあらはに見えたる像なりしを、そのをりより扉のうちにかくして、みだりに人に見せずといへり【付箋・エンマ王ノコト、ケヅリ去ベシ】。

これより千本釈迦堂シカドウといふにまうで、北野にいづ。例の天神御社にまうでたるたふとさ、たぐひなし。かくて紙屋川をわたりて、平野社にまうづ。かくやあらんとおもひこし心のうらもまさしく、花ざかりなり。

難波津のむかしの春べおもほえて平野の杜にさくやこの花

とよみたるを、ものしり人のきかばとにかくいむか。こは『統古今』家隆卿の歌に「難波津に冬ごもりせし花なれやひらの、松にふれる白雪」とあるによりてよめるのみ。

さて、この所の桜いとおほくて、なみくの花にはあらぬを、その花見むた

めにその木本にたてたる茶屋といふもの、あまりに教おほくて、その屋根にて花をかくしなどして、木本より花を見るためにさはりがちなるは、いとうるさくて、くちをしきこと也。

御室の花もさかりときけば、これをも見にもものさんとす。その道をいさ、かまはりて等持院にまうづ。こは衣笠山のふもとにて、よき寺也。花もあり。

さく寺はひとしくもつといふ花も見人ごとにをるをゆるさず

龍安寺といふにもまうづ。この寺の庭に池ありて、水鳥のおほくむれぬたるさま、おもしろし。

さて、仁和寺にいたりて花を見るに、こ、もおほかたさかりにて、そのはな見むためにつどへる人ども、これかれあり。

さくらにはたれもつかれてひとご、ろやはらく寺の花ざかりかな

さかりなるみむろのさくらきて見れば花のあはれもふかくこめたり

御くらゐの後のみむろに咲みちてさくらはけふをさかりなりけり

この所の花は常の花の木どもにはやうかはりて、おひいでたる本よりやがて花のさきて、木末どもに花のなべて咲たれば、これもめづらしき一種の桜也。

さて、この寺もさくらはいとおほけれど、何のあやもなくたひらかなる所にさきたるなれば、あまりにはえなく見ゆ。されど、かくいふはこのころ都の花を見なれたるよりの心おごりなるべし。この花もわがすむ里などにあらば、うへなき花とめではやして、人にもほこるべきものなるをや。この寺の花、さては平野などの花は、厚ものと俗にいひて、花びらのおほきくあつき花にて、山桜には時さへいさ、かおくれ咲いづる花なり。されど、さかりのながきこと、山ざくらにはまされり。花の本にむしろなどをしきて見ぬたるほど、そらかきくもりて雨ふりいづ。この雨にておほくつどへる人々もおほかたはかへりつくしたれば、例の心しづかに見ること、たのしさふかし。

さく花のぬる、いとほしめやかに見るかためづるけふの春雨

あかずおもふ花のほひに袖ぬれてふるもうれしきけふの春雨

けふのかへるさ、並岡・妙心寺などにもゆかむとおもひ居たりしに、この雨にてえゆかずして、むなしく宿にかへりぬ。

三月十一日

十一日。けふも雨ふる。

つれづれなるまゝに、せめてはちかきあたり見ありかむとて、智恩院^(題)にもするに、桜は大かたにちりはて、はやくも青葉のしげりたるを見て、

うつろひて花のいたゞき老ながらなどかみどりの髪の色なる

木本にたちやよらましか、りても青葉の露は人もとがめじ

長楽寺に開帳といふものあればまうづ。堀川の北なる水火天神の御像をこの所にて人にをがまするなり。何くれと宝物などもあり。

かくて、双林寺・目疾地藏などにもまうでぬ。

三月十二日

十二日。けふも猶雨ふる。

蛭子宮といふにまうで、建仁寺にもまうづ。この寺も五山といふ寺のひとつにて、大寺也。にぎはしき町の中でありながら、ものさびびて心しづかなる所也。これより松原通の橋をわたりて、南岩倉といふにまうづ。こは都の四方に経をさめたる四の岩倉のそのひとつなりといへり。

さて、仏光寺にまうづ。この寺は田舎人などもおほくまうづる寺也。

ひたぶるにほとけの光あふぎてやとほき国より人のまゐくる

六角堂にまうで、かへるさ瑞泉寺といふにまうづ。この寺には秀次公の墓といふあり。かりそめなるみはかにて、いとものあはれにおほゆ。

三月十三日

十三日。

このころの雨なごりなくはれて、けふは天気よければ、醍醐のかたにもものせんとて宿りをいづ。そのつひでに三の峰にもほらんとて、けふも稲荷のかたにもものす。一の橋といふに崇道天皇塚本社といひて、則、御墓なりといふ所あり。この君は藤社にいはひまつれる神なれば、その藤森ちかきあたりにみはかのあるがうべなるやうなれど、『式』に大和国添上郡なる八島陵といふが崇道天皇とあれば、この所は後人のつくれるなるべし。

田中社といふにまうづ。この御社には〔著聞集〕和泉式部のまうでたることなどあれば、ふるき所ときこゆ。されば、『三代実録』に「田中神」と見えたるも、この御社のことなるべし。

さて、稲荷社にまうで、東のかたの道より三峰にのぼるに、けしきよし。

のぼりはてたる所に塚のごときものありて、上の塚とも上の社ともいふ。こ、は昔の社のあとなるべし。さきにしるせるとく、中の社・下の社といふはふもとにありて、こ、を上社の社といふなりけり。すべてこの山に塚といふところ九つありといへり。その四つはけふ見たりしに、いづれも塚などのやうにも見えず、さりとしてこの山に社の九つありしことも見えねば、社のあと、もおもはず、何ならんといぶかしくおほゆ。

「杉の木どもはこの山になしや」と人にとへば、「そは山の東のかたにおほし」といへり。ゆかまほしけれど、道あしときけば、えゆかず。ふるき歌どもに、杉をいみじくよみたれば、その所、昔の社のあとにはあらしかと、いとゆかしくなむ。

この山の南のかたにくだりて、中茶屋といふにいづ。しばしゆけば勧修寺村にて、勧修寺の宮といふもあり。このさとに三条右大臣の御墓ありて、ちかき頃、碑をたてられたり。これも言葉の道のひらくるしるしの石とよるこぼしくおほゆ。又この里に八幡社の大きなおほしします。又、宮路氏弥益といふ人をまつれる両社大明神といふもあり。『式』に「後小野墓宮道氏（在山城国宇治郡小野郷）」と見えたる人のことなるべし。

しばしゆきて小野のさとにいたる。こ、にてかの後小野墓のことをたづぬれど、しる人なし。又、墓とおほしきものも見えず。かの勧修寺村は今山科郷なれど、昔はかの所までを小野郷といひて、両社大明神はそのかの上にまつりたる社にて、後小野墓は則かの社ならんかともおもへど、鎮守などいふ社のやうに見えて、かの所も墓のやうには見えざりき。山科の大宅村の大宅寺といふに、この人の墓といふありときけり。かの寺はこの人の孫を守奉りたる姥の家に塔をたてたるを、大宅寺といふと見えて、この人にゆかりあれば、その大宅寺のあたりまでも、むかしの小野郷にて、その墓がまことの墓なるか。又、弥益といふ人の家は、今の勧修寺の所なりとあれば、墓のやうには見えざれど、かの両社大明神といふが墓のあとなるが、この弥益といふ人のことは、『小世継物語』に見えたり。猶よく考べきこと也。

この小野の里に随心院といふ寺ありて、庭の桜盛也。こ、より醍醐にはほどちかし。醍醐はいと大きな寺にて、堂のたてさま、仏像などもふるく、たふとし。この寺にさくらいとおほし。けふはこの花見むために、ふりはへてまうでたるに、いづれもさかりすぎて、青葉のみしげりたるは、あかすくちをしくなむ。

この寺のむかしのことなどを、例のおもひいで、

この寺のすぎしきかりぞしのばる、花の青葉を見るにつけても

さきのこりたる木末は、やうく一木二木なり。まことやこのころは、日ごと花のみめなれたるものながら、かくあまたの中にて一木二木咲のこりたるは、いとめづらしくおぼえて、中々にあかずめとまるこ、ちす。

咲のこるふかきあはれにたちかねてまたいこひみる花の下陰

この所の花はおそしとかねてき、たれば、この頃やさかりならんとおもひしにはたがひて、盛にあはざるこそ、心のこりなれ。都の花もおほかたはわけつくしたるを、この所の花をのみ見ざること、かへすくもくちをし。

中々にはやくさきしをうらむるも猶やさくらの花心なる

上の醍醐にもゆかまほしけれど、さては一日のうちにかへることかたしといへば、えゆかず。この寺の東の門をいで、しばしゆきて、醍醐天皇陵・朱雀天皇陵にまうでぬ。いづれも山はなくて、木ぶかき林に、例のしるしの札をたてられたり。

これより大宅といふ里にいたる。かの宮路氏のはかといふにはえ立よらず。このさとに岩屋明神といふ社おはしまして、大きな鳥居たてり。この岩屋明神といふ、山科のうち外のさとにもおはしますといへれど、この宮を一の宮と申ときけば、『式』に見えたる「山科神社」にはあらずか。この鳥居の前より西のかたにゆく小道に入て、馬背坂といふ所の畑の中に、坂上田村麿の君の墓のあるにまうで、栗栖野村といふにいづ。こゝにことごとくしき名のつきたる稲荷社あり。

これより花山村にいたる。入口に花山稲荷社あり。南花山といふをすぎて、上花山といふにいたれば、福應寺といふ寺あり。この寺に小松内大臣重盛公の御墓といふがありて、うへにこの君のもち給へりしといふ地藏をおきたる堂有。『平家物語』にはこの君の墓をほりて骨を高野におくると見えたれば、もしはその御墓の跡ならんか。

そはとまれかくまれ、昔をしのびて、

老松のはびこる陰にたへかねてかれしこず糸のなげきをぞおもふ

姫小松かれずあかせばたひらかにちよもさかえむねざしならまし

これより北花山にいたる道のかたはらに塚あり。遍昭僧正の墓このあたりにありとき、しかば、これやそならんとおもひて、「いかなる人の墓にか」と畑つくれる里人にとへば、「百人一首」の中にある人のはかにて、名はわすれた

り」といふを、こなたより「僧正遍昭にはあらぬにや」と、へば、「さなり」とこたふ。さと人などは、えたりがほにあらぬさかしらにいふがたくひおほかるを、このさと人の「百人一首」のうちにある人」とこたへたるは、さかしらにあらねば、中々におかしくおぼゆ。げに「百人一首」といふものは、世にひろく名だかきものにて、歌の心しらぬ、畑うつ賤までもよくしりたること、あなたふと、今さらに心おどろかれぬ。

さて、北花山に元慶寺といふ寺あり。これもふるくものに見えて大寺なりしを、今は禪宗のわづかなる小寺となれり。こはこの寺の跡たえたりしを、禪宗の何がしといふ法師が再興せるなり。よりてふるき跡ののこれるは、あたらしきようなき寺をたてたるにはまさりて、さるかたにおぼゆ。この寺はかの僧正のすみし所にて、『古今』亭子法皇のこゝにおはしまして、かへらせ給ふ時、僧正の「さてといはゞいとむかしこし花山にしばしとながむとりのねもがな」とよまれたることなどおもひいでらるゝに、本堂の前なる桜の一本さかりなるは、をりにふれていとものはれ也。

さかりなる春はむかしとふりはて、花もかすかにのこる古寺

しばしともとりはなかねど花山やあかぬさくらを立どまり見む

この寺のおくのかたにとなりて、東山寺といふがあるにもまうづ。これより渋谷といふにいづ。こゝに梅本寺といふ寺のあるにまうで、この里より坂路にかゝる道を渋谷越といへり。その坂をのほりくだりて、小松谷といふにいづ。こゝに正林寺といふよき寺あり。又、馬道といふ所の人の家の庭に継信・忠信の墓といふあり。こはこのあたりに墓のあるべき人ならねば、誰人の墓をかくあやまれるならん。たれしの墓とも名はゑりつけねど、「永仁三年」といふ年号をゑりたること、あざやかに見ゆ。さればふるき墓にはうたがひなし。この年号も継信・忠信といふには時たがへり。このちかきあたり三島明神といふにもまうで、日もくれかゝるころ宿にかへりぬ。

三月十四日

十四日。

綾小路なる大原社といふにまうで、それより西本願寺・興聖寺・本国寺などにもまうで、そのかへるさ、あひしれる人のもとをこれかれとぶらひぬ。

三月十五日

十五日。

御所八幡といふにまうづ。よき御社なり。それより本能寺にまうづ。この寺は織田内大臣信長公のうせ給へる所なり。さばかりいきほひたけくましまし、君の、逆臣の為にうせ給へることおもひいづれば、かなしきたへがたし。則この寺にこの君の御墓のあるをがみて、

しひしそのときしのぶればわが髪もさかしまごとをにくしとぞおもふ

これより大雲院といふにまうづ。そはこの寺のうちにおはします天満宮の開帳といふものこのころありて、にぎはふよしき、しかば、まうでたる也。この寺は信長公・秀吉公などにつきたるゆゑよしあれば、ふるき宝物ども数かぎりもなくもちつたへたるを、この開帳につきて人々に見する也。あるはふるき画、あるはふるき器ものなど、おもしろきがあまたあれど、それとさだかに心にとまりたるものもあらざりき。又この寺のうちにも信長公の御墓あり。その傍に信忠公の御墓といふもあり。まうで、宿にかへりぬ。

さて、こよひの夕ぐれのけしき、例の楼より見居たるに、東山の高ねより望の夜の月の霞で出たる光、おもしろし。

ふるさとのかたとおもへばなみださへかすみをそへていづる月かけ

しばし見居たるほどに、霞はのこりなくはれて、秋の夜などのやうに、いとさやかにすみのぼりたる光も又おもしろし。

すむ月のひかりの花もひがし山なほたゞならぬながめなりけり

東山すぎしさくらの跡とめてひかりの花をちらす月かけ

西山の花見しをりにひがし山月のあはれもおとりやはする

かすみかはさやけきかげにあくがれてなみだも今ははるのよの月

や、ふけゆくまゝに、「かくばかりをしとおもふよを」などうちずんじつ、かくながら見むことさへをしければ、うかれいで、加茂の川原をのぼりくだりなどするも、いとけうあるこよひのさまなりけり。

ひがし山月のひかりのうつろひてひとすぢしろき加茂の川水

(外題)「柳桜日記 中」

(内題)「柳桜日記中の巻」

三月十六日

十六日。

ともなふ人ありて、山嶺といふところにあそびにものす。その道ならねど、すこし道をまはりてちかきあたり見むとて、北白川の里をすぎて、將軍地蔵といふにまうづ。こは北白川のちかきあたりの山にありて、けしきいとよき所なり。この地蔵はもととはこととこにありしを、こゝにうつせりといへり。もとのところを今も元將軍地蔵山といひて、比枝の山のちかきあたりにあり。

さて、この山のうへにてしばしいこひて、ふもとにくだりて山のもとなる道をゆきくゝて一乗寺村といふにいたる。入口にさがり松とて名だかきまつあり。この里に八大龍王の御社といふおはします。

そのみやしろちかきあたりに、詩仙堂といふあり。こは石川丈山といふ人のすみし跡にて、くさくさのものありときけば、いりて見るに、その人のもちたりといふもの、かぎりを、そこにすむ尼のいできてことごとく見せたり。されど、こちたきものばかりにて、めもとまらず、見るもうるさきこゝちすれど、さるおも、ちせんもいかゞなれば、ものめでがほしゑたるも、こゝろのうちくるし。又この堂のうちに、唐国にて唐歌に名ありしひとの像を三十六人絵がきて額にかけたり。詩仙堂といふはこれによりて名づけたること、聞ゆ。この所の庭に、としふりたる松ありて、葉なみ木立もよにことなる木なり。

さて、赤山神社にまうづ。このあたりより修学院の行宮いとまちかく見ゆれば、よそながら見奉るもいとかしこし。このあたりは北山にて、さむきけにやあらむ、この行宮の御庭の桜、このころさかりにて、いとおもしろく見ゆ。ちかきに行幸あれば、みゆきの道は里人どものいで、道つくりなどしゑたり。

あだならぬこゝろありてやさく花も年にまれなる行幸まつらむ

北山やちかきみゆきに時をえて恵みひらけたるさくらなるらむ

かくてかの山嶺にいたりて、物くはする家に立よりて、ものなどくふ。やがてこの家のうしろは川にて、その川にかけたる家なれば、いさぎよき川瀬のまへをながる、さま、むかひなる山の岩のたゞまひなども、世はなれたるこゝちのせられて、おもしろき所也。

こゝろゆく川瀬にちかきいはやまはながき日見ても立がたきかな

くれすぐるほどまであそびて、宿にかへらんとす。今はいざよひの月もかすみてさしいでたるに、かも川のつゝみをくだりゆくほどのけしき、例のいひし

らずよしあるこよひのさま、わすれがたくこそ。

月かすむ加茂の川辺をよるゆくもおぼろげならぬあはれなりけり

きよき瀬もにごると見えて加茂川やすむ影かすむ春の夜の月

すむかけはくもれる月もきよきせを猶やたづぬるこゝろならひに

三月十七日

十七日。

東寺のかたにもせんすとす。その道にもこれかためまほしきところへあれば、まづ御磐昌社（磐）といふにまうづ。このやしるは『宇治拾遺物がたり』に見えたる長門前司の女をまつれる社なり。この女の身うせけるとき、鳥部野におくりけるに、そのからのおのづから家にかへりて、又棺をさむれば、やがてぬけいで、つひに土よりおひたる大木などのやうにひきゆるがさんやうもなく、おもくなりたれば、せんかたなくて、その家の板じきをこぼちて、そこにをさめんとせしに、いとかららかにりたれば、すなはちその板じきの下にをさめたるに、つひにはその家にすむ人のなくなり、その塚のあたりはむつかしきことありとて、人も居つかずなりしかば、その塚のうへに神の社をいはひたる、その所は、高辻より北室町より西と、かのものがたりに見えたり。今あるところ、すなはち高辻通の室町の西にあり。かゝる跡の今にのこれるは、ことにめづらし。かくのこりたるは、むかしもむつかしといひしごとく、家などをたつれば、たゞりなどのありて、おのづからに人もおそれたるによりて、のこりたるものなるべし。このまうでたるやしうしろのかたに、今ひとつ社のあるが、その塚なりといへり。その所には、みだりに人をいれずとかや。御磐昌社といふは、なにゆゑ名づけたるにや、いぶかし。

これより五条天神の御社にまうづ。こは昔公をまつれるにはあらで、少彦名命にて相どのに天照皇大神・大己貴命をまつれるなりとぞ。菅大臣御社といふにもまうづ。このところは是善卿の御館のありし跡にて、そこにいはひまつれるなりとかや。よりて天満宮降誕地といへり。この所は五条坊門西洞院なり。『拾芥抄』に「天神御所高辻北西洞院東」とあるにはいさ、かたがへれど、ひるき御館にて、このあたりまでもそのみたちのあとなりしものなるべし。

これより七条なる粟島社といふにまうづ。こゝにも開帳といふものありて、にぎは、し。たから物どもこれかれあり。この道に芹根水といふ名ある清水の

あるをも見たりき。

さて、東寺にまうづ。いと大きな寺にて、むかしの廻廊、あるは堂などのいしずゑのそのまゝ、にのこれるは、いとあはれなり。ふるき寺なれば、たてざま堂のさまなども、今のよの寺にこよなくかはりて、たふとく見ゆ。この寺に八幡御社おはしまして、いとさらさらし。又、八島大明神といふおはします。それより遍照心院にまうづ。この寺に六孫王経基公の御墓ありて、その前には御社をたてられたり。かうくしく、いとまたふとし。

すゑひろきさかえを千代とまもりつゝ、そのみなもとの神やますらむ

さて、朱雀にいたるに、権現堂といふ寺あればまうづ。この寺のちかきあたりに六条判官為義の墓あり。鳥原にもゆきて見るに、遊行女婦のおほくあるさとなて、いと花やかなるさとなり。このさとをいづるところに、名もしるく出口柳といふ名だかき柳あり。このあたりにあそびのうるはしく衣きよそひてたゞみたるけはひも、いなかびたるめには、めざましき見ものなりけり。

さくらかは花のたもとをこきませてこれもしきの青柳の糸

わかれゆく袖ひきとめてうかれ女のなきやかくる青柳の糸

かくて、壬生寺にまうづ。こはふるき寺にて、忠峰家跡などいふところもちかきあたりにありとかや。

さて、この寺にとし毎に三月の十四日より廿四日まで大念仏といふものありて、狂言といふをなすことあり。すなはちけふはそれを見むとてまうでたるなり。本堂にはおほくの人の鉦をうちならして、耳かしましままでほとけの御名をとなへ居たり。その狂言といふは、堂の東のかたなる舞台といふにてあり。この狂言といふものは、なにがしの法師のはじめたるにて、人を仏の道にみちびくために、かゝるわざをなしたる、そのなごりなりともいひ、又は紫野の安良比祭におなじく、疫病をはらふわざにて、この狂言を一春おこたりしかば、そのとしの春は疫病のさほにおこりて、おほくの人の身うせければ、そのをりよりいたくかしこみて、春毎にはおこたりなく、としごとにおこなふなりともいひ、なほ外にくさぐさのつたへあり。

そはとまれかくまれ、かねてこの狂言といふもの、名をき、居たれば、心とめて見るに、ふるめかしくみやびたるものにて、今のよの能といふものにつきたる狂言などのやうに俗なるものにはあらで、いとおもしろし。ものは一言もいふことのなけれど、なすこといふことのけぢめ、いとあざやかによくわかれ

て、いひしらずけうあるもの也。

けふ見るところは、「花折」といふ狂言にて、法師の守たるさくらを、花見にきたる人の二人して、その法師に酒をおほくのませて、ゑひふしたるまぎれに、その花を折とるさまをなす也。そのさまいとよくわかれり。

この狂言といふもの、鰐口といふかねをうちならすにあはせておこなふ也。このわに口は、「正嘉元年」といふ銘ありといへば、ふるきかね也。その音もいとよき音にて、とほきあたりまでもよく聞ゆ。猶、見まほしけれど、くれちかくなりぬれば、又とちぎりおきて、けふはかへらんとす。

このちかきあたりの田の中に、『式』に見えたる「隼神社」おはしませば、まうづ。今俗には、くさ神ともいへり。そのゆゑは、くさといふもの、いできたる人の願をかくればかならずかなひて、すみやかになほるとかや。さて、空也堂といふにもまうで、宿にかへりぬ。

三月十八日

十八日。

霊山にまうで、山のうへにもほりたるに、けふはよくうちはれたれば、見おろしたるよものけしきものもさはらず、心ゆくばかり見えておもしろし。

八坂の塔にもまうづ。この塔はむかしの法観寺といふ大寺の跡也。今はやうやうこの塔ののこりたるばかりにて、所せきまであたりに家たちつゞけり。されば、『式』に見えたる「八坂墓」などはいづこともしれがたく、跡だになし。かくて、けふも清水にまうでたるに、花はのこらずちりはて、青葉のみしげりたり。花のをりなつかしくおもひいで、

みほとけをたのみてぞ見る青葉にも花をさかするめぐみありやと

おもふを、ほとけもをかしとやおほすらん。この寺の石の階をくだりたる南の方に、土公神の社といふあり。こは寛政といふところ、この所の土をほりとりたるをり、石の棺にほりあてたるに、その石の棺の中より白雲のごときものひろごりいで、その土をほり居たる人どもは、のこらず心をうしなひて、しばしのほどはたふれした【抹消り。その白雲のごときものは、乾の方の空をさしてゆきて、その同じをり、下立売の堀川にて、一人の老人の白雲のごときものにまひあげられしがありければ、かたぐ、くすしきこと、いたくかきこみて、もとのごとく土をおほひて、後人のおかさぬために、かく社をたて

たりといへり。いとあやしきことゝもなり。昔、源三位頼政公の射給へる鶴といふあやしむの獸を、この清水寺の岡にうづむと『盛衰記』に見えれば、この所はその鶴をうづめたる所ならんといふ説あり。

これより愛宕寺にまうづ。この寺の西のかたなるちひさき門は、いとふるき門にて、矢の根の跡などあり。六波羅蜜寺・珍篁寺などにもまうで、宿にかへりぬ。

三月十九日

十九日。

けふは稲荷の大神の御出といふをがみにものす。さるは、御旅所といふ社に神輿のいでたまふをいふなりけり。としごとのやよひの中の午の日にいでたまふが、ふるきためしにして、すなはちけふは中の午の日なればなり。

七条河原には松明殿といふみやしろありて、そのあたりにいと大きな松明をつくりたり。こは神輿の橋をわたらせたまふ時、ひるにても火をつくるなりとぞ。

まづ稲荷の御社にまうで、見奉れば、神輿五基きら／＼しくよそほひてあり。そのさまは、まことにめもおどろくばかりにて、ちかきとし、あらたにつくりあらためてみが、れたれば、ことさらにうるはしく、きら／＼し。かゝるめでたき神輿はたぐひすくなかるべし。

かくて、このちかきあたりの人の家の門にてまち居たるに、未の刻すぐるころほひ、神幸あり。そのみよそひ、いと／＼たふとし。まづさきに御榊・御杖・幸鉾・御楯・御弓・御太刀・大幣などいふものもちたる人おほくありて、その跡に神輿五基、神幸あり。そのさま、ましてきら／＼しさいはんかたなし。その跡に唐鞍の馬とて、あつふさかけたる馬よりは、今一きはうるはしきが三疋、常の神馬二疋あり。御翳・錦蓋・菅笠などいふものもありて、いとこそかにみやびたる神祭なり。社司たちは騎馬にて、御先にも御跡にもおほくつかへまつれり。その人たちのかざしは、いづれも杉にて、これにもいにしへののこれるさま、とり／＼にたふとく、めでたき神幸なりけり。

年月をすぎてもためしかはらじとかざしてまつるけふの宮人

稲荷山神のまつりを人とはあやにたふとくみつ、こたへむ

けふはともなへる人もありて、これより泉涌寺にまうづ。さるは、よきつて

あれば、かけまくもかしこき陵どもををがみ奉らんとてなり。この寺の入口に、夢の浮橋といふ橋あり。こは天皇のかくれませる時、この橋まではうつしおみのますかたちのみゆきにして、この橋のうへより銀の御茶鍋をすつるを、かくれませるしとして、この橋のあなたよりかくれませるさまのおくりをなすとかや。そもこの陵どもは、本堂のうしろのかたにありて、いかめしき御門石の階あり。かしこけれど、その石のはしをのぼり、御門より入てまうで、見奉るに、いづれも石のみしるしをたて、石のいがきつくりめぐらされたり。いまだ御位のうちにかくれませるには、石の御門あり。おりましくて後、かくれませるには、石のいがきのみにて、御門はなし。こはけぢめをわけ給へること、見ゆ。

さて、この陵のさま、上つ代の陵にはやうかはりて、いともかりそめにはあれど、今も御使などのたちてまうでたまひ、その陵、この陵とけぢめもよくわかれたれば、陵のくちせぬためには、この寺にあるも又、さるかたなるべし。四条院をかくし奉りたるをはじめなりとぞ。そをよしともあしとも、いやしき口づからまうし奉るべきことかは。あなかしこ。陵どもいづれもをがみめぐりたるは、たふとさかぎりなし。

この寺は本堂・舍利堂など、いふ堂ありて、よき寺なり。泉涌水とて、きよき泉もあり。この泉によりて寺の名をかくいふなるべし。

ほどちかければ、これより今熊野観音・善能寺、又は剣宮などにまうづ。このちかきに幻観音といふがあるにもまうづ。これより今熊野御社にまうで、けふも蓮花王院にまうづ。

さて、大仏の庭には萩いとおほくおひたり。花のさくをりには、いとよき所なりといふをき、て、そのをりいかならんとおもふま、に、

花さかむ秋のあはれもおもひやるこゝろにほふ春の萩原

もゆる色はたゞひとむらの緑にて錦まだしき春の萩原

耳塚を見て、

かく人もつかへまつりしみいさをは音にきこえてのこる耳塚

三月二十日

二十日。

朝とくより空はくもりたれど、かねてよりともなはむとちぎりおきたる人に

そ、のかされて、宇治のかたにゆかむとす。きのふもとほりたる道をすぎて、まづ藤森の御社にまうでたるに、このあたりより雨ふりいづ。さりとして、このあたりよりむなくかへらむこともさすがなれば、

これも又枝のゆかりと藤の森ぬれつ、しひてけふはゆかまし

されど、けさの空のけしきにて雨衣などもちたれば、そをとりいで、うちきたれば、袖ぬらすうさなどはしらざれど、わびしくなきにしもあらず。

大亀谷といふさとをすぎて、六地藏といふ里にいづ。こゝをすぎて木幡の里にいたる。

くるしさに馬もあらばとおもふかなこはたのさとの春雨のそら

このさとに柳大明神といふ社のおはしますは、『式』に見えたる「許波多神社」なりといへり。又、『式』に見えたる「巨幡墓」のことをたづぬれど、例のしる人なし。

大和田村といふに黄檗山萬福寺といふ寺あり。たてまおもしろく、いとよき寺也。しばしゆきて三室戸寺といふにまうづ。こゝより宇治にはほどちかし。そのあひだに蜻蛉石とて、仏のかたをゑりたる石あり。

すべてこのあたりは、茶といふ木をうゑたる園おほし。この宇治のさとは茶の名所にて、おほかたは茶をなりはひとする人どものすめる所なり。まことにこのさとの茶のことは、よにしらぬ人なく、はた、あぢはひもいとよく、外の品にはきはことにすぐれたり。

たぐひなきその名もよもにかをるなりうちやま畑におふる木の芽は

口なしのいろにいで、はかひやなきしけおもひにもゆる木芽も

かくて、宇治橋のほとりにいづ。こゝを今も彼方町といへり。この町の東のかたに鳥居の見えたりしは、『式』に見えたる「宇治彼方神社」にはあらじか。橋寺といふにまうづ。このあたりに離宮八幡といふ御社おはしますは、『式』に見えたる「宇治神社」なるべくおもはるれど、『盛衰記』に藤原忠文をまつれる社なりと見えれば、いかゞあらん。

恵心院・興聖寺などにまうづ。この興聖寺はいとよき寺にて、山吹おほくさかりなり。この宇治川に山吹の瀬といふがありとき、たれど、今はそのところしれざれば、

名にたちし波は跡なき宇治川もこゝをせと見む岸の山吹

宇治川や昔をとへば山吹のこたへぬ色も露こぼれつ、

さて、この寺の門のかたはらに「菟道雅^{（雅）}郎皇子御墓道」といふ石のしるしをたて、八町ありとするせり。こは『式』に「宇治墓〔菟道雅郎子。在山城国宇治郡〕」と見えたるにて、かねてこの山にあることき、居たれば、たづね見まほしくおぼゆれど、ともなへる人その心なき人にて、「いざ」ともいはねば、えゆかずしてやみぬるは、いとくちをし。古の跡などたづぬるには、おなじこゝろざしなる人はよけれど、こゝろざしなき人は、ともなふこと中々にさはりがち也。たゞひとりならでは、おもふこゝろのまゝにたづねがたきものぞかし。

さて、また『式』に見えたる「後宇治墓」「次宇治墓」「又宇治墓」などのこと、このあたりの人はよもしるまじくはおもひながら、猶こりずまにとふに、例のしる人なきこそ、いとくちをし、はらだ、しけれ。

さて、東禅院といふにもまうで、もとの橋のほとりまでかへりて橋をわたる。橋のなかばより見たしたるけしき、名にたかき朝日の山などまぢかく見えて、いひしらずけしきのおもしろきは、さすがにむかしより名にながれたる川瀬のさまなりけり。わたりはてたるむかひの岸に橋姫の御社あり。

宇治十帖の古ごとなどおもひいでられて、

いつはりとおもひわたらぬおもかげにむかしをかくる宇治の川橋

このあたりにて空はくもりながら、雨のはれたるはうれしくこそ。

さて、平等院にまうでむとてゆく道のかたはらに、扇の芝とて、源三位頼政公の身うせたまへる跡あり。「うもれ木の花さくこともなかりしに」とよみたまへることをしのびて、

君が身のなりぬるはてをしをしのぶればにもなみだのみちしばの露

平等院の鳳凰堂といふはむかしのまゝにていとふるく、扉のうらにかすかにのこれる絵などもふるく見どころあり。矢の根の跡などのおほく見ゆるは、頼政卿の身うせたまへる時の軍のなごりなるべし。

さて、この平等院にもこのころ開帳といふものありて、くさぐさのたからものあり。中に頼政卿のふるき像、鎧兜などいふものあり。まこといつはりはしらねど、なつかしくおぼゆ。外にもふるく見えて、めとまる宝物どもこれかれあり。

かくて、このさとにてもものなどくひて、橋のもとより船にのりて、伏見のかたにくだらんとす。この橋のほとり、つゝみのうへより西のかたに見ゆる里をとへば、「巨椋の里なり」といへり。このさとのなかに木ぶかき森の見ゆるは、

『式』に見えたる「巨椋神社」にはあらぬにやとおもへど、ゆかではさだめがたし。さて、船にのりてや、ゆくに、左のかたなる堤をまきつゝ、みといひて、里のあるは、まきの島なり。すべてこの川の流、矢よりもはやければ、また、くばかりのうちに伏見なる豊後橋のほとりに舟はてぬ。この舟路のけしき、いとおもしろかりき。

これよりの道は何のこともなくて、夕つかた宿にかへりぬ。

三月二十一日

廿一日。雨ふる。

あひしれる人のもとを例のこれかれとぶらひて、いづかたにもえものせず。

三月二十二日

廿二日。

安井の藤、このころ花ざかりなりとき、てまうで、その花を見るに、いく木ともなくさかりなる、いとおもしろし。

その陰にたゞずみてしばし見居たるほど、

まづはれてながむる藤にたつことの安井は寺の名のみなりけり

見にくればたれも安井のやすらひてたつことかたき藤波の陰

さて、けふも清水にまうづ。この寺はあやしき所にて、かくたびくまうづるに、猶あかぬこゝちぞする。

かくて、祇園の御社にもまうづ。

三月二十三日

廿三日。

けふは太上天皇の修学院に御幸あれば、をがみにものす。この修学院の御幸は、文政七年といふとしの秋はじまりてよりこのかた、としごとの春秋にはかならずありとぞ。そのはじめての秋の御幸は、まるのぼりてをがみ奉りたるを、こたびもあひ奉りて、かゝる御幸をふたゝびまでをがみ奉ること、いひしらずかしこし。まことに身のさきはひなりかし。こたびもおほかたはをがみ奉らんと、かねてはおもひしかども、猶おぼつかなくおぼえしに、けふはからずもあひ奉ること、かへすぐもたふとくうれしくなん。

曉すぐるほど、加茂川のつゝみをのほりて、柳茶屋といふところにてをがみたてまつる。すぎし秋のをりも、このところにてをがみたてまつりたるなりけり。辰の刻ばかりにいでましあり。あらたにつくりてかけられたる橋のうへをすぎ給ふほどの御けしき、ことさらにみやびたり。御先・御供につかへ給ふ君たちは、北小路極膳殿・藤谷殿・裏松殿・日野西殿・錦織殿・大原殿・高野殿・六条殿・橋本殿・冷泉殿・武者小路殿・久世殿・広橋殿・万里小路殿・徳大寺殿などにて、いづれもうるはしき狩衣きよそひて、騎馬にてつきくにつかへたまへり。御輿をまぢかくをがみたてまつりたるは、ことにかしこし。すべてのみよそひ、すぎし秋のはじめての御幸の時ばかりにはあらねど、かしこさは露ばかりもかはることなし。

この御幸のさまはしくしるさまほしうおぼゆれど、いやしき筆にかけ奉らんも、あまりにかしこくなめしきこと、しるさず。されど、かしこさのあまりに、はゞかりかねて、よめるながうた。

玉敷の たひらの宮の 大宮の 外重の遠の 北山の その行宮は 春さ
れば さくら花さき あやにく うらぐはし宮 その花の にほふがご
とく さかりなる 御代の春べと かしこきや おり居のみかど 大御幸
おもひたゝして 大御言 よさしたまへば も、しきの 大宮人は 時に
あふ たもとのいろと ふさはしき たもとの色と 花ぐはし さくらが
さね あしひきの 山吹かさね まつふさに とりよそひきて のる駒の
あゆみものとし 大御輿 ひかりかゞやく 御先に つかへまつろひ 御
あとべに みともつかへて 神ながら みやびおもほす けふのこの 大
御幸をし 道の辺に あふぎ見まつる ことのかしこさ
またよめるみじかうた。

も、つかさ言葉の花もかざしもち君につかふる北山の宮
春秋に君がみゆきと立ならず北の山辺は万代の宮

北山やけふのみゆきは言の葉の花もさかりの御代とこそ見れ
言の葉のさかゆる時と花紅葉みやびすぐさぬ御幸かしこし

北山や君がみゆきにさく花の波もむかしに立かへるらん
宮人のさくらがさねにいでましのよそひも花のみゆきとぞ見る

これも又春の錦の外ならじおほみやびとの袖の色々
宮人もたものいろにいでぬめりみゆきにあへるけふをうれしと

北山や君がみゆきの宮ちかく花もくもるにまがひてやさく
春秋におほみや人のうちわたりみゆきたえせぬかもの川はし

たつ波も君がみゆきとこゝろして花をやそふる加茂の川橋
御供する大宮人の馬なべて朝ふみわたるかもの川はし

かもがはややなぎの糸も末とほくたえぬ御幸にかけてこそ見れ
いでましの君がひかりを玉くしげふた、びあふぐことのかしこさ

北山や君がみゆきをはつかあまりみたてまつるぞかしこかりける
かくて、ほどちかきあたりなれば下鴨の御社にもまうで、宿にかへりぬ。

三月二十四日

廿四日。

けふはひるつかたより、かねておもひ居たる壬生寺の狂言を見にものす。
はじめには「釣狐」といふ狂言なり。こは狩人のわなといふものをはりて、
きつねをつることのさまをなすなり。

次なるは「ほうろくわり」といひて、鞆鞍といふものうる男の子と、ほうろくといふものうる男の子と、たがひにおのがさちくをくらべて、つひにそのほうろくをわるさまをなす。

その次なるは「鶴」といひて、源三位頼政卿の鶴をい給ふさまをなす。

その次は「餓鬼せめ」とて、地獄といふところにおちたるつみ人を、鬼どものいろくせめて、つひに釜の中に入れて煮たるを、そのところに地藏ぼさちのいできて、たすけ給ふさまをなす。

その次は「桶取」といひて、わかき女の、あかの水くみたる桶をもちたるに、一人の老人の心をとられて、いろくたはむれかゝりて、つひにはそのをみなにをどりをまねびて、老人も女のさまにをどるさまをなす。そもくこの「桶取」といふは、世に名だかき狂言にて、しらぬ人なく、中にもおもしろしとき、しかば、いと見まほしくおもひ居たるによりて、けふしもつてをもとめてわがためにあつらへて、さて、この狂言を見たるなり。そのかひありて、げにそのさまの優にみやびておもしろきこと、ことばにもべがたし。

ふと、この老人のこゝろになりて、

あかの水ふかきこゝろもくみしらであさくみすぐす人のつれなさ
とよみたるも、あまりに心のうつるまゝのすさみにこそ。

そのつぎは「棒ふり」といふものにて、かのしやぐまといふものをかしらにかむり、白きぬのをもておもてをおほひ、本にも末にもふさのつきたるはしき棒を、いともおもしろくたくみにふりまはすなり。これもいと名だかきものにて、六月の祇園会のをりの「棒ふり」といふも、この所よりやとひておこなふなりといへり。この「棒ふり」は、この狂言のをりの日にばかりなすといへり。けふはすなはち廿四日にて、とぢめなれば、をこなふものなるべし。さて、この「棒ふり」のさま、かの今宮の安良比祭におなじさまにて、よく似たれば、さきにしるせるごとく、この狂言は疫病をはらふわざなりといへるも、より所ありげにおほゆ。

これにてはてたれば、かへらむとす。いとおもしろかりしことをおもひて、たはれたること、おもへどあくがれてながき日あかずみぶの古寺

この寺にふるくつたはりたる面、三つあり。これをもらひて見るに、いとふるく見ゆるものにて、すなはち猿と狐と、かの「桶取」の翁の形なり。この面のかた今用るところにかはることなければ、こはむかしの狂言にもちひたるものなるべし。これにておもへば、この狂言はいとふるくより今の世までかはらぬものと見ゆ。されば、かくふるめかしくて心にとまるもうべなりけり。

このかへるさ、護真寺といふ寺にまうづ。この寺は四条通大宮の西にあり。このうちに円山応挙といふ人の墓のあるにまうでたる也。則「源応挙墓」とゑりたるは、妙法院宮の御筆なり。この人は絵にたくみなりし人にて、この人の絵ばかりたくみなるは、ふるきよにもあらざるべし。また画の道のことをよくひらきて、絵のことはこの人より世によくひらけたり。かばかり名ある人の墓のこと、かつはこの人のかきたる画をわれふかくこのめるによりて、そのゆかりにけふまうでたるなり。こはふるき跡をたづぬる心の外のすさびなりかし。

三月二十五日

廿五日。

おほくの人もまうづる日なりとて、ともなふ人などもあれば、北野御社にまうづ。例のかしこきこといはむかたなし。かのともなひこし人にはこの所よりわかれて、すぎつる日、雨にてのこしおきし並岡・妙心寺などにゆかんとす。その道に大將軍社といふがあるにまうづ。『拾芥抄』に「大將軍堂上一条北万里小路東」とあるは、このやしるることならん。

かくて椿寺といふにまうづ。この寺は地藏院といふ寺なるを、散椿とて、名だかき木のあるによりて、椿寺とのみおしなべていへり。やがてその木は庭にあれば、立よりて見るに、いと大きな木にて、花もことさらうるはし。この椿といふもの、常の木はいづれも花のそのまゝにおつるものなるを、この木はやうかはりて、一ひらづ、花のちりゆきて、めづらしき木なれば、ちり椿と名づけて、しらぬ人なく、めではやすなりけり。「ありて世の中はてのうければ」とよみたりしむかしの人に見せたらましかば、いかにめでたしとてはやすらんと、ふとおもふまゝに、

ありてうきはてを見せじと玉椿ちるはめでたき花ごゝろかな

ちることをめでたしとてやおのれのみつら／＼つばきつらにもれけむ

玉椿ちるをあらはれと見はやすも花ごゝろなる世の中ぞかし

ちらぬ木もちるにはもれぬことわりを人にみのりの庭の椿か

世の中は常なきものと法の庭ちらぬつばきも猶やちるらむ

成願寺といふにまうで、妙心寺にまうづ。庭におもしろき松などもありて、

いとひろく、堂門のたてさまもよにことなるよき寺にして、めをおどろかしぬ。

みほとけのたへなるこゝろあらはれていらかことにもたてる大寺

かくて、並岡にいたるに、名もしるく、おなじやうなる岡ふたつならびたて

り。おほかたは松の木ばかりしげりたる岡なれば、

松ばかりならびの岡のつれなさに妹背のうき名た、ずやあるらむ

このふもとに長泉寺とて、兼好法師のすみしあとなりといふ寺有。この寺に、

この法師の墓もあり。

これよりもとの道にかへりて、さて、北野御旅所・郭公天神などいふにまうづ。それより伝法輪寺・清和院にもまうづ。この清和院といふ寺、もとはこの所にあらざりしを、こゝには後にうつせるにて、もとは今の清和院御門のあたりにありし寺なりといへり。この寺のまへに蜘蛛塚といふ塚あり。こは源頼光のふるごとをいひつたへたる塚なれば、さのみめにもとまらず。

かくて、千本のきりしま寺といふにまうづ。こは、きりしまとて、つゝじのごとき花のある寺にて、その花このごろさかりなりとき、て、見にものせるなり。すなはちさかりにて、もゆるがごとくにさきたるくれなるの花、いさ、かいやしきものながら、いとうるはしくなん。見にくる人などもこれかれありて、にぎは、し。

色ふかくおもひこがれてたれも皆きりしま寺の花ざかりかな
夕日かと見えてつれなくかへるさをいそがす花の色もうらめし
古寺のこゝにたく火とさく花はいづこの雲の名ごりなるらん

しばしのうち見居りて、それよりかの閻魔堂の狂言といふを見にものす。二つ三つみたるに、きのふ見し壬生狂言にはこよなくおとりて、おもしろしとおもはず。されど、このかたをはやく見ば、さのみもあらざるべきに、きのふのこゝろおごりにて、かくはおもふものなるべし。この寺の狂言、おほかたは壬生狂言におなじさまにて、ものいはぬもあれど、中には能といふものにつきたる狂言におなじさまにて、ものいふもあり。それらはことにおもしろからずなむ。この狂言といふもの、この寺と壬生と嵯峨と三所にありといへり。その嵯峨なるはいかゞあらん、ゆかしけれど、え見ざりしこそ、くちをしけれ。

さて、けふの狂言いまだはてねど、おもしろからねばかへらむとす。その道に相国寺といふにまうづ。この寺は五山といふうちの一つにて、よき寺なり。

かくて、中御霊・下御霊をはじめ、浄華院・廬山寺・草堂などにまうで、宿にかへりぬ。

ゆふつかたより雨ふりいづ。こよひいとつれづれなるに、かたらふべき人もとひこぬまゝに、

つれづれのまぎるゝかたもなきよひはこひしや雨のふるさとのそら

三月二十六日

廿六日。けふも雨なほふる。

ちかきあたりの人のもとをとぶらひたるばかりにて、いづかたにもえゆかず。さて、けふのゆふつかた、あひしれる人のとぶらひきていふやうは、「こたびはよきをりにて、おほかたは都の花も見つくし給ひたりや」ととふに、こゝかしこにものしたるものたりなど、ほこりかにしいでたれば、「猶みのこし給へる花あり。いざ案内しまゐらせん」とて、先にたちてともなほむとす。けふは雨ふりて、つれづれなりしかば、さきはひのこと、おもひて、その人の跡につきてゆけば、四条の橋を東のかたにわたりて、なにがしのまちといふにいたりて、楼をかまへたる家のうちにもなひぬ。この家のなかにも花の咲たるところありやとあやしくおもひて、その人にとへば、「さくらにはあらで、ものいふ花をみするなり」といふに、よくこそたばかり給へれとは、うらみこち

たるものゝ、これも都の花のひとつなれば、見るもまたよかんなりとおもふほどに、いできたるその花のよそほひ、さるかたにおかしき見ものなりけり。こはくるゝををしむ陰にはやうかはりて、くれゆくまゝに中々色香もひとしほはまされるけはひ、いひしらずなむ。

宿からむくれなばなげの陰ならで色香もまざる花のこのもと

おほかたのさくらちりてもひがし山ふもとの花はさかりなりけり

たぐひなき都のさかりめに見ても猶ふるさとの花ぞこひしき

こよひはともなひたる人と、もに、その花のもとにやどりぬ。

そのあかつきおきわかるとて、

おきいづる別ぞつらき暁のかねにも花のちるこゝちして

うつりがも袖にのこりて暁のわかれたちうき花の下ぶし

三月二十七日

廿七日。

きのふの雨なごりなくはれて、天気よければ、けふは梅宮にまうで、そのつひでに嵐山の青葉のけしきも見まほしければ、西山のかたにもものせんとす。

まづ雀森・勸学院といふにまうづ。この所は昔の勸学院の跡にて、四条通の大宮の西にあり。この所よりすこしゆきて畑の中に、いづこのあたりの畑の中になぎの宮、蛭子宮などいふちひさき社あり。この蛭子宮といふは、西宮左大臣の家跡にまつりたる神なるを、西宮といふより、蛭子宮といひあやまれるなりといへり。『拾芥抄』に「西宮四条北朱雀西高明御子家」とあり。この所、千本通のほとりにて、千本通はすなはち、むかしの朱雀なれば、その跡なるべし。しばしゆきて西院といふところにいたる。こゝに春日の御社の大きなおはします。この西院といふところは、『後撰集』に、西院の御后、御ぐしおろさせ給ふ時、その院の中島の松の皮をけづりて素性法師が歌をかきつけられしよし見えたる所なるべし。これも『拾芥抄』に「西院四条北西大宮東橋大后家」とあれば、それにもよくかなへり。

この里をいではなるれば、高院の森といひて、今も黒木の鳥居をたてたる杜あり。こは加茂の高院の跡にて、今は西院の春日の御旅所となれり。嵯峨なる野宮にはやうかはりて木ぶかき杜なり。『玉葉集』に「西四条の高宮のもとに花につけてつかはしける」といふ歌見えて、この所、今、四条通の西なれば、

これもよくかなひて、むかしの跡なることうたがひなし。

この森に藤の花のさきたるを、

花見ればいつきのよそひしのばれてむかしをかくる藤かづらかな

これより梅宮にまうづ。この梅宮、今のよには人の子うむことをまもりたまへる神とまうして、かけまくもかしこき御あたりよりも、そのことのおほしきます時にはいのりたまへりとぞ。よりて都の人々も身ごもりたるをりは、おほかたに願をかくといへり。われもこのころ家なる妻の身ごもりたれば、そをいのらんとために、けふしもまうでたるにて、やすくうませたまへと、広前にふかくこゝろいれてをがみ奉るも、いとたのもしくかたじけなし。

むすびおきしみをやすかれと梅宮かくるねがひのなるをこそまで

さて、この身ごもりたる人のねがひをかくれば、かならずしるしのありといふにつきて、よくおもへば、この梅宮とまうす御名は、生の宮といふことにて、梅といふ文字は文字の音をかりたるのみにて、梅といふことにはあらざるか。橘氏の神なるによりて、橘宮といはゞ、さもあるべけれど、梅といふこと、この御社によしのなければ、かくおもへるは、いかゞあらん。ひろくものしれる人、猶よく考定てよ。

このちかきあたりに檀林皇后の御墓といふあり。こは『式』に「嵯峨陵〔第皇太后橘氏。在山城国葛野郡〕と見えたるなるべし。また天皇塚といふもあれど、天皇の陵のこのあたりにあるよし、ものに見えたることなければ、いぶかし。大墓といふもあるは、『式』に「大岡墓〔桓武天皇夫人。従三位藤原氏。在山城国葛野郡〕と見えたるなるべし。

さて、梅津村の長福寺といふにまうでたるに、よき寺也。又この里に梅津左衛門といふ人の墓もあり。

かくて、川づらにいづ。こゝは大井川の下にて、わたせる橋を上野橋といへり。その橋をわたりて徳大寺村にいたる。この村をすぎてしばしゆけば、下山田村なり。この村を御陵村ともいひて、『式』に「田邑陵〔平安宮。御宇文徳天皇。在山城国葛野郡〕と見えたる陵あり。又、御輿塚といふもありて、みこしをうづめたる塚なりといへり。この陵は都ちかきあたりの陵のうちにては、桓武天皇陵にひとしく、いと大き也。

さて、神代三陵をまつりたるよし、『式』に見えたる所は、「田邑陵南原」とあれば、このあたりならんとたづね見れど、さもやとおほしき跡も見えず。ま

ことにこのあたりはあまりに人のこぬところなれど、この陵ををがみ奉らんがために、ふりはへてきたるなり。

それより真如寺・葉室常住寺・衣笠山地蔵院などにまうづ。この地藏院といふは、衣笠内大臣の山荘のありし山なるがゆゑに、衣笠山と今にいへり。この寺に細川頼之墓あり。

又、葉室西芳寺といふにもまうづ。この寺の庭は夢窓国師といふ法師のつくりたるなりとて、いとおもしろくたくみにしなしたり。つくり庭にてかくばかりおもしろきは、たぐひすくなく見えたり。

花巖寺・西光寺などいふにもまうで、『式』に見えたる「月読神社」の御前にいたる。

かくて、松尾社にもまうで、しばしゆきて渡月橋の西のかたなる岸にいづ。川わたりもはず、橋のなかばより見わたしたる嵐山の青葉のけしき、いとおもしろし。むかひの岸にいたりて、川辺をのぼりながら見やるけしきは又ことさらにて、いひしらすなん。花の頃は見にくる人のあまりにおほくて、こゝろしづかに見るかたにはさはりがちなりしを、青葉を見にとて来る人はひとりだに見えず。又、花見る人のためにうるさくたてならべたる、おほくの茶屋などいふものも、今はなごりなくとりはらひたれば、花のをりにはこよなくかはりて、心しづかなるのみかは、青葉のけしきもさるものにて、あたらしくおひしげりたるみどりのいろあひなど、なか／＼に花にまされりともいひつべし。

されど、花のをりことはさすがになつかしくおもひいでられて、なみださへけふはながる、大井川うつりしはなをしのぶなげきに

花もちり人ものこらで嵐山青葉しづけきながめをぞする

あらし山青葉を見つ、おもふかなこのしづけさの花にあらばと
青葉までたぐひあらしの山なりとしらで見にこぬ人さへぞうき

あらし山青葉の枝におもかげは猶立のこる花のしらくも

ちらしつるうらみわすれてあらし山青葉にうつるはなごゝろかな
あらしがはながし、川のうきせをも花の青葉にかこつけふかな

をりふしもうつればかはる世のさがとさくら跡なき山の色かな

かくいひしらすめでたき青葉のけしきなるものを、ひろきみやこのうちより、ひとりだに見にくる人のなきは、ものしづかにて、見るためにはよきものなが

ら、山のためにはこゝろうきことならずや。すべて都の人のくせとして、都人の名にも似ず、酒のみ、ものくひなどすることにのみ、ひたぶるこゝろいれて、花見のをりも、そのことをはなれて花をのみめづる人などはすくなくぞ見えし。されば、都のよもの国にすぐれてたふときことをも大かたはしらで、名所・古跡のことなどしりたるひとはましてすくなくなん。かゝる人どもを、かばかりたふとき都にすませおくことは、いとくちをしきこゝちす。これをおもへば、灯のもとくらししてふ、よのことわざもうべなりけりと、あらぬことまでおもひつゝくるも、山の名の口さがなしや。かくおもふよしを、その人どもにきかさば、わがさけをこのまぬよりのひがこゝろにて、なか／＼みやびやかならずともいはんか。あなかしこ。

さて、天龍寺の山のうへなる七老亭といふにのぼりて見おろしたる嵐山のけしき、又ひとときはよし。まことにこの亭よりのぞみ見たるけしきは、言の葉にもいひがたきまでおもしろくなむ。すなはちこの亭は亀山の上にてたたる亭なり。それより妓王寺にまうづ。この寺は『平家物語』に見えたる白拍子・妓王が、仏御前のために淨海入道の籠をうしなひて、「もえいづるもかるゝもおなじ野べの草いづれか秋にあはではつべし」とよみて尼になりければ、その母も、その妹の妓女といふもおなじく尼になりて、この寺にすみたるを、その仏御前がたづねきて、これも又おなじさまに世をすて、つひに四人がひとつ所にておこなひすましたる跡なり。

おそくとてさきづる色もひとつなる秋のさが野のをみなへしかな

をみなへしいかでか秋をのがれむとさが野にすてし色香成らむ

をみなへしうきよのさがのことわりもしるきむかしの花の一時

この寺にとなりて、往生院といふ寺あり。今は門ばかりにて堂などはなく、あれはてたり。この寺も『平家物語』に見えたる斎藤滝口時頼が、横笛といふ女をおもひ居たるを、父にいさめられて父のことをそむくにあへずとて、世をのがれてすみたる跡也。

滝口のたぎつこゝろもたらちねにせかれて法の海にいりけむ

おもふなといさめし親にうた、ねの夢とさまし、心なるらむ

すくなりしこゝろとぞおもふ梓弓そりて御法の道にいりしも

よにふればあふささるさの身のさがとのがれてこゝに庵やむすびし

その滝口がこゝにすみたるを、二月の十日あまりのころ、横笛のたづねきた

るを、あはですげなくかへしたることなど、おもひいで、

しのぶかななみだかすめてたづねこしそのきさらぎの月のおもかけ

生六道といふ堂にもまうづ、それより福田院【付箋・院ハ寺ノ誤】といふにもまうづ。この寺に後龜山院陵あり。しるしの塔といふ名をたてられて、いとかりそめなり。こは南朝の御末の天皇なれば、かくかりそめなる陵ならんとおもひ奉れば、見るめもたへがたく、いとかなしくなん。この陵のかたはらにも石の塔のあるは、たれしの人の墓ならん。

念仏寺といふにもまうづ。このあたり、今もあだし野といひて墓所なり。あだし野といふは名どころにはあらぬ様にいへれど、こゝはふるくより墓所にて、あだし野とへるにはあらしか。

かくて、清涼寺にまうづ。この寺の本尊は、嵯峨の釈迦とてゆゑよしもたふとく、はたよにしらぬ人なき御仏なり。〔『統古今』〕寂蓮法師がこの寺にて、「わしの山ふたゝび影のうつりきてさがの、露にあり明の月」とよまれたること、おもひいで、

こゝも又わしの高ねの月すみてきよくすゞしきひかりをぞ見る

ひむがしにすみこそまされわしの山西よりいでし月の光も

さて、この寺に名だかき牛花蔓とかいふものありて、なにとかや申奉る皇后のことをまうし奉りて、いとうけがたきことをいひつたへたり。かゝるあやしきこと、いへども、おろかなる世人はまこと、おもひて、あまねくいひつたふれば、おのづからに名だかきものなるべし。されど、いさゝかにも心ある人は、例のまこと、おもはであざけるたぐひもおほかり。今の世はほとけのみちもまことの道よりはいひよせのいつはりごとおほくて、いかゞなることのみなれば、あざける人のこれかれあるもうべなりけり。こは仏の道のあしきにはあらで、ものしらぬえせ法師らが中々にその道をけがすにこそ。

かしこくもかげにかへたるぬれ衣のくちぬもうしやさがの大寺

大沢の池をも見て、広沢の池のほとりにいたるに、日もくれか、りぬ。夕風のどやかに吹わたたりて、さゞ波よする夕ぐれのけしき、たゞならぬながめ也。かくて、くれふかく宿にかへりぬ。

三月二十八日

廿八日。雨ふる。

けふは人にもなはれて南禅寺にまうで、門のほとりなる家にてものなどくひてかへりぬ。

さて、故郷を立いづるをりには、このころはかへるべきころがまへにていで来たるを、ほどなく加茂のあふひ祭などもあれば、そのまつりも見まほしくおぼゆるまゝに、そのほどまでみやこにとまらんとおもひなりぬ。かねてより大坂・和泉・河内のかたにもものせんとおもふ心あれば、そのあふひ祭まで今しばしほどあるによりて、あすの夜の舟にのりて、まづ大坂にくだらんとす。このよしくはしくかきした、めて、故郷にこよひ文つかはす。そのおくに、花ご、ろうつりやすしとらむなよ都の春に長居する身を

三月二十九日

廿九日。

こよひ大坂にくだるよしつけむために、あひしれる人のもとをとぶらひて、宿にかへりて大坂にくだるまうけなどす。

さて、ゆふつかたより駕籠といふもののにのりて、ふしみのかたにゆかんとす。しばしのほど、はおもふものから、都の名ごりたゝならず、かくては故郷にかへるをりのわかれやいかならむと、今より心にかゝれり。

さて、稲荷の御社のまへなる家にいこひて、かごよりをりてふと見るに、稲荷の御社のよるのさま、いとたふとくて、おくふかく見いれられたる三のともし火のさま、まことにかうくしくおぼえ奉りければ、

よるも猶神のみいつのいちじるく光ことなる三のともし火

こ、ながらあふぐひかりのたふとさもひとかたならぬ三のともし火
さて、伏見の京橋といふより大坂にかよふ船にのりぬ。その船のうちむつかしく、いとせばきに、よるのものなどたらはぬがちなれば、河風すゝるに身にしみて、ねもやられぬを、しひてまどろみぬ。

かくて、よなかばかりにやあらん、いとかしましき声の耳にいりて、ふとめざむれば、何ならんとおもふに、「酒くらはんか」「餅くらはんか」などなめしくいひの、しりて、そのものどもをうる船なりけり。人にものをうらむとてす、むるを、かくもなめしくいひなすは、このところのならばとはいひながら、あまりにうちつけなることなりかし。

せにかはることをたのみのよわたりもあはれうきたる淀の川舟

三月三十日

三十日。

辰の刻ばかり、大坂に船はてぬれば、道頓堀といふところの藤屋何がしといふもの、家にやどりぬ。

けふは芝居といふもの見にもものす。この芝居といふもの、わがこのむものなれば、いとおもしろく日をくらしぬ。

四月一日

四月朔日。

朝とおきいで、

ならばにもたがへてかへし旅衣みやこの花になれたもとは

けふは生玉神社にまうづ。こは『式』に「難波座生國咲國魂神社」と見えたる御社のことを、かくいひあやまりたるなり。されど、生玉といひて御名のかたちをいひのこしたるは、いとたふとし。そのほとりなる北向八幡といふ御社にもまうで、それより高津なる仁徳天皇御社にまうづ。

かくて、餌指町といふ町なる円珠庵といふをとぶらふ。こは世に名だかく古ごとの道をはじめてひらかれし契沖阿闍梨のすみし跡にえ、則その阿闍梨の墓もこの庵の庭にあればまうで、ねもごろにをがみつ、この阿闍梨の古ごと学にいさをしのおほきことをおもひて、

難波津や言葉の花の冬ごもり今を春べとなせる君かな

うづもれぬ君が言葉の玉柏たかきなにはにのこるおくつき

古ごとのまなびひらけしよの中を苔のしたにもうれしとや見む

宿にかへりて、あすより河内・和泉にふるき跡たづねにもするまうけなどす。

四月二日

二日。

朝とくより立いで、和泉・河内のかたにもものせんとす。その道ならねど、いさ、かの道をまはりてちかきあたりの名どころをも見むとす。

まづ新清水といふ寺にまうづ。こはみやこの清水寺をうつしたるにて、所のさまよく似たれども、都のかたにはおよぶべくもあらず。されど、けしきは

とよきところ也。これより勝曼院の毘沙門天といふにもまうづ。こは乾社ともいひて鳥居をたてたり。勝曼堂といふもあり。その堂の一町ばかりうしろのかたなる畑の中に、家隆卿の墓あり。塚のうへにはふるき松の一本おひて、いと大きな墓なり。この家隆卿の天王寺にてやまひかぎりになりける時のうたといふが七首、『夫木集』に見えたれば、天王寺ちかきこの所にみはかのあるも、よくかなへり。言の葉の光のいちじるきによりて、おのづから今の世までもくちせすのこりたるものなるべし。ちかきころ、なにがしとかやいふ人のたてたる碑もあり。

さて、この卿の御歌は、常々こゝろにしみておぼゆれば、みはかのもとに立よりて、ねもごろにをがみ奉る。

言の葉もおよばぬ袖に露ばかりかけて昔をしのぶおくつき

かくて、天王寺にまうづ。すぎし年の火のためにやけて、あらたにたてかへたるものながら、いと大きな寺のたゝずまひ、今のよのさまとはこよなくかはりて、たふとさかぎりなし。何くれの堂門などいとおほければ、ことごとくはしるしあへず。

むかしのことをおもひいで、

たきふさの中よりいつく御仏はこの大寺にながくのこれり

この寺のうちなる熊野権現社といふは、守屋大連をまつれる社なりといへり。南大門といふをいで、庚申堂といふをまうづ。こはこのあたりにて名だかき庚申なり。このあたりの荒陵山といふ松の木しげき山あり。こは茶臼山ともいひて【抹消・神祖の御軍の時、御陣になりしことあるによりて、竹垣ゆゑしくつくりめぐらして、人のいることをゆるさず】、この荒陵といふは、いとふるきところにして、『書紀』推古天皇の御巻に見えたるのみならず、それよりもふるく、仁徳天皇五十八年の所に、「夏五月当荒陵松林之南道」と見えたり。さればこそ、天王寺をも荒陵山四天王寺とは名づけ、め。

さて、『書紀』に名をしるさずして、たゞに「荒陵」としるされたるを見れば、そのをりはやくたれし人の陵ともしれがたかりしものと見えたり。これにつけておもへば、すべてむかしのみさ、ぎども、今の代までよくも御名ののこれること、今さらにおもはれぬ。

これより阿倍野街道といふにいでむとて、このあたりの里の家居をはなれたる所の畑の中に、本多出雲守忠友といふ人の墓あり。この人の墓は一心寺とい

ふ寺にありて名だかけれど、そは後につくれるにて、これがまことの墓なりといへり。猶ゆけば、一本松といふ松あり。あめ寺千軒の跡なりといひて、寺の千軒ありし跡といふは、こゝろえず。

かくて、安倍野村にいたる。入口の右のかたの畑の中に、松虫塚といふがあるは、何の塚にや、いぶかし。さとの中に清明の社といふもあり。こは例の後人の安倍といふ名によりてつくりたるなるべし。この清明社といふもの、うけがたきが、ところごとくによくあるものなり。

さて、このさとのなかばばかりに「大名塚道」といふいしぶみあれば、東のかたの畑の中にいるに、すなはちその塚あり。こは北畠顕家卿の御墓にて、しるしの石に御名をえりつけたり。この君は帝の御為に二心なくめでたき君にて、さばかりの御いきほひに賊軍をたゝかひふせぎたまひて、やんごとなき官までもまうのほり給へるを、つひにこのあべ野にて打死し給へること、しのび奉れば、つとむねふたがりて、かなしきたへがたし。

はかなくもあべの、露ときえながら光ある名はよ、にのこれり

ありしよのあべの、跡をたづぬれば袖にも露のおくつきところ

ますらをがすてし命ぞいさましきかばね草むすこともおもはで

このあたりに経塚・小町塚・播磨塚などいふがあるは、何の塚ならん。これらはいさ、かなる芝生ののこれるばかりなれど、その西のかたには古き代の墓のさまにて、池の中に塚のあるところなどあり。又その西に、てづか山といふちひさき山ありて、字は帝塚山とかけり。こは天皇の陵ならんかともおもへど、このあたりに陵のあるよしものに見えねば、皇后か皇子か、又はたかき人の墓なるべし。すべて天皇塚といふがところごとくにおいて、ものに見えぬは、皇后・皇子あるは貴人などの御墓なるを、天皇の陵のさましたれば、おのづからに天皇塚といひ来たるにて、これらもそのたぐひならんとおもふは、いかゞあらむある説に、このてづか山を大伴金村連のはかなりといへれど、たしかなるより所なければ、いかゞ也。なほ外にも墓とおほしきもの、ところごとくにおいて。その中に津守氏の遠祖の墓なりといふがひとつあるは、さもあるべし。

かくて、畑の中を大宅社といふ社のほとりにいづ。これも津守氏の遠祖をまつれるなりといへり。奥天神といふみやしろ、又『式』に見えたる「大海神社」などいふにまうで、神宮寺の中をとりながらまうで、住吉御社にまうづ。大きな御社の今も四座おはしまして、たふとさいはんかたなし。みやしろは

いづれも西のかたにむかひまして、ゆきかよふ船をたゞひとめにみそなはしおはしますは、神の御心にもかなひなんとおもひ奉るも、かしこし。

ゆく舟をからくにかけてまもるらんこの大神のひろきめぐみに
うらやすくさをかちほさぬも、船もこの大神のめぐみなりけり
さすさをのよわたる身には大舟のおもひやたのむすみの江の神
言の葉の神とかけたるぬれぎぬにきせてねがひを猶やかけまし
ふみまなぶすゞりの海もまもらなんゆく船のごと道しるべし

この御前を西のかたに五町ばかりいでたる海辺のけしき、いとおもしろし。

草の名に都はなりて日数をもへま、くほしきすみよしのうら

いざこ、にわかよへなんとおもふかな名をすみよしのうらときくにも

このきしに長居すなどは住吉のうらなくたれかいひはじめけむ

浜松の下枝のみかはすみ江はこ、ろもあらふおきつしら波

すみよしのうらめづらしみ故郷もわすれはてけり草はつまねど

などおもふばかりなるは、日ごろみやこにすみて、海辺のめづらしきにもあるべし。

かくて、安立町といふにいたる。この町の入口の東のかたを浅沢小野といへど、今は名ばかりにて、野沢の名ごとおほしきもの見えねば、

うつりこしとしをへだて、かきつばた浅沢水に色ものこらず

この町の中に叢松原不動・阿弥陀寺などいふ寺あり。又この町のひがしのかたに遠里小野村とかきて、「をりを」と今はよぶ村あり。こはむかし遠里小野といひしところなるべくおもひて、そのむらにゆきて見るに、こ、にも野の跡はなくて、一つの村となれり。

ありしよのとはさと小野は跡たえてたゞ家居のみしげき民草

この村に念仏寺といふ寺ありて、その寺に楠正成主のたてられたる灯籠のあ
るよしき、たれば、まうでたるに、いとちひさき尼寺なり。その庭にいとふ
るき灯籠ありて、銘に「建武三年三月楠正成建」といふ文字ありて、さだか
はあらねど、うすくはよく見えたり。今の世の灯籠にはやうかはりて、みやび
たるかたなる灯籠なれば、なつかしく見ゆ。まして楠主のたてたまへるなりと
おもへば、かすならぬものながら、めとまるになむ。この灯籠は、むかしこの
寺が大きな寺にて、たてられたるものなるか、又は外のところにたてられた
るか、この所にのこれるものなるか、わかりがたし。

さて、大和川といふ川をわたりて堺にいたる。名もしるく、こ、は河内・和泉・摂津の国のさかひ也。この町の中なる天神御社・三村神社・住吉御旅所などいふにまうづ。この三村神社といふは、このあたり、むかし開口村といひし所にて、すなはち『式』に見えたる「開口神社」はこの御社の御ことなりとぞ。さて、この堺の町をはなれて、未のかたなる道にいづれば、山のごときもの見ゆるを、さと人にとへば、「大山陵なり」とこたふ。この陵は大和川のつ、みよりもよく見えたりしを、あまりに大きなゆゑに、山なりとぞおもひし。榎の木といふ所より立よりて、めぐりの池のつ、みよりをがみ奉る。そもこの陵は『諸陵式』に「百舌耳原中陵〔難波高津宮。御宇仁徳天皇。在和泉国大島郡〕」と見えたる陵なり。俗に大山陵といふ名のごとくに、いとも大きな山にて、あたりの堀もいとひろし。「だいせんりょう」は、この「大鷄鶴」といふ文字を「だいせうれう」とよむをよこなまれりといふ説のあるは、中々ひがごとにて、大きなより、たゞに名づけたるものなるべし。まことにこの陵のおごそかなること、めも心もおどろかれて、上つ代のさまおもひやられたるを、今にくちせずのこりたるこそ、よろこばしけれ。

されど、今はこの陵のあまりに大きなゆゑ、常の山のごとくおもへる人ばかりにやあらん、船してめぐりの池をわたりて、このあたりの人のあそぶところとなれるは、なげかはしきことなり。まことに心なき人ばかり世の中におほきものはあらじ。いさ、かにてもこ、ろある人なりせば、神にひとしく、かまもかしこき天皇をかくし奉りたる陵のうへのほりてあそびたはむる、ことを、いかでかはせん。あなかしこ。

さて、この陵の南のかたにあたりて、おなじく大きな山あり。さと人は「みさ、ぎ」とのみいひて、いづれの天皇の陵といふことをしらず。されば、この陵は『式』に「百舌耳原南陵〔磐余雅桜宮。御宇履中天皇〕」と見えたる陵なるべし。又、北のかたにあたりて、このふたつの陵よりはいさ、かちひさきけれど、猶大きな陵あり。さと人は「蓼が池陵」、又「楠井陵」ともいへり。こは『式』に「百舌耳原北陵〔丹北柴籬宮。御宇反正天皇〕」と見えたる陵なるべし。このみつのみさ、ぎの今のよまでもむかしのま、にたゞしくのこりたるは、よろこばしきこと、たとへむかたなくたふとくなむ。いにしへのぶともがらは、これにまさるよろこびはあらじかし。

音にきくみつのみさ、ぎあふぎ見てふりしよのぶ百舌の耳原

このあたりに墓とおほしく、めぐりに池ある小山のこれかれおほきも、そのころのはかどもなるべし。

さて、「百舌といふ名は、この所になしや」とさと人にたづねれば、こゝより東のかたに、みさゝぎのごとき山のあるをゆびさして、「その所、万代八幡といふ社にて、あたりに毛須荘といふさともあり」といへり。この大山陵のあたりには里のなければ、おのづからにその名のうせたるものなるべし。

さて、その万代八幡とまうすは、社伝に、もとの応神天皇の陵にて、こゝより河内国にあらため、かくし奉りたるなりといふとかや。このこといかゞあらん、ものにも見えねば、おそらくは後人の説なるべし。社伝などにこのたぐひよにおほければ也。

さて、この山さきにいへるごとく、うへなくみさゝぎのさまなるは、何人の墓ならんとかつはいぶかし。

これよりしばしゆきて、黒土といふさとにいたる。このところははや河内の国なり。長曾根・金田・中村・野遠村などいふをすぎて、ちひさき石橋をわたりて松原といふさとをすぐ。このちかきあたりに反正天皇のましまし、丹北柴籬宮の跡なりといふところありときけど、さまではえたづねずして、しばしゆけば、道より北のかたに陵とおほしきものありて、そのある所を大塚村といふといふは、その塚のあるによりたる名なるべし。『河内志』といふふみに、この塚のことを「来目皇子御墓なり」としるせれど、その所のさま、たひらかなるところなれば、「殖生山岡上に葬」といふ『書紀』の文にかなひがたければ、あやまりなるべし。

野村といふをすぎて、伊勢橋といふ、これもちひさき石橋をわたりて、野上村といふにいたる。こゝに野中寺といふふる寺あるにまうづ。この寺を俗に中太子といふは、上下の太子といふ寺のあるにむかへたる名と聞ゆ。この寺のむかひのかたに亀池弁財天といふがあるにまうづ。これ『三代実録』に見えたる「野中神」なりといふは、いかゞあらん。村の名は野上といへど、すでに野中寺といふ寺のちかきあたりにて、外にこの村に神社とおほしきものは見えず。今のよにはやんごとなき神社などの、ほとけ神になりたまへるためしすくなくならねば、かたぐゝ野中神社ならんか。

さて、このあたりはいさゝかたかき岡のやうなところなり。その岡をくだりたるところのひがしのかたに、ぼけ山といふ山あり。陵のさまにてあたりに

ほりのさまもさだかにのこれる山なり。ある説に、このこだかきところ、むかしの殖生坂のなごりにて、このぼけ山といふは、すなはち『式』に「殖生坂本陵〔石上広高宮。御宇仁賢天皇。在河内国丹比郡〕」見えたる陵にて、ぼけ山といふは、この天皇の大御名の億計をよこなまれるなりといふは、よくかなへりとおほゆ。又このあたりに塚穴といふ古き塚のあるを、さきにもいへる来目皇子の御墓なりといへる説のあるもうべなりとおほゆ。されど、この仁賢天皇の陵は、黒山村といふにありと『河内志』にしるせるを、故大人〔本居宣長大人〕もとられたりと見えて、それならんと『古事記伝』にしるされたり。そのところは、このあたりよりへだ、りたるところにて、われいまだゆかざれば、そのところをもたづね見てこそ、ともかくもさだむべけれ。

さて又おもへば、このぼけ山といふ名は、よに木瓜といふ花あれば、もしくはその花のこの山にさきたることなどのありしより名づけたるにはあらじかと、うたがひのなきにしもあらず。

さて、この殖生坂は履中天皇の難波の宮にましまし、時、墨江中王のきたなき御心によりて大殿に火をつけ給へれば、阿知直が御馬にのせまつりて倭にいでましましたる時、この坂よりその火の猶あかく見えたるを見そなはして〔『古事記』〕「はにふざかわがたち見ればかぎろひのもゆる家村つまが家のあたり」とよみ給へるところなれば、いますこしたかきところならんかとおもはるれど、そのおなじ時に〔『古事記』〕「丹比野にねむとしりせばたつこも、もちてこましもねむとしりせば」とよみ給へるたぢひ野は、今も多治井といふさとにて、こゝよりはるか西のかたにありて、すなはち『式』に見えたる「丹比神社」そこにありときけば、ところのさまは『古事記』の文によくあへり。又おもへば、来目皇子の御墓のことをいへる『書紀』の文に「殖生山岡上」と見えたれば、このはにふさかは岡にて、たかゝらぬところとも聞ゆ。されど、『河内志』に、はにふ坂は、この所にあらざるやうにもしるせれば、いかゞあらん。すべてこのあたりはわれけふはじめてきたるにて、外のところのさまはもとよりしらざれば、いかにともさだめがたし。おなじこゝろざしの人のあらば、このあたりをくはしくたづね見て、猶よく考定てよ。

このぼけ山より北のかたに道をもどりて、藤井寺にゆかんとす。その藤井寺村の入口の南のかた、岡村といふに大きな陵ありて、里人は「反正天皇の陵」といへど、反正天皇陵はけふ見奉りし大山陵の北なる陵にうたがひなければ、

里人のつたへはたがへり。こは『式』に「恵我長野西陵〔穴門豊浦宮。御宇仲哀天皇。在河内国志紀郡〕と見えたる陵なるべし。このあたりより誉田八幡の陵もひがしのかたにちかく見えて、これすなはち『式』に「恵我藻伏山岡陵〔軽島明宮。御宇応神天皇。在河内国志紀郡〕と見えたる陵にて、その陵にはほとんどほからず、藻伏岡よりはこの陵の西にあたりたるも、西といふ文字によくかなひ、今はこのところ丹南郡なれど、『統紀』にはこの岡村のこと「志紀郡」と見えれば、むかしはこの所、志紀郡のうちなるべければ、かたぐいとおもひあはするに、仲哀天皇の陵なること、うたがひなし。この仲哀天皇の陵を錦織郡上原村といふにありといへる説のあるはあやまり也。又、貝原篤信のをしが元禄二年といふとし、このあたりをめぐられたる時の道の記に、「雄略天皇陵なり」といはれたるもあやまりなり。

さて、その貝原のをちの道の記に、「この陵のめぐり——ふかき^(池)地あり」としるされたれど、今はおほきなる池のかたちばかりにて、水はあせたり。それは百三十年むかしのことなれば、そのあひだにそのさまのはれることは、さもあるべけれど、今より行きさきも又いかゞあらん。うつりゆく時のさまにしたがひて、ふるき跡のかはりゆくも、なげかはしきことなりかし。

かくて、藤井寺にまづうるに、いとふるき寺にて、ものさびたり。堺よりこの寺まで三里あり〔河内国はすべて五十町を一里といへり〕。

この寺の庭に藤の花の咲たるを、

立よりて寺の名とへば藤の花こたへがほにもめにかゝりけり

藤井寺その名も猶やさく花のふかきいろよりかけはじめけむ

さく色も外にことなる色見せて寺のなだてになさぬ藤波

むらさきの雲にまがへど藤井寺このよのなかのいろとやは見る

藤井寺あかぬさかりをみほとけも色むなしとてかけははなれじ

をることはゆるさぬ色の藤井寺ほとけもなほぞをしみがほなる

みちいそぐ人ひきとめてまつはる、しなひもにくき藤かづらかな

この寺の西のかたに三社の宮といふふるき御社おはします。こは『式』に見えたる「長野神社」なりといへり。この御社も長野にて、かの陵の長野といふもおなじ名にて、おなじ郡なれば、この神社も長野神社なることうたがひなく、陵のこともいよくさなりといもひさだめぬ。

さて、この御社の八町ばかりも北にあたりて、いとおほきなる陵の見ゆるは、

島泉村といふところにて、『式』に「丹比高鷲原陵〔泊瀬朝倉宮。御宇雄略天皇。在河内国丹比郡〕と見えたる陵なり。今は高鷲原といふ。名はのこらねど丹北郡にありて、こゝよりとほくみ奉りたるころも陵なるさまいぢるし。この丹北郡といふは、すなはち昔の丹比郡のことにて、いまは丹南・丹北とわかれたるなり。

さて、これより誉田のかたにもせんとして、しばしゆけば野中村といふさとありて、入口に木ぶかき御社あり。さきにいへる『三代実録』に見えたる「野中神」は、この御社のことにて、弁財天をその神なりといふは誤なるべし。かくのごときことあれば、地理のことはくはしくたづねたるうへならでは、さだめがたきものぞかし。

藤井寺より八町といふに、誉田のさとにいたる。この誉田といふ名は、品陀といへる大御名より、その天皇のみさぎのあるさとをかくいへること、きこゆ。されど、今は「ほむだ」とはいはで、「こむ田」といひあやまれり。

いにしへの岡のはに馬のそれならで里の名さへぞのりたがへたる

このさとのあたりの畑の中に、ふるき塚どもこれかれあり。すべてふるき陵のほとりには、いづれも傍に塚どもあること常なり。

さて、誉田八幡の御社にまうづるに、いと大きな御社なり。この御社ををがみて、みまへを北のかたに一町あまりゆけば、陵のもとにいたる。まことにめさむるばかり大きな陵にて、松ばかりくろく見ゆるまでしげりたるさま、かうぐしくたふときこと、たとへんものなし。

世にひろくあふぐ八幡の神も猶もとの光はことにたふとし

この陵は「藻伏の岡」とあれば、もとより岡なりけむ。よりてことさら大きなものなるべし。

さて、この御社のあたりは古市郡にて、陵のあたりは志紀郡にかゝれりといへば、上にいへるごとく、このみさぎのこと、『式』に「志紀郡」と見えたるにもよくかなへり。陵のうへには御魂舎とかいふものをたてられたり。そもくこの陵のことは、ふるくものに見えたれど、御社のあることはものに見えず。されば、八幡の御社といふは、いつのころよりたれられけむ。社伝には、欽明天皇の御代にたてられたるよし見えたりといへど、おぼつかなし。

このさとより古市にもほどちかくて、古市もふるきところなれば、ゆかまほしけれど、日もくれか、りぬれば、えゆかで道明寺のかたにゆかんとす。さと

のなかばばかりにちひさき川ありて、石橋あり。これをわたりたるところの右のかたなる人の家の庭に、『式』に見えたる「当宗神社」おはします。今はいとちひさくなりたまへり。されど、こゝを今も当宗垣内といふときけば、むかしの跡の、これなるべし。「大月次新嘗」とまで見えたる御社の、かくなり給へるは、なげかはしくなむ。

そのさとを出はなれて、いさ、かゆけば、道の左のかたに何とかやあやしき名のつきたる塚有。こゝはかの陵のひがしのかたなり。このつかは竹内宿祢の墓なりといへり。この宿祢の墓は、和泉国の大山陵にほど、ほからぬところにある長塚といふ塚なりといふ説もあり。いづれならん。

誉田より五町といふに、道明寺のさとなり。こゝにて日もくれかゝりたれば、このさとの松やなにがしといふものゝ家にやどりぬ。道明寺にもまうでまほしけれど、はやくも門をさして、人のいることをゆるさねば、あすまうでんとす。このさとは、人やどす家もをさく見えず、この家ばかりなれば、せんかたなくて、宿りはやどりたるものながら、まことに、はにふの小屋にて、わびしきことたとへむかたなし。されど、こゝろゆく旅のことなれば、さばかりにはあらぬも、かつはあやししくこそ。

こよひくれすぐるほど、雨ふりいでたれば、こゝろにかゝりて、とくはれなんことをねんじつ、ふしどにいらぬ。

いでた、んあすやいかにとふる雨もこゝろにかゝる軒の玉水

雨ぞ、ぐはにふの小屋のわびしきにもるかとはかりぬる、袖かな

(外題)「柳桜日記 下」

(内題)「柳桜日記下の巻」

四月三日

三日。朝とくおきいでたるに、雨猶ふる。

されど、しばしやすらひ居たるほどに晴て、天気よくなりたれば、まず道明寺の門を入て天神の御社にまうづ。おほきくきらくしき御社なり。そもくこの御社の神実といはひ奉れる御像は、この大神のなき名のつみによりて筑紫の国にさすらひたまふ時、この寺に御伯母君覚寿尼の君と申がすみ給へる御許に立よりて、一夜やどらせ給ひ、御名ごりををしみ給ひて、御みづから御像を

きざみてのこしおきたまへる、そのみかたにて、たふとさかぎりなき御像なるに、われこの大神をふかくたふとみたてまつれば、けふはこの寺にいひいれて御扉をひらかせて、かしこけれどをがみ奉るに、げによのつねの御像にはこよなくことかはりて、今もうつし身のますがごときさま、たふとさ心にしみて、あなかしこと、ふかくこゝろいれてをがみたてまつる。かのつくしにくだらせ給ふ時のことなどしのび奉れて、その時の御こゝろなどおしはかり奉れば、いともかなしく涙もこぼる、ばかりになむ。

さて、この大神のこゝにやどらせ給ふ時の曉に、「なけばこそ別もうけれ鳥の音の聞えぬさとのあかつきもがな」とよみ給へりといふつたへのこの寺にもありて、この寺はもとより、このさとのうち一村は、今の世までも鶏をかふことをいむといへり。又、外の里にかひたる鶏にても、この里にもち来たれば、このさとにすむあひだは、声たつることのなしといへり。こは、あやしくたふとくこそ。

大神もこゝろつくしにゆく旅といとゞなごりやをしみましけむ

鳥の音の聞えぬ里となりてよにくちせぬ神のみいつたふとし

この寺は、かの伯母君の覚寿尼公のすみたまへるためしによりて、今も尼寺にて、都のたかき人の御娘たちすみたまへるためしによりて、今も尼寺。又この寺のうちななる天穗日命神社といふにもまうづ。こは遠祖の大神なればまつりたてまつれるものなるべし。三社神祠といふにもまうづ。白大夫祠といふもあり。この白大夫といふ人は、つくしにてかの大身に忠につかへたる人なり。さればこそ、たかき人ならねど神にはまつりたるものなれ。又、木櫛樹といふよにめづらしき木も二木あり。

この寺のうちより道ありて、門をいでたる西のかたに二丁ばかりゆけば、畑の中に八鳥塚といふ塚あり。こは土師八鳥連といふ人の墓なりとて、いしぶみなどをたてたり。この連の家をすて、この道明寺をたてたるなりとかや。この八鳥塚の一町ばかり北にあたりて、大きな陵あり。沢田村といふ村のうちなるがゆゑに、沢田山といひて、里人は仲哀天皇陵なりといへれど、仲哀はきのふみたりし岡村なるにうたがひなければ、これぞ『式』に「恵我長野北陵〔遠飛鳥宮。御宇允恭天皇。在河内国志紀郡〕」と見えたる陵なるべき。

さて、このあたり誉田陵にほど、ほからねば、かの岡村なる仲哀陵にもたゞには十町ばかりもへだゝりて、この陵よりは仲哀陵、西のかたにあたり、仲哀

陵よりはこの陵、北にあたれば、『式』の文にもよくかなへり。この西北の陵のほどへだ、れるさまは、和泉国なる百舌耳原の陵の南北のへだ、れるほどよりは、今すこしとほかるべきか。そのさまはこ、も藻伏国の陵を中にて、百舌耳原なる三陵のさまにいとよく似たり。則、この所は今も志紀郡なれば、郡もむかしのま、也。さと人のこの陵を仲哀天皇陵なりといふは、むかしも大和国なる狭城盾列池なる南の陵と北の陵とのまがひたるためしなどあれば、これも西北の陵の御名をもてたがへるものにて、かくいふことうたがひなし。この陵を見奉るにつけても、きのふのところにいへる岡村の陵は、仲哀天皇の陵なることまがふべくもあらず。

さて、大人の『古事記伝』に、「このあたりのこと、いまだゆきて見ざれば、しひてはいひがたけれど、『河内志』などにて見れば、今すこしこの陵のあひだのとほくへだ、れるやうにて、今すこしちか、るべきやうにおほゆ」としるされたれど、そはいはれたることく、このあたりのこと、いまだ見たまはぬゆゑにて、けふかくたづね見たるところは、さきにしるせるごとく、百舌耳原の南北よりいさ、かあひだのとほきばかりにて、ところのさま、まがふべくもあらず、『式』の文にもよくかなへるものをや。

さて、道明寺村をいで、八町ばかりゆけば、石川といふ川あり。この川をかちわたりすれば、むかひに玉手山といふ小だかき山ありて、安福寺といふ寺あり。その寺にまうでむと坂路をのぼる道のかたはらに、ほら穴といひて、石がまへの見ゆるものあり。このほら穴といふもの、この山にこれかれおほくありて、金環・陶器などをほりい出すことありといへば、ふるきよの墓どもなどにはあらぬか。のぼりはてたるところ、天王台といひて、牛頭天王の御社おはします。この御社を『式』に見えたる「伯太彦神社」也といふは、いかゝあらん。御社もふるく見えて、『式』に見えたる御社どもの牛頭天王などになりたまへるも、例のよにおほければ、もしはその伯太彦神社ならんか。この坂路につ、じおほくてさかりなり。それよりかの寺にまうづるに、よき寺也。かの御社は今はこの寺の鎮守といふもの、やうになり給へり。又この寺に尾張の殿の霊屋といふもあれど、あたりに人のゆくことをゆるさねば、石のはしの下より見るさま、さら／＼し。

寿世堂といふ堂のあるところより、一町ばかりゆけば、国見岡といひて、いとけしきよき所あるは、この山のうちに、さるべきけしきなるところと人も

よくしりて、六国を見おろす所なりといへり。その六国といふは、山城・河内・和泉・摂津・播磨・淡路にて、げにその国々の海山などよく見ゆ。その外なるけしきも、いとよくたぐひすくなきながめに、いとおもしろし。天の香山ならねど、「のぼりたち国見をすれば」などうちずんじて、や、時うつるまで見ぬたるほど、

あたひなき玉手の山のけしきかな六の国べをたゞひとめにて

たぐひなきこのみわたしを玉手山たま／＼きたるひかりにはせん

玉手山霞の袖はぬぎすて、あらはに見ゆる夏のけしきか

さて、しるべせせんためにとて、ふもとのさとよりともなひきたるさと人に、「こ、はいづくぞ。かしこはいづくぞ」などたづねとふも、こ、ろゆくこ、ちのせられて、くはしくしるさまほしけれど、くだ／＼しければやみぬ。

そのたづねとひたる所のうちに、この山よりほどちかく、北のかたに見ゆるさとあり。このさは、道明寺村より今すこし北のかたなる里にて、陵のさましたるものあれば、「かれはいかに」と、ひたるに、「国府村といふさとにて、国府の皇子塚と世にいふ塚なり」とこたふ。この塚のことは、かねて名をきける塚にて、市辺皇子御墓也といふ説あり。されど、この皇子の御墓は、みかばねを置目老嫗がよくしり居たるによりて、淡路国なる蚊屋野の東山に御墓つくり給ふよし、『古事記』に見えて、河内国にあるよし、ものにも見えず。又、皇子塚といひたるのみにて、市辺皇子といふ伝もなければ、またくあやまりなるべし。されど、その村に市辺皇子なりといふつたへのありしによりていへる説なるか。そはその村にゆきてくはしくたづねまほしけれど、さまではえものせず。又おもへば、この市辺皇子の皇子にましまし、顕宗天皇は、大和の国なる近飛鳥宮にて天の下しろしめし、天皇なれば、このちかき所に近飛鳥といふ所のあるを、その大和なる宮のこと、おもひあやまれるから、おしあてたる後人の説にもあるべくや。

さて、もとの寿世堂までかへりて、もとの坂路にはあらぬ坂路をくだるに、このさかぢにも躑躅いとおほし。

つ、じ花にほへる子らによそへては玉手の名さへ外ならぬかな

もとの石川のほとりにかへりて、その堤の道をのぼりゆくほど、西のかたにまちかく古市の里見えて、そのほとりに陵のふたつ見ゆるは、ひとつのかたは『式』に「古市高屋丘陵〔勾金橋宮。御宇安閑天皇。在河内国古市郡〕」と見え

たる陵なり。今ひとつのかたは、『式』に「古市高屋墓〔春日山田皇女。在河内国同郡〕」と見えたる陵なり。またこのふたつの陵よりいますこしとほく見ゆる陵あり。こは輕墓村といふ所にて、その墓は則、輕皇子のみはかなりといへるは、さもあるべし。されど、ある説に、輕皇子は安楽天皇とた、かひまさむとして、末つひに伊予湯にはなれたまへる罪あれば、御墓をつくるよしのあるべくもあらず。このみはか古市にちかければ、『書紀』に見えたる大和建命の白鳥陵なるべしといへり。『書紀』の文に「白鳥更飛至河内国古市村。亦造陵其地」と見えたるに、その白鳥陵といふべき陵、古市のあたりになければ、この説より所なきにしもあらねど、輕皇子は安楽天皇の兄皇子にますがうへ、すでに天の下をもしろしめずにさだまりしを、衣通郎姫にたはけたまへる罪ゆゑ、伊予湯にはなれたれ給へるにて、まことはやんごとなき皇子の御ことなれば、御はかのなしとはいひがたかるべし。ことはかりたるものながら、筑紫樞日宮にてかくれませる仲哀天皇の陵のこの国にあるためし、また筑紫にて薨じ給へる来目皇子をこの国に後にかくし奉れるためしなどあれば、伊予湯にてかくれませるを、この墓にかくし奉れるにもあるべくおもはるれば、しひて白鳥陵とはいひがたかるべし。今、白鳥明神とも伊伎宮とも申す御社の古市にありといへば、それかの白鳥陵にて、輕墓村なるは、名のごとく輕皇子の御墓なるべし。

さて、この堤より東のかたのさつに入。このさつは駒谷といへり。おぐる大黒といふ名だかき所もあれど、ふるくものに見えぬところにて、そこにゆけば道のたよりもあしければ、えゆかず。

さて、この駒が谷村のたかきところに、『式』に見えたる「杜本神社」おはしますにまうづ。今も大きな御社なり。この御社、『式』には「安宿郡」と見えたる、このさつは古市郡なれば、郡のたがへるやうなれど、安宿郡にほどこかければ、後のよに郡のさかひのたがへるものなるべし。この御社はやがて金剛輪寺といふ寺のほとりにて、となりたれば、この御社より北にゆきて西にいづれば、その寺なり。この寺もいとふるき寺にて、釈迦堂・本堂などありて、本堂には「近飛鳥寺」としるしたる額をかけた。又、楠公の墓といふもあり。藤永手墓といふもあり。又、西行法師のすめりし庵といふもありて、その法師のきざみたる像といふが今にありてふるく見ゆ。

さて、この寺にくさぐさのふるきたからものどもありとき、しかば、住僧にこひたるに、この僧ねもごろなる僧にて、伊勢人のひがごと、はきかずやあり

けむ、「かゝるふるきものどもをたづねくる人はいとまれなるに、とほき国よりものし給へるこそ、みやびやかなれ」などいひて、のこりなくとりいで、見せたるを、心とめて見るに、古鏡・古鈴、あるは「以天香久山之土造。天平二年三月三日」とえりたる土の鏡、ふるき劍、勾玉・金環などにて、いとふるきものなることうたがひなく見えたり。こは、かの「藤永手墓」とえりたる石と、もに、さきつとし、本堂のうしろのかたよりほりいだせるなりといふは、永手のはかにをさめたるものにやあらん。又この寺の昔の瓦もあり。又、後醍醐帝・後村上帝の倫紙（紙）、あるは楠正成主・正行主・正遠主のか、れたるもの、又このぬしのふみなどもおほくあり。そのふみどもの中に、正遠ぬしより正成主の石碑をこの寺にたてまほしくおもふよし、たのみこされたるふみ有。これによりておもへば、さきにいへる正成主の塔は正遠主のたてられたりといふ。又、正成主の像を正行ぬしのをさめられたりといふがあり。則、正行ぬしの名をえりつけた。いとちひさけれど、古くたふとき像也。

くすの木のかきこゝろをあふぐ哉のこれるかげを見るにつけてもこの像を神実として、正成主をまつりたる社をたてん心ありて、このころ宮つくりすと住僧のいへるは、さるべき心ざしなりや。又そのころの兜とおほしきものもあり。外にも何くれとあれど、しるしあへず、このところにてや、時をうつしぬ。

さて、この村を出はなれて、飛鳥川といふ川をつたりて南のかたに、道よりいさ、かまはりたるところに若宮の杜といふ、ちひさき杜ありて、このところよりほりいでたる碑といふがあり。おもてには、中に「瑞齒別天皇」、右に「伊波別命」、左に「遠登売命」としるし、うらのかたには「維日谷雅宮者反正天皇一夜被禊之田蹟也」とみくだりにえりつけて、ふるく見ゆ。されどこの天皇の隼人曾波訶理をきりたまひて、はらひし給へるところは遠飛鳥にて、大和の国の飛鳥なり。近飛鳥はこのあたりにて、かの寺を近飛鳥寺といひ、東のかたに飛鳥村といふもあれど、このあたり遠飛鳥にあらざれば、こゝろ得がたきことなり。この碑も例のもてひがめたる後人の作なるべし。

この若宮の杜といふより、南のかたなるほそき山道に入て十町ばかりゆけば、壺井八幡の御社のほとりにいづ。この御社にまうづるに、壺井権現の御社といふもおはします。石のはしをくだりたる所に、壺井といふ井もあり。

こゝより二町ばかりゆきて通法寺村にいたりて、通法寺にまうづ。この寺に

は源家三代の御墓ありて、よき寺なり。則、本堂の左のかたなるちひさき堂は、伊予守頼義公をさめたる所也。本堂より東のかたに二町ばかりゆけば、八幡太郎義家公の御墓ありて、武將の塚ながらもふるきゆゑにや、いと大きなり。むかしこの君の陸奥の国にくだり給ふ時、勿来曾関にて花のちりければ、「千載」ふくかぜをなこそせきとおもへども道もせにちる山ざくらかな」とよみ給へるは、武將の御こゝろには優にみやびやかなること、常々しのび奉りたるを、けふもふとおもひいで、

末となくよにとゞまりてかぐはしきなこそせきの花の言の葉

この義家公の御墓の一町ばかり南の方に、河内守源頼信公のみはかありて、これもおなじくおほきなり。

さて、かの壺井権現と申もこの三人の武將をいはひまつりたるなりといへり。さればこそ、三座おはしけめ。

このさとより十八町ばかりゆきて、上太子にまうづ。こは磯長山叡福寺といふ、何くれの堂などもおほく、大きなる寺にて、則、『式』に「磯長墓〔橋豊日天皇之皇太子。名云聖徳。在河内国石川郡〕と見えたる御墓のある寺にて、そのみはかは今もおほきなり。御母・御妃をもこの御墓にをさめ奉りたりといひつたへて、そのゆゑに三骨一廟と里人・住僧などのいひつたへたるは、いかゞあらん。『式』にはそのよし見えず。されど、御母・御妃などのことは、『式』にかゝづらはぬことなれば、はぶかれたるものか。

さて、この太子は仏の法をはじめてひろめ給ひしによりて、ものしり人ほともかく申奉るもよにおほけれど、御名を豊聰耳命とまで申奉りて、さばかりさどくましまし、太子は、いにしへより外にたぐひもあらぬを、後人のおろかなる心よりとにかくおもひはかりて申奉るべきことかはと、こたび此みはかにもまうで、外の陵もおなじやうにうやまひをがみたてまつるを、見識なしといふ人おほかめれど、さおもふ人はこゝろなしといは、いひね、わが心はかくなむ。この太子のくみしたまへる蘇我馬子墓もこのちかききにありといへど、ゆかず。そはこの臣ばかりあしきわざをなし、人は、またむかしより外にたぐひなく、かの太子もこの臣のいきほひにおそれて、こゝろならずくみしたまへるやうにおもはるゝこともおほくて、かばかりきたなき臣のはかに立よるは、身も心もけがるゝこちのせらるればなり。

さて、この太子の御はかの石棺のほとりまで土をほりて、廓のごときものを

たてたるに、人のたのみによりてこの石棺のほとりまでゆくことをゆるすといへり。かくのごときものをかくたてたるも、この太子をたふとむあまりのことなるべけれど、御はかのためにかしこきことなれば、ものしらぬ法師らがしわざならんと、をかしくおほゆ。

又この御墓のほとりより大きなる陵四つ見えて、この御墓と、もに五つになりて、梅の花びらのごとくに見ゆればとて、里人は梅鉢陵といへり。先、東のかたに『式』に「河内磯長原陵〔磐余池辺列槻宮。御宇用明天皇。在河内国石川郡〕と見えたる陵見えたり。そのうしとらのかたに「大坂磯長陵〔難波長柄豊崎宮。御宇孝徳天皇。在同国同郡〕と見えたる陵見ゆ。又、未申のかたに「河内国磯長中尾陵〔詛語田宮。御宇敏達天皇。在同国同郡〕と見えたる陵、又「磯長山田陵〔小治田宮。御宇推古天皇。在同国同郡〕と見えたる陵、ふたつほど、ほからずならびたり。この敏達天皇の陵のうちには、石姫皇女をもをさめ奉れるよし、『式』に見えたり。いづれもそのほとりまでゆきてをがみ奉らんとはおもへど、けふ駒谷にておもひがけず時をうつして、ゆくさきいそがるれば、えものせず。

さて、用明陵のある所は春日村といひて、円明土といふといへり。こは用明をあやまれるなるべし。孝徳陵は山田村といふにありて、上野山ともいひ、孝徳陵ともいふとぞ。推古陵も山田村といふ所にて、高塚といふとかや。敏達陵は葉室村といふにありて、天王山といふといへり。そのうち、山田村といふは「磯長山田陵」と『式』に見えたる山田の名ののこれるなるべし。かく五つの陵どもをたゞひとめにをがみ奉ること、たふとくよろこばしくなむ。

さて、これより信貴山のかたにゆかんとおもふ心あれば、「このさとよりたゞにゆく道ありや」と、へば、「駒が谷までかへらではゆきがたし」といへり。よりて、こまが谷のかたにかへる近道をとひて、その道をゆかむとす。その道は太子の御墓の傍より山にのぼりて、その山をこえて飛鳥村にいづる也。のぼりたる山のけしきいとよく、かしこけれど、かの四の陵、御墓のほとりより見たるにはまさりて、いとよく見えたり。

それより山ふところのほそき道を二十四五町ばかりゆきて、飛鳥村にいづ。この所すなはちむかしの近飛鳥にて、かの反正天皇の隼人曾波訶里をきりたまへる、ふるき跡なり。そのをりこえませる大坂山の道といふは、この村より大和国穴蒸村といふにいづる山道にて、今は、あなむし越といへる道也と『古事

記伝』にはれたるは、けふこの所のさまにあはせ考るに、よくあへり。この道のこと、外にもふるく見ゆれば、むかしの大路なりけむを、今はおほく人のかよはぬ道となれり。

さて、大坂といふは、この山のあなたおもての名なり。大坂磯長陵といふも、則このあなたおもてなれば也。

さて、この飛鳥村に『式』に見えたる「飛鳥戸神社」もおはしまして、今は天王とへいり。

もとの駒谷村にかへりて、その村より国分村といふ村のかたにゆかんとす。二町ばかりゆけば、道にいしぶみありて、「履中天皇行幸之地」とゑりたるは、いかゞ。この天皇のをとめの歌によりてこえませる当麻路は、今の竹内越といふ道なるをや。

このいしぶみのある所より北のかたにゆきて、しばし山道をすぎて田辺村といふにいたる。こゝに春日神社とて、ふるき御社おはします。

さて、その国分村といふにいでたるに、この村に飛鳥天王社といふおはします。又、阿弥陀寺といふ寺もあり。又ちかき所に高井田村といふもありて、ここにも木ぶかき杜あり。くはしくたづねなば、ふるきみやしろなどにもやあらんとおもへど、例のさまではものせずなむ。

この村より信貴のかたにゆくは山道なりときけば、駕籠といふもののにのりてしばしゆけば、川あるを船にてわたりて、青谷村といふにいたる。こゝにも木ぶかき杜あり。雁多尾畑村といふをもすぐるに、このあたりはすべて山かたつきたるさとなれば、道をのぼりくだりしつ、南畑といふにいたる。こゝより信貴にはほどちかし。この間の山道のたかき所よりは、大和の国の三山（畝尾・香久山・耳無）なども見ゆる所ありて、この山などは名だかき山なれば、いとおもしろくぞおほえし、けしきよく見はるかさるゝ所どもおほかりき。

その南畑よりしばしゆけば信貴惣門あり。入て石のはしをのぼりかゝるほど、日さへくれかゝりぬれば、この寺の成徳院といふ防にやどりぬ。国分より二里半なりといへど、道いとあしき坂なりしかば、いと、ほかりしやうにおほゆ。このやどりたる坊より見はらしたるけしき、いとよければ、しばし見居たるほど、むかひのかたにてほとゝぎすの二声、三声なきたるは、いとめづらし。けふはまた卯月の三日のことなれば、この声のことなどはおもひもかけざりしを、はからずもきゝたるは、いとゞけうすくなからずこそ。

ほとゝぎす声よりほかはしる人もなくをうれしくきくみやまかななれも猶おなじ旅とやほとゝぎす宿かる袖のなみだとふらん

めづらしきけふの初音をのぼりこしかひとやしぎの山ほとゝぎすとかへすゞもめづらし。

こよひ又、雨ふりいでたれど、しばしがほどになごりなくうちはれぬ。

四月四日

四日。日いとよし。

朝とく本堂にまうで、名だかき毘沙門天の像をがまむとす。その本堂にいたる道の右のかたに、猪上大明神といふ神おはします。このところは大和国平群郡なれば、『式』に見えたる「猪上神社」なるべし。今はこの寺の鎮守のごとくなり給へり。この寺もふるき寺なれど、もとよりの鎮守にはあらで、おなじ山にありし御社を、かくなし奉りたるものなるべし。

さて、本堂にまうで、をがむに、堂のさまなどいとたふとし。本尊は秘仏とかいひて、人のをがむことをゆるさず。脇立といふを扉ひらかせてをがむに、このみかたふるく見ゆれば、本尊はましてならむとおほゆ。

さて、この堂の右のかたはよくうちはれたる所なれば見わたしたるに、大和の国のかた、いとよく見ゆ。よべの雨の名ごりの雲、足もとに見えて、その絶間よりところゝの見ゆるけしき、めづらしくな。この堂よりいぬみのかたなる山のさま、いとおもしろき山にて、青葉のけしき、ことさらよし。そのさまは、みやこの嵐山のおもかげある山にて、えならず。これにつけても、都の空のおもひいでられて、なつかしくこそ。

かの猪上神社のおはしますかたはらより、いさゝかのぼれば塔あり。その塔のうしろのかたに道ありて、奥院といふにまうでんとす。このおくの院まで山道十八町なりといへど、いと、ほく、廿町あまりもあり。則そのおくの院といふにまうづるに、こゝは米尾山といひて、毘沙門堂あり。この堂の脇に鎮守の社あり。そのうしろのかたなる山に焼米といふがありとき、しかば、ゆきて心とめて見るに、そのあたり、すべての土の中に米のくろくやけたることときもの、数かぎりなく見えたり。この米のごときものあるによりて、米尾山といふなりとぞ。この米はいかなるものともわかりがたし。何かこの寺にてそのゆゑよしをもきゝたれど、うべなりともおもはれず。そはとまれかくまれ、あやし

き事なり。こたびこの信貴山にのほりたるは、故郷人のうちに「かならずのほり給へ」などす、めし人もあり、かつは名だかきところなれば、わが心にもまうでまほしくおぼえて、かた／＼まうでたるなり。

これより久安寺越といふ山道を河内のかたにくだらんとて、いとあしき道へのほりくだりす。その道よりこの山の峰なる松永の城跡といふところ、いとよく見えて、げに城のさまのこれり。又その城の井の跡といふも道のかたはらにあり。

さて、久安寺村といふ山ざとをすぐるは、この村のあるによりて久安寺越といふものと見ゆ。この坂路のたむけより見れば、河内のかたいとひろく、ひとめに見えたり。まことにこの国はたひらかなることかぎりなき国にて、たかき所もひくき所も見えず、むしろなどしきたらんやうに見ゆ。五畿内のうちにも、かばかりたひらかなる所のひろくつゞきたるは、たぐひなかるべし。

信貴山より二里あまりもきたらんとおもふほど、山たけといふ村にくだりつきて、水越村といふをもすぎ、しばしゆけば道のかたはらに「正一位玉祖大明神」といふ額をかけたる鳥居たてり。こは『式』にも見えたる御社なれば、その鳥居より並木の松原を十町ばかりも入て、御社にまうづ。大きな御社にて、あたりの里を神立村といへり。『伊勢物語』に見えたる高安はこのあたりなれば、この御社は在原業平ぬしをまつれるといふ説のあるは、とるにもたらず。在原氏の人をまつれる社を玉祖神社といかにかいふべき。この御社は、玉祖氏の神なることあきらかなるものをや。

しばしゆけばひろき道にいづ。この道は十三峠越といひて、大和のかたにこゆる山のふもと也。その道を横ぎれて、楽音寺・横小路・六万寺などいふさとをすぎて、四条村といふにいたる。すべてこのあたりは山のねまほりをかよふ小筋の道なり。むかし四糸繩手といひしは、この四条村のあたりのことなるべし。しばしゆけば五糸といふともあり。出雲井といふさとをすぎて、平岡神社にまうづ。いとも大きな御社の今も四座おはしまして、木立のものふかささま、いとたふとく神さびたり。

さく藤のさかりのもとをたづぬれば宮のこだかき平岡の森
この御社よりいさ、かゆけば、又、大路にいひて、そのさとを豊浦といへり。
こは暗峠越といひて、これも大和のかたにこゆる大路也。こ、よりたゞに大阪
にかへればちかけれど、楠正行主の墓にまうでまほしければ、またこの道をも

箱堂（殿）といふ堂の所より横ぎれて、額田といふさとの西のかたをすぐ。このかよひこし道は、俗に高野街道といひて、京より紀国高野などにかよふ道なり。道のかたはらに「石切劔箭神社」としるしたる灯籠あり。これも『式』に見えたる御社なれば、まうづ。この御社のおはします所は、神並村といへり。この御社のことを木積堂ともいふとぞ。

芝といふさとをすぎて、道より東のかたに日下村あり。今もむかしにおなじ文字をかきて、くさかとよめるこそおかしけれ。雄略天皇のいでましのありしことなどもおもひいでらるれば、その村にふるき跡などはなしやと、ゆきてたづね見るに、いひつたへも何もなくて、それにはあらぬ大龍寺といふちかきよの寺あれば、まうで、見るに、よき寺にて、その寺の庭はやがて山にて、おもしろき滝あり。けふはいとあつき日なれば、その滝のほとりに見わたるほどのすゞしさ、いひしらずこ、ちよし。

草香山むかしはかけぬ滝の糸もけふのあつさによりてこそ見れ
善根寺・中垣内などいふさとをすぎて、野崎村といふにいたるに、このさといとにぎは、しければ、何ごとにとふに、年ごとの三月には、このさとの慈眼寺といふ寺の観音堂にて、無縁経といふが七日の間ありて、その経のあるあひだは、このちかきあたり、あるは大坂などよりもまうづる人のおほしといへば、まうでぬ。「すゞき釣あま」にはあらで、われもそのためにきたるものとか人の見らむと、心のうちにはをかしくおほゆ。人のさおもふは、いにしへの跡たづぬるひがものなりといふことのかくれて、中々によかるべくや。

ゆかりなきみのりの声とおもはれず道ゆきぶりにけふはまゐきて
そめがみの色はゆかりのなけれどもきけばさすがにたふとかりけり
北条村といふをすぎて、川崎村といふにいたる。このあたりより飯台山といふ山、東にまぢかく見えて、これすなはち飯台城のありし跡なり。むかしの石がきなどののこれるさまも、よく見ゆ。

この川崎村といふより西のかたに三町ばかり入てゆけば、荻屋といふ里あり。
この里の入口にぞ、かの楠正行主墓・同正時主墓はありける。しるしには大きな楠おひて、「南無権現」といふ、ふるき石のしるしもあり。又ちかきよりたてたる碑もあり。

さて、四条といふ村よりこのあたりまで一すぢにながくつゞきたる道なれば、
むかしはこのあたりまで四糸繩手といひしものにて、このあたりにて身うせ給

へるを、こゝにかくせるならんか。すなはちまうで、ねもころにをがみつ、この君の天皇の御ために忠なりし御心をしのびいづるも、いとかなし。『太平記』「かへらじとかねておもへばあづさゆみなき教に在る名をぞとむる」といふ歌を、よし野の如意輪寺にのこしつ、この四条繩手の合戦に高師直をすでにうたんとまでなりたるを、本意とげずして、つひに身まかり給へることなども、おもひいでられて、袖もほしあへずなむ。

いにしへに ありけることの かぐほしき 名をしいひつぐ いなむしろ
河内の国に おひいでし 楠の大木の 上枝は 君をおほひ 下枝は あ
づまをふせぎ たぐひなく さかえしその葉 よの中は すべなきもの
と しらぬ火の つくしの国ゆ 吹いでし 横しま風の 吹ささむ あら
びにたへず 湊川 川瀬の水に もろくの み ちりてうせぬれ その国
に おひしわかきも その跡を つぎのよろしく かれゆくも 君がみた
めと おひたるも 君がみためと いやたけく さかえしものを 武蔵野
に おひはびこれる しこ草の しげるにあへず これも又 かれてうせ
ぬれ しかれども その名はくちず 楠の木の 若木の墓と 今までに
たえずいひきて この、べに のこれる見れば とほき代の そのまめ心
今こゝに しぬびまつりて 庭たつみ ながる、涙 とゞめかねつも
又よめるみじか歌。

しのぶかなよし野の花もひとさかりありてうきめとなりしむかしを
かへらじとよしのをいで、この野べにちりし若木の花もはかなし
ますらをのかぐほしき名はくちせめやしるしの楠の石となるまで

この墓の東のかたなるほそき道を南のかたにゆけば、角部といふ里也。そのさとをすぎてちひさき川のつゝみの道にのほりて、西宮新田といふにいたる。この所は川のほとりの里にて、大坂にかよふ船あれば、その船にのりてゆかんとす。この船は、かの無縁経にまうでたる人もおほくのれば、いとにぎはしく、船のうちもせばきまでおほくのつどへり。しばしこぎゆけば、堤のうへをかよふ人のえもいはぬ口さがなきことをかしましく船のうちにいひかくれば、船のうちよりも、おなじくわれまけじといひの、しるは、この無縁経のころのならばしなりとかや。されば、その人ども、かたみにはらだ、しきさまにはあらで、中々にけうじあへるも、いとをかしきことゝもと、ほゝゑみぬ。

かくて、くれすぐるほど道頓堀にその舟はて、宿にかへりぬ。わづか三日

のうちに、ふるき名所おほくみめぐりたるは、うれしさとへむものなくおほゆ。すべてこのころみめぐりたるあたりは、はやくよりかねてたづね見まほしくおもひ居たりし所々なれば、としごろのほいとげたるこゝちのせられて、かへすゝもうれしくなむ。

さて、河内国なる千早城跡、天野などにもゆかまほしくおほえしかど、さまでは例のえもので、又のりをまぢわたるにこそ。この河内・和泉をめぐりしほどのことには、旅路の日記にはうるさきさかしらおほくて、あげつらひ書のやうになりたるは、ひがもの、くせなりと、こを見む人もゆるせかし。又、物のこゝろなき里人などにきゝてしるしたることもこれかれおほく、きゝたがへなどもあるべければ、誤などもおほかるべく、ふるき跡なる所を、ところのさまくはしくしらざれば、たづねおとしたるもありぬべし。こは、おなじこゝろざしの人ありて、くはしくたづぬることあらば、その時、考たゞしてよ。このことは河内の国のことのみならず、都ちかきあたりをたづね見たるをりにもありぬべければ、筆のつひでにすべてのことをもいへるなり。まして、ところゝにてよみたる歌どもは、ふとおもひいでたるまゝをかきつけたれば、おなじたぐひおほく、かつは聞ぐるしきもあまた也。又、跡にて考たゞさまほしきこともおほくあれど、それはた、ものうくてやみぬれば、かへすゝもあやまりおほからむとうしろめたけれど、うちすてむもさすがにて、そのまゝにかきしるしぬ。このことはかならずこゝにいふべきことならねど、おもひいづるまゝに。

四月五日

五日。

天満天神の御社にまうで、それより坐摩神社にもまうづ。こは『式』にも見えたる御社也。仁徳天皇御社といふがこのほとりにもあれば、まうで、宿にかへりぬ。

さて、大坂は都にこよなくかはりて見にもすべき所もすくなく、又、古き都のあとに似げなく、地トコロのさまも俗なれば、とゞまりゐたりともようなきことゝ、こよひの船にのりて都のかたにかへらんとす。この国のうちなる多田・勝尾・箕面などにもものして、その道すがらふるき跡をもたづね見まほしけれど、都の空ひたすらなつかしくおほゆれば、こゝをも又のときとのこしおきて、

かくはおもひさだめたる也。

かくて、くれすぐるほど宿ちかき川の岸より船にのらんとす。都の別にかはりて、なごりをしともおもはず、その船にいそぎのりぬ。

四月六日

六日。

ほのくくとあくるほど、山崎に船はてぬ。伏見の方にゆかずして、このあたりにて船よりあがりたるは、みまほしきところくあれは也。石清水にもまうでまほしけれど、こはさきつとしもまうでたれば、こたびはえまうでずして、けふはまづこのところより二里ありといふ金龍寺にまうでんとす。この寺は撰津国島上郡の山にありて、をさくく人のゆかぬ所なるを、こたびものするは、貝原翁のこの所にゆかれたる道の記ありて、くはしくしるされて、この翁もわかきよりこの所にゆかむとおもひながら、年たくるまでそのほいとげざりしことをいひて、よき所のやうにしるされたれば、いかなる所ならんとゆかしくおぼえて、こたびよきついでなれば、かゝるをりならではゆきがたしとおもひおこしてなり。まことにこの貝原翁ばかりまめなる人はよにすくなく、国々をよくめぐりてしるされたる道の記、よにおほければ、ふるきあとたづぬる為には、ようあることとおほし。さればこの翁は、国のためにようなきあだし国^{モシリヒト}の儒者にはあらで、国のためにようあるものしり人なりとやいふべからむ。

山崎の岸より西のかたに四五町ゆけば広瀬川にいたる。この所はすなはち水無瀬のさとして、川もありて川の名は水無瀬川と今もいへり。この川はゆく道ならねど、ふるき名所なれば立よりて、橋の上より見たすに、水無瀬のまぢかく見えてけしきよく、むかしのことなどもおもひいでられて、ものあはれなり。後鳥羽院の「見たせば山本かすむ」とよみ給へりし

おもかげもありてゆく瀬に水無瀬川山本とほきむかしをぞおもふ

このところは、けふはじめて見たる所ながら、言の葉には常々よみなれたる所なれば、しるひとにあへらんやうになつかしくなむ。この所に後鳥羽院の御廟といふもあれど、人のまうづることをゆるさねば、えまうでず。

もとの道にかへりてしばしゆけば、桜井の里にいたる。こゝはむかしの宿にて、楠正成ぬしの都より足利尊氏をふせがんためと兵庫にくだりたまふ時、おもふよしありて正行主にをしへをのこして、故郷にかへされし所なり。そのを

りのことおもひいで、すゞろにかなしくおほえければ、

君がためかぐはしき名をもの、ふのよにとゞめたる桜井の里

かへりこでちりゆく身とはもの、ふのかねてしりけむ桜井の里

のこしおきし若木の花のいにしへをしのぶもかなし桜井の里

うらわかきこずえすつとてますらをも涙ぐみけむさくら井の里

ちらんとはしりて木末をのこしおきし心もふかきさくら井の里

このさとに楠の木ありて、そのもとにちひさき八幡の社のあるは、正成ぬしをまつりたるなりと里人いへり。又、古き松ありて、その松のもとにて正行主にわかれ給へりといひつたへて、子別の松といふとかや。

このさとにてもななくひて、金龍寺の方にゆく。案内の男子をたのみてけきば、「人のおほくものする道のかたは二里なれど、このさとよりたゞに山越にゆけば、三十町ばかりならん」といへば、その道をゆかんとす。待宵侍墓といふもこのさとにありとき、しかばたづぬるに、則「行道なり」といへば、その男の子をさきにたゝせて、里より西のかたにと心ざして二町ばかりゆけば、その墓にて、いとふるく、かたはらに碑もあり。この侍従はさばかりの人ならねど、「まつよひにふけゆくかね」とよめりし言の葉の音たかくきこゆれば、おのづからに墓ものこりたるものなるべし。この墓は山のふもとにて、墓のかたはらより山にのぼるになむ。こは、さと人のゆきかひするのみにて、人のおほくかよはぬ道なれば、いとほそくけはしきこと、いはむかたなし。六町ばかりものぼりたる所より見おろしたるけしきよ、淀川はふもとにながれ、男山はたゞこゝもとに見えて、いとよし。

猶、坂をのぼりくだりて、くだりはてたるところ、金龍寺の本堂のうしろなり。その本堂のまへにいで、ところのさまくはしく見るに、いとよき寺のものしづかなる所也。この寺のある所は、あま村といふさとの山なり。そもくこの寺は能因法師の「山寺の春の夕ぐれきて見れば入相のかねに花ぞ散ける」とよまれたる所にて、今もこの寺のかねを入相の鐘と名づけたり。まことにその歌のけしき見るやうなる所のさまにて、この歌の味はこの寺を見ずしてはしりがたし。われもけふ、この所にきたりてこそ、この歌の名だかきゆゑよしをも、所のさまにあはせておもひしりたるものなりけれ。今も桜おほく、花のころには見にくる人のおほしといへり。

その青葉のかげにたゞずみて、

今もなほ言葉の花はちりゆかできくこ、ちする入相のかね

きて見ればことばの花のおもかげもみどりにのこる入相の鐘

猶のこる言葉の花を色香にて見ればみどりもなつかしき哉

ちりのこる言葉の花の跡とめて人もこずゑの緑をぞ見る

鐘楼のかねは、かのうたに見えたるふるきかねならんとおもひて、のほりて見るに、古きにはあらで、慶長の年号あり。こは名あるかねのたえたるをかなしみて、後につくれるなりとぞ。その鐘のもとに能因法師の像もあり。この法師のことを古曾部入道ともいふは、このちかきあたりの古曾部といふにすまれたるによりて也。その所よりこの山にのほりてこそ、かの歌はよまれけめ。「春の夕ぐれきて見れば」といへるによりて、そのさまあきらけし。

その古曾部にもゆかむとて、坂をくだらんとす。この坂はこの寺にまうづるためのまことの道なれば、ひろくよき道にて、ふもとまで十三町の間、木ぶかき山なり。かくたかき所なれば、ものしづかなりしもうべなりけれと、おもひあはさる。

別府といふ里をすぎて古曾部村にいたる。金龍寺の山のうへよりは二十四五町もあるべし。この古曾部村の入口に能因法師の墓ありて、いとおほきなるが、これもかたはらに碑あり。そのちかきに花の井といふ井もあり。この法師が『後拾遺』「我宿の木末の夏になるときはこまの山ぞみえずなりける」とよまれたるもこのところなるに、をりから里の夏木立ひまなくしげりたる頃なれば、ましてむかしのことおもひいでらる。

このさとに伊勢寺といふ寺あるにまうづるに、伊勢の墓ありて、これもかたはらに碑あり。この寺を伊勢寺といふは、伊勢の世をのがれてすみし家のあとにたてたる寺なりといへり。この寺も今は禅宗也。

さて、この寺に伊勢の墓もたるといふ鏡・硯などありて、ふるきものと見ゆ。鏡は墓のほとりよりほりいだせりとぞ。又、伊勢の像といふ絵もあれど、こはあまりふるからぬものと見えたり。この寺の縁起、元政上人のかきたるが一卷あり。この寺の庭もけしきいとよし。伊勢のこのところにすまれたる跡なりといふにつけて、例の昔をしのびて、

見すて、や草の庵をむすびけむあひもおもはぬ玉の台と

この里よりすこしゆきて大路にいづ。こはあくた川といふにかよふ道にて、おほくはあらねど、旅人のゆき、もこれかれある道也。金龍寺にまうづるまこ

との道といふも、この道のこと也。高槻城といふもちかく見ゆ。丹波谷・安満・梶原などいふ里をすぎて、神南にいたる。

このさとの入口に森ありて、今も神並の森といふは、『古今集』の歌の詞書に、「山崎より神南の森までおくりに入々まかりて」とあるによくあへり。又おなじ集に、「神並の山をすぎて、立田川をわたりける時に」とある立田川は、大和にはあらで、この所なりと、故大人のいはれたることのあるによりて、その立田川はいづれならんとたづね見れど、さいふべき川は見えず。このあたり山のかたはらなれば、このさとのほとりなる山を神なび山なりとはいひつべけれど、立田川といふべき川の見えぬは、くちをし。この神南を山城国乙訓郡なりといへるは、おしあてにて、神並と今もいふがたゞしき証にて、杜さへもあれば、この所なるべし。『源重行集』に、「山崎川を立田川といふを、つくしへゆく」とあるをおもへば、今のよど川のことを立田川といひしものかともおもはるれど、さにはあらざるべければ、いかゞともわかりがたし。

神並より八町ゆけば、もとの桜井也。又、広瀬をもすぎ、それより東大寺・関戸などいふさとをすぎて、山崎にいたる。この間に摂津・山城の国さかひありて、この山崎は山城国の乙訓郡なり。離宮八幡の御社にまうづるに、きら／＼しくめでたし。

宝寺・観音寺にもまうで、山崎の里を出はなれて、円明寺村といふをすぎ、しばしゆけば道のかたはらに『式』に見えたる「小倉神社」おはしますが、今も大きな御社也。このほとりより長岡天神にまうづる道あれば、その道に入てしばしゆきて御社にまうづるに、御前におほきなる池ありて、いと神さびたるところのさま也。御社よりいさ、かゆきたる所のさとを、すなはち長岡といへり。このあたりは桓武天皇のしばしのうちましまし、都のあとなりとおもへば、なつかしくおぼえて、

その名のみながくのこりて長岡やありし都の跡はふりにき

長法寺村といふをすぎて、粟生村といふにいたりて、光明寺にまうづ。こ、も名だかき寺也。大原・小塩のかたにもこのあたりよりゆく道のあれば、ゆかまほしけれど、さてはけふのうちに都につくことかたしといへり。さるを都のかたに何となく心のいそがるれば、例のえゆかずしてやみぬ。

井内村といふをすぎて、向日町にいたる。この間の道より東山のとほく見えそめたるは、故郷人にまづあへらんやうにおぼえてうれしきも、かつはあやし。

このむかひ町の入口に島坂といふ坂あり。こは『土佐日記』にも見えたり。この町に『式』に見えたる「向神社」のおはしますにまうで、それより寺堂・下久世などいふさとをすぎで、久世村にいたる。このさとの入口に木ぶかき神社あり。桂川の下なる川の橋をわたりて、石原・吉祥院・唐橋などいふ里をすぎで、四塚のさとにいたるに、このさとにむかしの羅城門の跡といふがあり。かくて、東寺のうちをとほりて稲荷の御旅のほとりにいでたれば、神輿にまうで、三条の宿に又かへりつきぬるは、故郷にかへりたるこ、ちにもまさりて、うれしくなむ。まことに都ばかりよき所は外にたぐひなかるべし。いづこ、いかなるところなりとて、故郷よりなつかしくおもふべきものは。かへすくもよきところにて、すま、ほしくこそおほゆれ。

四月七日

七日。雨ふる。
きのふのみちにてつかれたるに、あす比叡の山にのぼらんとおもふこ、ろあれば、足をやすめんためにとて、いづこにもゆかす。

四月八日

八日。きのふの雨はれて天気よければ、かねておもひしごとく、比叡山にのぼらんとす。けふは花橋といひて、一年のうちにこの山のにぎほふかぎりなり。朝とくいで、加茂川の堤をのぼりて田中村・一乗寺村などをすぎで、雲母坂といふよりのぼらんとす。その道に林丘寺宮といふあり。雲母寺不動といふもあり。しばしのぼりたる所に音羽御所といふがありて、あらがきゆゑくしくつくりめぐらされたり。こ、はすなはち修学院の行宮の山のうへにて、太上天皇の行宮なり。このところよりいさ、かゆけば、むかひには音羽滝といふ滝ありて、こなたの山の行宮もいとよく見えたり。この行宮は、この滝を見給ふ為なる行宮にて、尾花にてふかれたるかりそめの行宮なり。そのさまいとみやびやかにて、「秋の野の尾花かりふきやどれりし」といふ、ふるき歌のさまもおもひいでらる、かり宮也。この所のさまは、山のた、ずまひ、滝のけしきなど、えもいひしらずおもしろき所にて、言の葉にはのべがたきばかりなれど、よ、かけてたえぬみゆきの行宮をつくる音羽の滝のしら糸
たきの糸のかゝるみゆきによ、とほく音羽の名こそ音にきこえぬ

滝の糸のむかしをかけてこの山に尾花かりふくかりほなるらん
道さがしけれど、けふはこの坂をしものぼりたるは、このところのさま見まほしければ也。

さて、『古今集』に「ひえの山なる音羽滝をみて」とあるも、この滝のことなるべし。又「音羽川せきいれておとす滝つ瀬に」といふ歌の所に、「西坂本の山莊の滝の岩にかきつけ、る」とあるは、この所ひえの山の西おもての坂の本なれば、西坂本といへるものなるべし。坂本といふが近江のかたにあるも、所の名にはあらで、坂の本なれば、さいへるが、やがて所の名となりたるものなるべし。

水呑峠などいふをすぎで、のぼりはてたる所、四明が嶽にて、けふはかすみたれど、猶けしきよく見たしひろし。この坂路はすべてみわたしのよければ、ふもとよりさばかりとほくけはしき坂路も、そのながめに心うつりて、あるはたちやすらひなせしかば、さまでにおおえざりしかど、くるしくなきにもあらざりき。

講堂・戒壇堂・中堂などいふにまうづるに、この中堂のまへにいらかたかき山門もあり。すべて堂などのたてさま、いとめでたきものから、さのみきらくしくもあらで、いとたふとし。山のた、ずまひもかうくしくて、まことにたふとき靈地なり。仏所にかばかりたふとき所は、たくひもあらじかし。

ふたつなき御法うごかで比枝の山三の宝は今もくちせず

これより五十町の坂路をひたくだりにくだりて、坂本にくだらんとす。あふみの海めのしたに見えて、いとけしきよきところあり。そのあひだに山ふかきけにやあらん、さくらの一木咲のこりたるは、いとめづらしくて、「山たかみ見つ、わがこし」といふ歌も、この山にて貫之ぬしのよまれたるなりとおもひいで、

夏かけてのこるさくらは比枝の山風もこ、ろにまかせざりけむ

くだりはて、坂本なる山王の御社にまうづ。「日よしの山王」と今はいへど、こは住吉を「すみよし」といふがごとく、日吉を「日よし」といひあやまりたるにて、則、『式』に見えたる「日吉神社」の御ことなり。されど、その『式』なるは何座ともしるされねば、一社のこと、おもはる、を、この坂本には七社ませり。外にも十四社ましくて、山王廿一社と俗にいひて、御名もほとけめきたるがおほし。その中に大宮とまうすがおはしまして、御名のごとく宮もお

ほきなるは、これが大山昨の神にて、外はこの寺につきたる仏神にはあらざるか。又、『三代実録』に見えたる「大比叡神」「小比叡神」などいふも、この中におはしますか。仏さまの名に成給へるか。こはこゝろみにいへるのみにて、くはしくたづねたるうへならでは、かならずかくとはいひがたかるべし。そはとまれかくまれ、すべての宮みきらくしく、いとまたふときところのさま也。

坂本・下坂本などいふ里をすぎて、唐崎にいたる。唐崎明神といふがおはしますにまうで、みわたしたるみづうみのけしき、いとおもしろけれど、沖のかたに霞のふかきは、いさゝかこゝろにかゝれり。

からさきやみるめなき名のたつもうし霞ふきとけ志賀の浦風

とあつらへつけまほしくおぼゆ。名だかき松の木はいとおほきなる木にて、枝さしひろく、よにめづらしき木立なり。あらし風などにあたらん時のためにや、枝ごとに杖をつかせたり。

むかしよりかはらぬ色も老見えて枝に杖つくからさきの松

この松は「たがよにひける子日なるらん」とよみし木にはあらで、天正十九年といふとし、ふるき木のかれたるをなげきて、なにがしのうゑたるなりといへり。

これより山中越といふを京にかへらんとて、からさきの里を出はなれてしばしゆけば、志賀の里にいたる。このさとおほきなる八幡の社はします。

さて、このさとより坂路にかゝりて、たむけにのほりたるけしき、比えの山におなじく、あふみの海まぢかく見えて、いひしらぬけしきなり。

この峠よりくだりはてたところ、山中村なり。よりて山中越といふなるべし。むかし志賀山越といひしは、この道のこと、いひ、また外にありといふ説もあれど、いまも志賀の里といふよりのほる道なれば、この道のことなるべくや。

こえしその言葉の花はむかしにて緑をわくる志賀の山道

かくて、申の刻ばかり宿にかへりぬ。唐崎より三条までの道のほどは三里なりとぞ。

四月九日

九日。

大坂よりかへりてのち、都の人々をとほざれば、けふはこれかれとぶらひて、夕つかた宿にかへりたるに、故郷よりいそぎのふみきたり、何ごとにやとひら

きみれば、この六日の朝、妻のやすく子うみたるよし、いひ来たりて、そをひらき見たるこゝろのうち、うれしともうれしくなむ。

四月十日

十日。

けふは上の卯の日なれば、稲荷祭なり。こはさきにせるごとく、三月の十九日、旅所に入りましたるが、けふもとのみやしろにかへり給ふなり。すべての神祭、御社に旅所よりかへりたまふを祭といひて、いでまし入るを御出といへり。この御祭は、午の日に出来て、卯の日にかへり給へば、「うま〜い、うか〜もどる」と俗にいふ御祭也。

けふは東寺にて神供をたてまつる儀式、古風なりとき、しかば、見奉らんとて、午の刻ばかりより東寺にものす。この寺のかきつばたさかりにて、いとおもしろきに、かの神供には今しばしほどあれば、池のほとりの茶屋にしりうちかけて、その花を見居たるほど、

法の庭よそにへだて、むらさきの雲とは見えぬかきつばたかな

未の刻ばかり旅所をいでまして、南門といふより、かの神輿入ませり。一社ごとに門をとぎして、かしましくその門の戸をた、けば、ひらきて入奉る。入給ふとき、一社ごとに螺貝をふく。そのさまいきほひありて、いさまし。かくて、つぎ〜に五社の神輿を金堂のまへにすゑ奉れば、よろひかぶとをきたる人、左の手に長刀をもち、右の手に神供のもちひをさ、ぐ。又、打かけといふものをきたる女ども、頭にくさ〜の神供をいたゞきてそなへまつれば、この寺の僧の三人して、何ごとをかゆゑゆゑしくとなへて、をがみ奉ることなどあり。すべてそのさま古風にて、たふとし。されど、けふは見奉るのみにて、わが身きのふ故郷よりきたる文のことにて、けがれたれば、いみは〜かりてをがみ奉らず。

さて、けふ神輿のこの寺に入給ふは、いかなることならん。そのゆゑよしもき、たれど、うべなりともおもはれぬは、いぶかしくなん。

それより松原通にて還幸のさまを見奉るに、やよひのいでましにかはることなけれど、けふの神主たちのかざしは、かつらにて、そのみ三月にかはりたり。こは杉のかたこそふるきためしおぼえて、たふとけれ。

四月十一日

十一日。

このころ蓮華王院のかきつばた盛なりとき、て、けふは見にものせんとす。かゝる名だかき花のことなれば、ひとり見にものせんもはえなしと、鴨川の岸に咲たるゆかりの色をさへともなひて、ひるつかたより見にもす。

かくてその院の池のほとりなる茶屋に入て、さゝごなどひらきつゝ、日ねもす見居たるは、たとへむかたなく心ゆくあそびにて、田舎人には花の色うへなきたのしみとやいふべからむ。

むらさきのにほへる子らとへだてなく見るはたのしきかきつばたかな

かたへなるゆかりの色もとりくくにほひへだてぬかきつばたかな

四月十二日

十二日。

人にいざなはれて、申の刻すぐるほどより、生洲といふにもす。こゝは四条の橋のほとりにて、東山のけしきなど、宿りより見なれたるには、そのさま又かはりておもしろし。

けふはいとあつき日なりしかば、くれかゝる川瀬の風の楼に吹いる、こゝち、いとこゝろよくおぼえければ、

夕まぐれすゞしさあかず吹よりあつさをいそぐ加茂の川風

むかひのきしの家々の楼にもしつらねたるもし火のひかり、いとほなやかにてりかゞやきて、いやしきものながら、これもひとつのながめなり。

影ながくせゞにうつりてかもがはや月にもまさる岸のともし火

四月十三日

十五日。

けふは中の午の日なれば、御蔭祭ををがみにものす。そもこの御蔭祭といふは、ちかきに葵祭のあるにつけて、御蔭山にいます神を下加茂の社にむかへ奉る祭なり。下加茂の社の祢宜・祝などいづれもあふひかつらをかざし、騎馬にて神馬に錦蓋をかけ、翳をもちて、その神馬の跡先につかへ奉りて、下加茂の社をいでたつ。そのいでたちに、路楽ありて、その楽は衆人つかへまつれり。御蔭橋とて、あらたに橋をもかけたる、そのはしのほとりにてをがみ奉る

に、そのさまいとたふとし。

それより御蔭社にまうで、社頭の行事をもをがみ奉らんとおもへば、その社のかたにゆかんとす。山嶮・高野などいふをすぎて、その御社にいたるに、この御社は比枝の山のふもとにおはしまして、その所を御蔭山といひて、いと神さびたる所也。今ものしたる道は、その祭のかよはぬ道にて、そのかよふ道よりはほどちかければ、いまだその祭のこの所にいたりつかぬさき也。さるは、この御社につき給ふところを見奉らんとて、いそぎたるになん。この間に御社にもまうで、をがみ奉るに、御社は二座おはします。

此山に天の御蔭といやたかく千木たかしりています大神

ほどなくかの祭つき給ふが、先、鳥居を入て、それより路楽あり。又、御社に入て音楽を奏す。こは神供を奉る楽なりとぞ。又しばしありて、神うつしの音楽といふあれば、ほどなくいでましてあり。このふたゝびの楽は、音のきこゆるのみにて、いと見奉らまほしけれど、みだりに人のよることをゆるさず。はじめのごとく又、鳥居のほとりまで路楽ある、そのさまををがみて、もとの道を下加茂にかへる。その道より見奉れば、はるかむかひのみちをいとながく八町ばかりもつゞきて、その祭の見ゆるさま、めでたし。

かくて、下加茂にてしばしのほどまち居て、御社に入ます行事ををがみ奉る。この御社に入ますところ、けふの祭のとふときかぎりなり。まづ神馬のさま、いひしらずたふとくて、げに神ののりくるさま、いちぢるし。この神馬を錦のとばりかけたるかりどのにひきいれ奉りて、さし葉・神宣などもちたる人は、そのほとりにゆゑしく胡床にかゝれり。

かくて、祢宜・祝はつぎ／＼にすゝみて、この仮殿の前にうや／＼しくぬかづきて、つぎ／＼に列をさだめて、そのかりどの、ほとりに胡床にかゝり、その次には衆人のひとり／＼にぬかづきて、こはそのかりどの、前にのこらずたちならびて音楽をはじめれば、神をもちたる官人、唯と称して御先おふ声たふとく、さきだちゆくその跡につきて衆人は音楽を奏しながらねりゆけば、神馬もかりどのをいでまして、社のかたに神幸あり。

かくて、神宝もちたる人どもは、御先につかへ、神主・祝は御供につかへて社に入ますと、又、神供の音楽といふがあり。すべてのさま、くはしくはかきとりがたし。まことにいひしらず、たふとき祭なり。

そのたふとさのあまりによみたるながうた。

久かたの 天のみかげ 天つたふ 日の御かげと 大御名は た、へまつりて 千早ふる かもものやしらの そともなる みかげの山に 千木たかく 宮ぬまします かしこきや その大神を 千はやふる かもものやしらに 天皇の うづのみてぐら とりもたし さ、げ給へる 御つかひの たつるをちかみ けふはしも むかへまつると その宮の 氏人つどひ大神の 御馬ひきたて その山に いゆきいたりて 大前に うなねつきぬき 広前に ひざをりふせて 大神を うつしまつれば 大神は 御馬にのらし いでましの あるをかしこみ うつしおみ ますがごとくに 玉鐙の 道の長手を 大御供 つかへまつりて 千はやふる かもものやしらに 神ながら 入ます時と つゝみうち ふゑ吹ならし 御心を いさめまつるを かけまくは かしこけれども ほどちかく あふぎ見まつりむらぎもの 心もしぬに たふとくおもほゆ

かへし歌

けふまつる天のみかげの神わざをあふぎみまつることのよろしき

この祭はものもたしかに見えたることなれば、よの人はもとより、ものしり人たちもしりたるはすくなければ、かばかりたふとき神祭の、よにひろくしられぬこそくちをしけれ。この神祭のさま、ちかきよにはじまりたるものは、をさく見えず。そのおごそかなること、ふるくよりつたはりきたる祭にうたがひなし。よりにかながへみるに、この神祭のものに見えぬも、ことわり也。そはこの祭は、もとより加茂の社の祭にて、朝廷の年中行事にか、づらはぬ祭なれば、『延喜式』、又は朝廷の記録に見ゆるいはれなければ也。漸ものに見えたるは、『中原康富記』に「嘉吉三年四月廿一日丙午。鴨御蔭山祭如例」と見えたるのみ也。【抹消…この神の御ことは、為家卿のうたに「家集」「ちぎりおきてくもらぬ神のみかげ山むかしのあとぞいまもかしこき」と見えたり。みやしるのことは、今少しふるくも見ゆべきに、その見えぬは、いさ、かこ、ろ得ず。この神祭のこと、さだめて加茂社の旧記などには見えたるべし。ものよくしりたる神主のあらば、くはしくたづねてしるしおかまほしくおほゆ。ある説に、御蔭神は、天照皇大神と豊受大神なりともいひ、又、加茂大神のはじめにあまくだりませる所なりともいふは、よりどころもなければ、いかゞにおほゆ】この祭は、心ある人はかならず見べき祭なるを、あふひまつりたことはよに名だかければ、よくしりたる人おほけれど、この神祭の名をだにしる人すくな

きことは、かへすくもくちをしくなげかはしきことと、おどろかしおくになむ。

四月十四日

十四日。

ちかきあたりの人のもとを例のとぶらひて、夕つかた宿にかへりぬ。こよひの月、いとよくおもしろければ、清水寺にまうづ。この寺の月のけしきをいまだしらざれば、ふりはへてまうでたるなり。げによるのさまはことさらたふとくて、まうづる人などもすくなく、ひるよりはこよなくものしづかなれば、こ、ろしづかに舞台のおばしまによりか、りて見るたるほどの月のけしき、たとしへなくあはれにおもしろし。

あかざりし花のなごりもわすれけり影清水の月にうかれて

花とのみひかりちらして青葉にも心さわがすみねの月影

四月十五日

十五日。

ゆふつかたより祇園の社にまうで、そのあたりうかれあるきなどして、くれふかく宿にかへらんと、三条の大橋をわたるほど、はしのうへより見わたしたるに、月いとさやかにて、ひるのごとく、所々もいとよく見ゆるさま、あかづおもしろくおほえければ、た、ずみ居たるほど、

影きよみ都のふじはみどりにて川瀬につもる月の白雪

四月十六日

十六日。

かねてよりまちもふけたる中の酉の日なれば、葵祭をがみにものす。

朝とくい、まづ御社にまうで、をがみたてまつるに、神主・祝などのこらざいで、神御衣のぬぎかへといふあり。こは、冬の神御衣を夏の神御衣にかへ奉るなり。その後には神供をたてまつる行事あり。

これより祭ををがみ奉らんと、鳥居のほとりにてまち居たるほど、しばしありて辰の刻ばかりに勅使をつとめたまふ高野殿、御馬を鳥居のほとりにておりに入給ひて、小屋の内にて御祓といふ有。それより主水司、御手水つかへまつれば、やがて御社のかたにす、み給ふに、楽人・陪従、歌もの、音を発て、ね

りながらしたがひたてまつる。

かくて勅使、舞殿の階下にて内蔵使に宣命をうけとり給ひて、舞殿にのぼりてよみたまふ。その紙の色はむかしのためしのごとく紅梅也。

さて、祢宜より葵桂を白木の枝にはさみて、御使にたてまつれば、みづから冠にかざし給ひて、舞殿をおりて廻廊のすだれのうちにいこひ給へり。それより内蔵寮の史生は、御幣物を案上におき、馬寮使は神馬をひきて舞殿をめぐる行事などあり。此ことは、御使、廻廊をいで、舞殿のほとりに胡床にかゝりたまへば、陪従そのほとりにすゝみて「東遊」有。歌人は笏拍子をうちてうたひ、和琴・笛・箏の声をおのゝたつれば、これにつけて舞人六人舞殿にのぼりて「駿河舞」をまふ。この舞おはれば、衣の肩をぬぎて「求子」をまふ。このまひにて神前の行事はをはり也。中にもこのふたつの舞のさま、優にめでたし。

さて、山城使は舞殿のかたはらに胡床にかゝり、檢非違使は鳥居よりうちに入らで、外のことをまもれる也。それより社人、烏帽子・淨衣にて、馬場にて走馬とて、馬にのりてひたむきにはしることあり。そのさまいさましく見ゆ。

かくて又、路のよそほひををがみたまつらんと、葵橋とて、この祭のためにかゝりたる橋のほとりにてをがみ奉る。まづ先は檢非違使二人にて、山城使・内蔵寮・史生・馬寮使と、つき／＼にいづれも騎馬にて、その次に御車を牛のひきゆくさま、ことにたふとし。こは、をさ／＼見ることのかたきものなれば、ことさら心とめて見奉るに、そのさら／＼しき、めもおどろくばかりにめでたし。その次には舞人六人、その次に勅使、騎馬にて、けさたまはりし紅の打袖をかたにかけさせ、風流がさといふ、うるはしき花笠をさゝせて、御供人の衣にもつくり花をつけて、ねり給ふさま、花やかにめざまし。この次は陪従六人、その次は内蔵寮、これも風流がさをもたせて、いづれも騎馬也。すべてその行列のさま、今のよのまつりにはこよなくかはりて、たふとさいはんかたなく、いはゞ中々おとるべく、かつは有職のことにおのれうとければ、くはしく筆にはえかきとらずなん。もとよりけふの神祭は、供人にいたるまでも、なべてあふひかつらをかざせるさま、みやびやかなること、いふもさらなり。

石川や 蟬の小川の いやその 底つ岩根に 宮はしら ふとしきた
て、 万代に しづまりいます かしこきや 御祖の神を 皇孫の 大御
こともて 千早ふる 卯月のけふは ねもごろに まつりたまふと もろ

くの 官人たち 御よさしの 御ことかしこみ 内蔵司 おのがつかさと
たてまつる みてぐらもたせ 馬つかさ おのがつかさと たてまつ
る 御馬をひかせ むき／＼に つかへまつれり ほどちかき まもりの
つかさ 御使を つかへまつると 小車の おともごらに のるこまの
あゆみものにと 広前に いゆきいたりて みことのり 神にのらせり
舞人は あづまあそびを うたひまひ いさめまつりて いにしへの た
めしかはらぬ けふのこの 大御祭は かしこきや 御祖の神も 神なが
ら よろこびまして 皆人の けふとりかざす もろかづら いやとほな
がく 色かへぬ 二葉のごとく 君が代を ときはかきはに まもりたま
はむ

又よめるみじかうた。

神まつりむかしのためしひきつれてあふひをかざすけふのもろ人

まつりするけふをうれしと神も猶卯月の中のとりにて見るらむ

めづらしな言の葉にのみかけなれてあふひはけふをはじめ成けり

よそながらあふぐわが身も言の葉はかけてみあれのあふひなりけり

もろかづら心にかけてあふぐかな神につかふるわが身ならねど

ちぎりありてことしあふひのもろかづら心にかけしあひはありけり

心にもかけてわすれじあふひぐさまた小車のめぐりあふまで

まことにこの祭ををがみ奉らんとおもふこと、年ひさしかりしに、こたびをがみて本意とげたるは、たふとくもうれしくもなむ。

さて、上鴨の御社にもまうでむとおもひしかど、御社の行事は下におなじことなりときけば、道もとほきゆゑにまうでずして、宿にかへりぬ。

四月十七日

十七日。

かねてよりおもひ居たる、あふひ祭もをがみ奉りて本意とげたれば、猶ゆかまほしき所々はおほけれど、さのみいひをらんもかぎりなかるべければ、又の時と例の、こしおきて、心にはあらねど、十九日には京をたちて故郷にかへらんとす。

されば、けふは日ごろたづねかはしたる人の家にもいとまごひといふものにも、又家づとにすべきくさくさのものなどをかひにものす。

さて、こよひある人のとぶらひきて、「あす大内に能といふものありて、よきつてあれば見にもせんや」といふ。「今は京をいでたつにほどちかければ、心はいとなけれど、しひてゆかんには行ことのかたきにあらねど、いさ、かおもふよしあれば、えゆかず」とこたえぬ。

四月十八日

十八日。

あすはいよ／＼いでた、んとおもひさだめたれば、そのまうけに荷の緒ゆひかためなど、いろ／＼なすことおほければ、心もいとまなくて、未の刻ばかりまですしぬ。

さて、都の名ごりいろいろたゞならぬは、今一度、東山わけ見んとて、未の刻すぐるほどより智恩院^(註)にゆきて、それより祇園御社にまうで、長樂寺・高台寺・清水のあたりまでもものす。さらぬだにあかぬ所々なるを、都をわかる、名ごりさへそひて、あかぬこ、ろはたぐひなけれど、ひたすら明日のこと心にかゝりて、かつはこ、ろよからずなん。かゝるをりには、このところ／＼のおもしろさも、なか／＼にものおもひの種なりかし。

立かへるうらみもかけてひがし山真葛が原になごりをぞおもふ

よをいとふ心ならねど東山すま、ほしくもおもほゆるかな

かへるさ大橋をわたるとて、

わたるべきあすをおもへばかねてよりなごりたちそふかもの川波

宿にかへりて後、東山よりいづる月を見たるに、これもことさらあかずおほえて、

あすはわれかへるとおもへば東山いでくる月のうらやまれつ、

まことにこたびは嵐山の花よりかけて、あふひ祭などをも見奉り、名だかき所々おほくたづね見たるは、何よりの身のさきはひにて、よろこばしさとへんものなし。中にもことにめにとまりたるは、あらし山・東山の花、あらし山の青葉、かけまくはかしこけれど、御蔭祭・葵祭のさまなどにて、こは心にしみてぞおほえぬる。

四月十九日

十九日。

けふは都をたちいでむとす。朝とく三条の旅居を立いづるに、かねておもひしにも猶まさりて、日ごろのなごりいとたゞならず、四十日あまりもこの家にあたり居て、わが家のごとくせしかば、まして別のかなしくて、

あかすのみ日かずかさねて旅衣たつや都のをしくもあるかな
家人にほどなくあはむ旅ながら都のわかれかなしかりけり

ことになごりおほきは、東山の別也。さるは、もとよりわが心に東山のけしきをいたくこのみて、朝ごとにはまづうちむかひつ、むつまじき友どちのやうに日頃見なれたるを、けふしも見すてゆくことは、心もたへがたきまでおほゆれど、人はいはむもおこがましければ、ひとりごとに、

花になれ月にむかひし東山ひとかたならぬわかれをぞする

朝夕にむかひなれては東山ひとにもまさるわかれなりけり

ながめつ、わかれかぬるを東山ひがこ、ろとや人はおもはん

白川橋をわたりて、粟田山をこゆれば、都のかたの今は見えずなりゆくも、故郷のわかれにまさりてかなし。

こえぬれば都へだて、あはた山あはとはかなきながめをぞする

このあたりに松坂といふ坂あれば、

松坂の名もなつかしくおもほえずたゞ都のみしたふなごりに

心もす、まず、とにかく都のことをおもひつゞけてくるしきは、我ながらあやしくなむ。

故郷をこゝろやはやくすみかへてかくは都のこひしかるらむ

山科をすぎて、あふさか山をこゆるほど、

あふさかの関の清水もわかれゆく袖になる、こゝちのみして

大津より船にのりて、矢橋にわたらんとす。こは、くがちをかよふよりは、こよなくちかけれど、都のかたのはやくとほざかるをおもへば、なか／＼にうれしからず。

かへり見て都のかたにこがる、をいそぐ矢橋の舟もつれなし

なか／＼にいるがごとくにゆく船はつらき矢橋のわたりかねつ、この舟のうちより見たしたるけしき、いとおもしろけれど、それもめにはつかで、たゞ都の空のみながめやるゝは、心くるしくなむ。

ほどなく矢橋に舟はてぬ。こゝのさとに鞭崎八幡宮といふおほします。川の下・大塚・矢倉などいふをすぎて、草津にいたる。それより何くれのさとをす

ぎて、石部にいたる。そのあひだの道より比良の山を見るに、ゆくさにはまだ雪しろかりしを、今は青葉のけしきのよそながらいちじるきを見て、

雪の色もかはるみどりにひらの山つもりし旅の日数をぞおもふ

水口の宿の入口にて日もくれか、りぬるに、小田の蛙の声しげきこゆるは、「をりにあへば」など、うちずんじられて、いとあはれ也。

里の名をうちいでがほに声たて、かはづなくなり小田の水口このさとの川内やながしといふもの、いへにやどりぬ。

四月二十日

廿日。

暁ふかくめざめたるをりから、ほと、ぎすの二声・三声鳴ければ、

おもひいづる都の夢をさませとやねざめとふらむ山ほと、ぎす

いまだあけはなれぬほどに宿りをいで、土山の宿にいたる。その土山より鈴鹿山にかゝるほど、雨ふりいでたるは、いとわびし。「家もあらなくに」など、例のうちずして、

くるしさもわする、ばかりふりいで、なげや鈴鹿の山ほと、ぎす

ゆくさにはこの山をこゆるにもいきほひありて、さのみくるしもおもはざりしものをなど、おもひいで、

都にとゆくさのいそぎふりかへて足もす、まぬすゝか山かな

されば、すぎゆく道のこと、くはしくかきつけなどするものうくて、それもゆくさのをりにはふりかはりて、みだりなるものぞかし。たむけをこゆるほどはいみじくふりいで、今一きはわびし。

都おもふなみだの雨に袖ぬれてわれからまよふけふの山道

坂の下をすぎて、筆捨山のほとりにていこひ居たるほどは、さすがにけしきおもしろくおぼえければ、たゝむとするをり、

筆ならであかぬけしきも見つるをこゝろなしとや山はおもはむ

関の宿もちかきあたりなる、かたへの山にて、鶯のなきければ、

うぐひすとわれのみなくは旅人のたももしらぬ声とこそきけ

楠原の宿をすぎ、椋本の宿にいたりて、

ふりかへりそなたにむくもとほくなる都をおもふこゝろなりけり

いまだ日くれねど、雨ふりてわびしければ、この宿の大黒やながしといふ

もの、家にやどりぬ。

四月二十一日

二十一日。きのふの雨なごりなくはれて、天気よし。

朝とく宿をいで、豊久野・長野をゆくほど、例のゆくさよりは道のながきこゝちのせられて、らうがはし。窪田をすぎて、津にいたる。

あこぎがうらのほとりにて、

ひく鯛のたびの日かずもかさなりてあこぎがうらを見るもめづらし

高茶屋・雲出をすぎて、三渡にいたれば、むかひにとてきたる人々まちあひたり。

花と見し川瀬の波を立かへるゆかりとけふは三わたりの里

かくて、未の刻ばかり故郷につきたるは、何のはえなきものながら、うれしくおぼゆるも又あやしくて、

さすが猶都になれしこゝろにもひなのすまゐのめづらしきかな

とまげじだましひにのみたるものながら、都のなごりはわすれがたきまゝに、そのこゝろをもなくさめ、かつはあまたの日数のうち、おほくのところぐを見めぐりたることを、心のうちにのみこめおかむも、あたらこゝちのせらるれば、錦ならぬ色なき言の葉に、そのことどもをかきとめて、『柳桜日記』と名づけたるは、人に見する心にあらず、後しのばんためのすさみになん。

文政十一年といふ年のうづき廿一日

小津久足

『柳桜日記』の調査・翻刻をご許可いただいた三重県立図書館、また同諸本の調査をお許しいただいた日本大学図書館・天理大学附属天理図書館に心より御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費(19K00300, 23K00320)による研究成果の一部である。

A Transcription of Ozu Hisatari's "Yanagisakura Nikki"

Kenji Hishioka

A Transcription of Ozu Hisatari's "Yanagisakura Nikki". Ozu Hisatari was a merchant of the Edo period. "Yanagisakura Nikki" is a travelogue of his visits to Kyoto and other places.